

国立国語研究所学術情報リポジトリ

Teaching Writing

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-03-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 国立国語研究所, The National Language Research Institute メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001838

日本語教育指導参考書14

文 字 ・ 表 記 の 教 育

国立国語研究所

刊行のことば

「日本語教育指導参考書」は、外国人に対する日本語教育に携わっている方々の指導上の参考に供するために刊行するものです。

今回は、その第14編として「文字・表記の教育」を刊行します。本書は、
加藤彰彦氏（実践女子短期大学）

伊藤芳照氏（大東文化大学）

に執筆をお願いしたものです。両氏の御尽力に感謝の意を表するとともに、
本書が教授上、研究上の資料として適切に活用されることを期待します。

昭和63年 3 月

国立国語研究所長

野 元 菊 雄

目 次

第1章 日本語の表記の基準	加藤 彰彦	1
1.1. 常用漢字表		1
1.1.1. 字数		2
1.1.2. 音訓		6
1.1.3. 付表		11
1.1.4. 字体		13
1.1.5. 筆順・画数・部首		19
1.1.6. 簡体字との比較		20
1.2. 現代仮名遣い		22
1.2.1. 原則にもとづくきまり		24
1.2.2. 表記の慣習による特例		24
1.2.2.1. 助詞 は、へ、を		24
1.2.2.2. 四つ仮名		24
1.2.2.3. 長音		25
1.2.2.4. 付記		27
1.2.2.5. 「現代かなづかい」と「現代仮名遣い」の内容の対 比		28
1.3. 送り仮名の付け方		29
1.3.1. 送り仮名の付け方の移り変わり		29
1.3.2. 新旧「送り仮名の付け方」の比較		32
1.3.3. 送り仮名の付け方の要領		37
1.3.3.1. まず、活用語尾について考える		37
1.3.3.2. 次に、派生や対応がないか考える		37
1.4. ローマ字のつづり方		41
1.5. 外来語		45

1. 6. くぎり符号	47
〔総合問題〕	48
第2章 表記についての質疑応答	加藤 彰彦 50
2. 1. 漢字について	50
〔Q1〕 日本語教育では、漢字を何字ぐらい教えればよいのです か。	50
〔Q2〕 漢字の提出順位をどう考えたらよいですか。	51
〔Q3〕 学年別漢字配当表は、参考になりますか。	52
〔Q4〕 旧字体というのは、どんなものですか。	53
〔Q5〕 活字体と筆写体の違いについて	54
〔Q6〕 木の第2画をはねるか、はねないかについて基準はあり ますか。	54
〔Q7〕 「必、臣、馬、上」の筆順について	55
〔Q8〕 画数の数え方で注意すべき点について	57
〔Q9〕 新聞で、常用漢字表外字を使っていますが、どんな字が ありますか。	58
〔Q10〕 振り仮名を使ってもよいですか。	59
〔Q11〕 音訓は、なぜ決まっているのですか。	60
〔Q12〕 常用漢字表の付表というのは何ですか。	61
〔Q13〕 人名用漢字別表に掲げられている漢字の読みは決まって いますか。	62
2. 2. 仮名遣いについて	63
〔Q14〕 「ユー」と発音するのに、なぜ「いう（言う）」と書くの ですか。	63
〔Q15〕 「センセー」と発音しているのに、「せんせい（先生）」 と書くのは、なぜですか。	63
〔Q16〕 「こんにちは」を「こんにちわ」と書かないのは、なぜ	

ですか。……………	64
〔Q17〕 「いちじるしい」を「いちぢるしい」と書かないのは、 なぜですか。……………	64
〔Q18〕 「にいづま（新妻）」のときは「づ」で、「いなづま（稲 妻）」のときは「ず」になるのは、どうしてですか。……………	64
〔Q19〕 「じしん（地震）」を「ぢしん」と書かないのは、なぜで すか。……………	65
〔Q20〕 「とお（十）」を「とう」と書かないのは、なぜですか。……………	65
〔Q21〕 時間の「じっぶん（十分）」は、「じっぶん」ですか、 「じゅっぶん」ですか。……………	66
〔Q22〕 「こおり（氷）」を「こうり」と書かないのは、なぜで すか。……………	66
〔Q23〕 「もとづく」を「もとずく」と書かないのは、なぜで すか。……………	66
〔Q24〕 「せかいじゅう（世界中）」は、「せかいぢゅう」ではあ りませんか。……………	67
2.3. 送り仮名について……………	67
〔Q25〕 公用文の送り仮名における許容の語について……………	67
2.4. ローマ字について……………	68
〔Q26〕 駅名に「SHINJUKU」（新宿）とあるが、 「SINZYUKU」ではないですか。……………	68
2.5. その他について……………	69
〔Q27〕 「あなた」を「貴方」「貴女」と書いてもよいですか。……………	69
〔Q28〕 「ご調査」「御調査」は、どちらがよいですか。……………	69
〔Q29〕 「…て頂く」と書けますか。……………	70
〔Q30〕 「…することがある」というとき、「…する事がある」と 書いてもよいですか。……………	70

第3章 外国人学習者に対する表記の指導	伊藤 芳照	72
3.1. 外国人学習者と日本の文字		72
3.1.1. 非漢字系学習者の困難点		72
3.1.2. 漢字系学習者の困難点		75
3.2. 入門期・初級段階		76
3.2.1. 仮名の読み書きについて		76
3.2.1.1. 平仮名の指導項目及び留意点		76
(1) 指導項目		76
(2) 平仮名の導入の仕方		77
(3) 平仮名指導上の留意点		79
(4) 助詞の「ハ・ヘ・ヲ」について		79
(5) 連濁・連呼の「ヂ・ヅ」について		80
3.2.1.2. 片仮名の指導項目及び留意点		81
(1) 45文字の読み書き		82
(2) 濁音と半濁音の読み書き		82
(3) 促音の読み書き		82
(4) 拗音の読み書き		83
(5) 長音符号の読み書き		83
3.2.1.3. 聴写における留意点		84
(1) 「聞いたとおりに書け。」ということについて		84
(2) 聴写における清濁表記の誤り		85
(3) 聴写における長短表記の誤り		86
(4) 聴写における促音表記の誤り		86
3.2.2. 初級の漢字指導		87
3.2.2.1. 初級・中級・上級の範囲と提出漢字数について		87
3.2.2.2. 字種について		90
3.2.2.3. 提出順について		92
3.2.2.4. 書き方指導上の留意点		94

(1) 字形について	94
(2) 筆順について	95
3.2.2.5. 漢字についての特徴的な情報の提供	95
(1) 使い方に特徴のある漢字	96
(2) 読み方に特徴のある漢字	97
3.2.3. ローマ字・数字・符号など	100
3.2.3.1. ローマ字	100
3.2.3.2. 数字	101
3.2.3.3. 符号	101
(1) 句読点	101
(2) 繰り返し符号	101
(3) その他の符号	102
3.2.4. 縦書きと横書き, ルビについて	103
3.2.4.1. 縦書きと横書き	103
3.2.4.2. ルビについて	104
3.3. 中・上級段階	104
3.3.1. 六書——形声文字の重要性	106
3.3.2. 部首についての知識	110
3.3.3. 漢字熟語の構成について	114
3.3.3.1. 2字熟語について	114
3.3.3.2. 3字熟語について	121
3.3.3.3. 4字熟語について	122
3.3.3.4. 5字以上の熟語について	123
3.3.4. 漢字熟語の読みについての知識	124
3.3.4.1. 常用漢字の音訓について	124
3.3.4.2. 「付表」の語の扱いについて	125
3.3.4.3. 熟語の基本的な読み方	126
3.3.4.4. 複合語の音変化について	128

(1) 字訓語の場合	129
(2) 字音語の場合	136
第4章 表記に関する評価と測定法	伊藤 芳照… 146
4.1. 初級段階の測定項目, 問題例, 留意点	147
4.1.1. 仮名	147
4.1.1.1. 片仮名	148
4.1.1.2. 平仮名	152
4.1.2. 漢字	160
4.1.2.1. 筆順・画数に関するもの	160
4.1.2.2. 部首や漢字の構成に関するもの	161
4.1.2.3. 多音訓字の読みに関するもの	163
4.1.2.4. 送り仮名に関するもの	165
4.1.2.5. 反対語・対語に関するもの	167
4.1.2.6. 主として漢字を書かせるもの	168
4.2. 中・上級の測定項目, 問題例, 留意点, 評価について	171
注 記	176
参考文献	180
漢字学習書一覧	180

第1章 日本語の表記の基準

(加藤 彰彦)

日本語は、主として漢字と仮名を用いて書く、いわゆる漢字仮名まじり文が一般的である。専門分野や個人の表記はともかく、一般社会生活では、ある程度の基準に従うことが、表記の不統一を避けるためにも必要なことである。その基準としては、現在、次の三つが挙げられる。

- (1) 常用漢字表（昭和56年10月1日、内閣告示第1号）
- (2) 現代仮名遣い（昭和61年7月1日、内閣告示第1号）
- (3) 送り仮名の付け方（昭和48年6月18日、内閣告示第2号）

いずれも政府の決定に基づくものであり、法令、公用文書、新聞、雑誌、放送など、一般社会生活において、日本語を書き表す場合の目安・よりどころとなるものである。

1.1. 常用漢字表

昭和56年（1981）日本政府が定めた1,945字の漢字表である。この漢字表に至る経緯は、次のとおりである。

- 昭和21. 11. 16 当用漢字表（内閣告示第32号） 1,850字
- 昭和23. 2. 16 当用漢字音訓表（内閣告示第1号）
- 昭和24. 4. 28 当用漢字字体表（内閣告示第1号）
- 昭和26. 5. 25 人名用漢字別表（内閣告示第1号） 92字
- 昭和29. 3. 15 当用漢字表審議報告（いわゆる当用漢字表補正資料）（国語審議会報告）（当用漢字表から28字削って、28字加える案）

昭和48. 6. 18 当用漢字音訓表（内閣告示第1号，昭和23年の内閣告示廃止）

昭和51. 7. 30 人名用漢字追加表（内閣告示第1号） 28字

昭和56. 10. 1 人名用漢字別表（戸籍法施行規則） 166字

このような経緯をたどったあと，字種・音訓・字体の総合表として「常用漢字表」が発表され，従来の内閣告示は廃止された。

結果として，当用漢字表1,850字に95字と音訓を追加し，康熙字典体^{こうき}の字（旧字体）を付記したことになった。二つの表の性格の差は，当用漢字表が日常使用する漢字の範囲を定めたのに対し，常用漢字表は，その制限的色彩をうすめて，漢字使用の目安としたところにある。

当用漢字表の漢字で書き表せない言葉は，別の言葉に替えるか，又は仮名書きにし，振り仮名は原則として使わないことになっていたが，常用漢字表では，この表に掲げられた漢字だけを用いて文章を書かなければならないという制限的なものではなく，専門分野や個々人の漢字使用は自由であり，必要に応じて振り仮名を用いてもよいことになった。

1.1.1. 字数

当用漢字表（1,850字）を検討した最初の結果は，昭和29年3月25日の国語審議会報告，いわゆる「当用漢字表補正資料」である。当用漢字表から28字を削り，28字を加えるというもので，総数1,850字は変わらないものであった。その後，

新漢字表試案（1,900字） 昭52. 1. 21

常用漢字表案（1,926字） 昭54. 3. 30

が発表され，次に内閣告示の「常用漢字表」（1,945字）（昭56）が発表されて，結局「当用漢字表」から削る字はなく，95字増えただけとなったのであ

る。

増えた95字は、次のとおりである。

猿 凹 渦 靴 稼 拐 涯 垣 殻 渦 喝 褐 缶 頑 扶 矯
襟 隅 溪 蛭 嫌 洪 溝 昆 崎 皿 棧 傘 肢 遮 蛇 酌
汁 塾 尚 宵 繩 壤 唇 甚 据 杉 齊 逝 仙 栓 挿 曹
槽 藻 馱 濯 棚 挑 眺 釣 塚 漬 亭 偵 泥 搭 棟 洞
凸 屯 把 覇 漠 肌 鉢 披 扉 猫 頻 瓶 雰 塀 泡 俸
褒 朴 僕 堀 磨 抹 岬 妄 厄 癒 悠 羅 竜 戾 粹

これらの字が、昭和56年以後に使うことができるようになったということは、逆に言って、それ以前には法令・新聞・放送・教育の分野では使っていなかったということになる。例えば、「涯」が表外字であったので、「生がい教育」と書いたら「いきがい教育」と読まれたとか、「消火せん」（栓が表外字だった）と書いてある看板を見て、「消火しない」ものと誤解したとかいう笑い話がある。

増加された95字を一覧すると分かるように、当用漢字選定の際に選ばれなかった動植物名（猿・猫・杉など）、道具名（皿、傘、瓶など）、身体部分名（唇など）、すでに仮名書きとなっていたもの（でこぼこ→凸凹など）が入ってきている。そこで、誤解してほしくないことは、常用漢字表が漢字使用の目安だからといって、無制限に表外の漢字を使用するのは好ましくないことである。

いったい、どれくらいの漢字があれば、現代日本語の実用文を書くのに支障がないであろうか。

諸橋轍次著『大漢和辞典』全13巻（修訂版昭61.4）に収録されている親字数は約5万字である。（「これが5万字」というポスターには、50,294字が収録されているとある。）

もちろん、こんなに多くの漢字を日常の文章に使っているわけではない。

昭和41年1年間の朝日・毎日・読売の三新聞における漢字使用の調査（『現代新聞の漢字』（国立国語研究所報告56，昭56）によれば，延べ991,375字，異なり字3,213字である。その漢字が何回出てきても1回とみなしたものが異なり字というのである。

使用率の高い漢字を見ると，

日 一 十 二 大 人 三 会 国 年

などが出てくる。これらの漢字を，一定の字数でくぎって，その漢字までの使用度数を累積したものを総延べ度数に対する百分率で表すと，次のようになる。

上位の	10字	10.6%
	50	27.7
	100	40.2
	200	56.1
	500	79.4
	1,000	93.9
	1,500	98.4
	2,000	99.6
	2,500	99.9
	3,000	99.9

当用漢字表に準拠して作られている新聞であるから，そんなに多くの漢字を使わないであろうという予測は立てられるが，この表によって，日本語は約2,000字の漢字によって99.6%をおおうことができることが分かる。

使用度数の少ない字

尅 弑 蚕 燈 謁 箇 寡 嚇 堪 虞 璽 爵 且 迅 頒

1回も出現しなかった字

効 遵 脹 朕 莖 畝

使用率の高い表外字

藤^人 岡 阪 崎 伊^人 韓 之^人 塚 奈^人 杉[△]
戻[△] 須^人 堀[△] 菱 幌 縄 仙^人 潟 弘^人 彦^人
埼 竜^{人△} 鶴^人 肌 鹿^人 熊^人 旭 桂^人

(漢字の右肩の人印は、人名用漢字、△は補正資料)(常用漢字に入
った字……崎、塚、杉、戻、堀、縄、仙、潟、竜、肌)

この表を見ても分かるように、500字までのところで、全体の79.4%をお
うことができるのであるから、最も効率の高い漢字であるということがで
きる。おおまかに言えば、次の1,000字、2,000字のくぎりのところで、日本
語教育における漢字学習の中級、上級と考えてもよいであろう。

一般によく使われている漢字で、常用漢字表にない字(いわゆる表外字)
がある。

於(おいて)	其(その)	挨(あいさつ)	拶(あいさつ)
頃(ころ)	勿(もちろん)	揃(そろう)	迄(まで)
也(なり)	逢(あう)	宛(あてな)	或(あるいは)
椅(いす)	云(いう)	嬉(うれしい)	僅(わずか)
詣(さんけい)	頁(ページ)	叱(しかる)	誰(だれ)
沙(さた)	汰(さた)	只(ただ)	旦(がんたん)
註(ちゅう)	貼(はる)	綴(つづる)	篇(へん)
殆(ほとんど)	冥(めいふく)	湧(わく)	遙(はるか)
瞭(めいりょう)	脇(わき)	詫(わびる)	吾(われ)

日本語教育の立場からは、これらは仮名書きとすべきものであるけれど
も、中・上級の教材の中には、これらの漢字が用いられている場合がある。
仮名に直すことが困難な場合(読みにくくなるとか、なるべく原文の表記に

よる必要がある場合)は、読み仮名(ルビ)を振っておくことが必要であろう。

なお、新聞では、常用漢字表に次の6字と、追加する一つの字音を使用することになっている。

(字種) 亀 舷 痕 挫 哨 狙

(字音) カ 個

〔問1〕 日本語の教科書で、どんな漢字をどのような順序で提出しているか、調べてみよ。

〔問2〕 新聞で、表外字を使っている語にどんなものがあるか、調べてみよ。

〔問3〕 ある作家の、特定の作品を取り上げ、全集本(旧表記)と文庫本(新表記)とで、どのように表記が異なるか、比較してみよ。

〔問4〕 新聞では、「し烈」「急先ぼう」のような、漢字と仮名で書いた、いわゆるまぜ書きをすることがある。「熾」「鋒」が表外字だからである。新聞の中から、まぜ書きの例を挙げてみよ。

〔問5〕 全国の都府県名のうち、表外字を指摘してみよ。(例：神奈川[×]、栃木[×]、茨城[×]など)

1.1.2. 音訓

昭和23年2月16日内閣告示の「当用漢字音訓表」は、「当用漢字表」の趣旨を徹底させるため決められたもので、1,850字の各字について読み方を整理したものである。

その際の方針として、

(1) 古訓・解釈訓は、できるだけ整理する。

〔例〕〔音訓表に掲げられた訓を○、掲げられなかった訓を×で示す。〕

朝——○あさ

×あした

集——○あつまる	×つどう
危——○あやうい	×あぶない
魚——○うお	×さかな

(2) 異字同訓は整理する。

〔例〕

みる——○見	×看・視・観
おもう——○思	×想
みち——○道	×路・徑

(3) 同字異訓は整理する。

〔例〕

主——○ぬし	×あるじ・おもに
入——○いる	×はいる
戦——○たたかう	×いくさ

(4) 仮名書きにすべき語に用いる訓は整理する。

〔例〕

先（副詞）——○さき	×まず
併（接続詞）——×しかし	
如（助動詞）——×ごとき	

(5) 熟字訓は整理する。

〔例〕

今日——○こんにち	×きょう（後に付表に入った。）
昨日——○さくじつ	×きのう（後に付表に入った。）
煙草——×たばこ	

などの方針によりながら整理したものであった。これに対し、

(1) 社会一般で普通に行われている音訓は採用すべきである。

(2) 熟字訓でも、慣用度の高いものは採用すべきである。

などの意見によって、検討され改定されたのが、昭和48年6月18日内閣告示

の「当用漢字音訓表」である。その後出た、昭和56年10月1日内閣告示「常用漢字表」における音訓の数は、音が2,187、訓が1,899で、その合計は4,086である。これを1,945字で割ると、1字あたりの音訓数は2.1となる。

常用漢字表中、訓だけの漢字を参考までに次に掲げる。

扱（あつかう） 虞（おそれ） 卸（おろす・おろし） 蚊（か）
貝（かい） 垣（かき） 掛（かける・かかる・かかり） 瀉（かた）
且（かつ） 株（かぶ） 刈（かる） 繰（くる） 込（こむ・こめる）
崎（さき） 咲（さく） 皿（さら） 芝（しば） 据（すえる・すわる）
杉（すぎ） 畝（せ・うね） 瀬（せ） 但（ただし） 棚（たな）
塚（つか） 漬（つける・つかる） 坪（つば） 峠（とうげ）
届（とどける・とどく） 箱（はこ） 畑（はた・はたけ） 肌（はだ）
姫（ひめ） 堀（ほり） 又（また） 岬（みさき） 娘（むすめ）
匆（もんめ） 杵（わく）

の38字である。

次に、漢字の音のア行とカ行で増えた音訓の例を掲げてみる。これらの音訓は、旧音訓表になかったものである。

ア 行		・印は同語根の音訓	
哀 あわれむ		益 ヤク	
悪 オ		円 まるい	
永 ながい		煙 けむる	
映 はえる		・けむい	
栄 はえ		汚 よごす	
詠 よむ		・よごれる	
易 やさしい		きたない	
疫 ヤク		殴 なぐる	

温 あたたか

- あたたかい
- あたたまる
- あたためる

カ 行

下 おろす

- おりる

河 かわ

架 かける

- かかる

夏 ゲ

華 ケ

はな

過 あやまつ

- あやまち

嫁 とつぐ

我 わ

開 あく

- あける

塊 かたまり

壊 こわす

- こわれる

懐 ふところ

なつく

- なつける
- なつかしい
- なつかしむ

外 はずす

- はずれる

街 カイ

まち

角 かど

革 かわ

覚 さます

- さめる

渴 かわく

割 さく

滑 すべる

なめらか

乾 かわく

- かわかす

患 わずらう

緩 ゆるい

- ゆるやか

- ゆるむ

- ゆるめる

眼 ゲン

危 あぶない

記 しるす

基 もと

貴 たつとい

とうとい

- たつとぶ

- とうとぶ

技 わざ

偽 にせ

吉 キツ
脚 キャ
あし
虐 しいたげる
究 きわめる
球 たま
拳 あげる
•あがる
魚 さかな
狭 せばめる
•せばまる
恭 うやうやしい
脅 おどす
おどかす
強 しいる
競 せる
業 わざ
極 きわめる
•きわまる
•きわみ
勤 ゴン
謹 つつしむ
空 あく
•あける
から
薫 かおる
軽 かろやか
憩 いこい

建 コン
研 とぐ
遣 つかわす
つかう
験 ゲン
懸 かける
•かかる
巖 おごそか
きびしい
己 おのれ
故 ゆえ
庫 ク
後 あと
おくれる
交 かう
•かわす
更 ふける
•ふかす
効 きく
幸 さち
しあわせ
香 キョウ
かおり
候 そうろう
貢 みつぐ
慌 あわてる
あわただしい
硬 かたい

鋼 はがね

懇 ねんごろ

合 カッ

以上の例を見ても分かるように、旧音訓表における音訓の範囲では漢字で書けなかった言葉が、新音訓表で大部分が書けるようになったのである。

やさしい→易しい

きたない→汚い

さかな→魚

しあわせ→幸せ

など、従来仮名書きしていたものが、漢字で書けることになった。

また、訓が増えたため、言葉によっては漢字を書き分けなければならなくなったものもある。例えば、「温」に「あたためる」という訓を増やしたため、「暖」の「あたためる」と区別しなければならなくなった。これを**異字同訓**といい、国語審議会では参考資料として、「室内を暖める」、「スープを温める」のような例を挙げ、使い分けを発表している。

〔問6〕「白湯（さゆ）」の「白^き」は、常用漢字表の音訓欄にはない。読み仮名を振るか、仮名書きにする。表外訓の語の例を挙げてみよ。（例：如何→いかが、何時→いつ）

1.1.3. 付表

昭和48年の新音訓表に付表がついており、これはそのまま常用漢字表に受け継がれている。いわゆる当て字や熟字訓と呼ばれるものを集めたものである。主として一字一字の音訓として挙げにくいものを語の形で掲げたもので、110語ある。

付 表

あす	明日	ここち	心地
あずき	小豆	ことし	今年
あま	海女	さおとめ	早乙女
いおう	硫黄	ざこ	雑魚
いくじ	意気地	さじき	栈敷
いちげんこじ	一言居士	さしつかえる	差し支える
いなか	田舎	さつきばれ	五月晴れ
いぶき	息吹	さなえ	早苗
うなばら	海原	さみだれ	五月雨
うば	乳母	しぐれ	時雨
うわき	浮気	しない	竹刀
うわつく	浮つく	しばふ	芝生
えがお	笑顔	しみず	清水
おかあさん	お母さん	しゃみせん	三味線
おじ	{叔父 伯父	じゃり	砂利
おとうさん	お父さん	じゅず	数珠
おとな	大人	じょうず	上手
おとめ	乙女	しらが	白髪
おば	{叔母 伯母	しろうと	素人
おまわりさん	お巡りさん	しわす	師走
おみき	お神酒	(「しはす」とも言う。)	
おもや	{母屋 母家	すきや	{数寄屋 数奇屋
かぐら	神楽	すもう	相撲
かし	河岸	ぞうり	草履
かぜ	風邪	だし	山車
かな	仮名	たち	太刀
かや	蚊帳	たちのく	立ち退く
かわせ	為替	たなばた	七夕
かわら	{河原 川原	たび	足袋
きのう	昨日	ちご	稚児
きょう	今日	ついたち	一日
くだもの	果物	つきやま	築山
くろうと	玄人	つゆ	梅雨
けさ	今朝	でこぼこ	凸凹
けしき	景色	てつたう	手伝う
		てんません	伝馬船
		とあみ	投網

とえはたえ	十重二十重	へた	下手
どきょう	読経	へや	部屋
とけい	時計	まいご	迷子
ともだち	友達	まっか	真っ赤
なこうど	仲人	まっさお	真っ青
なごり	名残	みやげ	土産
なだれ	雪崩	むすこ	息子
にいさん	兄さん	めがね	眼鏡
ねえさん	姉さん	もさ	猛者
のら	野良	もみじ	紅葉
のりと	祝詞	もめん	木綿
はかせ	博士	もより	最寄り
はたち	{二十 二十歳	やおちょう	八百長
はつか	二十日	やおや	八百屋
はとば	波止場	やまと=	大和=(大和絵 大和魂等)
ひとり	一人	ゆかた	浴衣
ひより	日和	ゆくえ	行方
ふたり	二人	よせ	寄席
ふつか	二日	わこうど	若人
ふぶき	吹雪		

なお、新聞では、次の19語を加えて、使用することになっている。

うおがし 魚河岸 えもん 衣紋 おちゅうど 落人
 おてまえ お点前(茶の湯) おんみつ 隠密 かりゅうど 狩人
 かななづき 神無月 ぎだゆう 義太夫 きっすい 生粋
 こじ 居士 さいさき 幸先 たしせいせい 多士済済
 たておやま 立女形 としま 年増 ないしょばなし 内証話
 はんにゃ 般若 ふいちょう 吹聴 みのしろきん 身代金
 めしゅうど 召人

1.1.4. 字体

昭和21年の当用漢字表には、すでに131字の簡易字体が掲げられているが、

正式に標準字体が決定されたのは、昭和24年4月28日内閣告示「当用漢字字体表」であった。字体の示し方は、当用漢字表と同じ部首順で、細い線で示されており、漢字字体のもととなる形である。したがって、これをもとにして、明朝体、ゴシック体などを作るようになっていた。それが常用漢字表になると、明朝体活字のうちの一種を例に用いて示してある。一般に使用されている活字は、同じ字でありながら、微細なところで形の相違の見られるものがある。それらの相違は、字体の違いではなく、デザインの違いに属する事柄である。したがって、それらの相違は全く問題にする必要はない。

雪 雪 雪

むしろ筆写するとき、活字体と筆写体との違いをどこまで認めるかが問題となろう。

それについては、常用漢字表中の「明朝体活字と筆写の楷書との関係について」で実例を挙げてまとめている。

第2 明朝体活字と筆写の楷書との関係について

常用漢字表では、個々の漢字の字体（文字の骨組み）を、明朝体活字のうちの一種を例に用いて示した。このことは、これによって筆写の楷書における書き方の習慣を改めようとするものではない。字体としては同じであっても、明朝体活字（写真植字を含む。）の形と筆写の楷書の形との間には、いろいろな点で違いがある。それらは、印刷上と手書き上のそれぞれの習慣の相違に基づく表現の差と見るべきものである。以下、分類して例を示す。

1 明朝体活字に特徴的な表現の仕方があるもの

(1) 折り方に関する例

衣 — 衣 去 — 去 玄 — 玄

(2) 点画の組合せ方に関する例

人－人 家－家 北－北

(3) 「筆押さえ」等に関する例

芝－芝 史－史

入－入 八－八

(4) 曲直に関する例

子－子 手－手 了－了

(5) その他

乚－乚 々－々 心－心

2 筆写の楷書では、いろいろな書き方があるもの

(1) 長短に関する例

雨－雨雨 戸－戸戸戸

無－無無

(2) 方向に関する例

風－風風 比－比比

仰－仰仰

糸－糸糸 ネ－ネネ ネ－ネネ

主－主主 言－言言言

年－年年年

(3) つけるか、はなすかに関する例

又－又 又	文－文 文
月－月 月	
条－条 条	保－保 保

(4) はらうか、とめるかに関する例

奥－奥 奥	公－公 公
角－角 角	骨－骨 骨

(5) はねるか、とめるかに関する例

切－切 切 切	改－改 改 改
酒－酒 酒	陸－陸 陸 陸
穴－穴 穴 穴	
木－木 木	来－来 来
糸－糸 糸	牛－牛 牛
環－環 環	

(6) その他

令－令 令	外－外 外 外
女－女 女	

次に、常用漢字表の本表の最初の部分を掲げておく。

本 表

ア－イ

漢 字	音 訓	例	備 考
亜 (亞)	ア	亜流, 亜麻, 亜熱帯	
哀	アイ あわれ あわれむ	哀愁, 哀願, 悲哀 哀れ, 哀れな話, 哀れがる 哀れむ, 哀れみ	
愛	アイ	愛情, 愛読, 恋愛	
悪 (惡)	アク オ わるい	悪事, 悪意, 醜悪 悪寒, 好悪, 憎悪 悪い, 悪さ, 悪者	
握	アク にぎる	握手, 握力, 掌握 握る, 握り, 一握り	
圧 (壓)	アツ	圧力, 圧迫, 気圧	
扱	あつかう	扱う, 扱い, 客扱い	
安	アン やすい	安全, 安価, 不安 安い, 安らかだ	
案	アン	案文, 案内, 新案	
暗	アン くらい	暗示, 暗愚, 明暗 暗い, 暗がり	
以	イ	以上, 以内, 以後	
衣	イ ころも	衣服, 衣食住, 作業衣 衣, 羽衣	浴衣(ゆかた)
位	イ くらい	位置, 第一位, 各位 位, 位取り, 位する	「三位一体」, 「従三位」は, 「サンミイッタイ」, 「ジュサ ンミ」。
囲 (圍)	イ かこむ かこう	囲碁, 包囲, 範圍 囲む, 囲み 囲う, 囲い	

医 (醫)	イ	医学, 医療, 名医	
依	イ エ	依頼, 依拠, 依然 帰依	
委	イ	委任, 委員, 委細	
威	イ	威力, 威圧, 示威	
胃	イ	胃腸, 胃酸, 胃弱	
為 (爲)	イ	為政者, 行為, 作為	為替(かわせ)
尉	イ	尉官, 一尉, 大尉	
異	イ こと	異論, 異同, 奇異 異にする, 異なる	
移	イ うつる うつす	移転, 移民, 推移 移る, 移り変わり 移す	
偉	イ えらい	偉大, 偉人, 偉観 偉い, 偉ぶる	
意	イ	意見, 意味, 決意	意気地(いくじ)
違	イ ちがう ちがえる	違反, 違法, 相違 違う, 違い, 間違う 違える, 見違える, 間違える	
維	イ	維持, 維新, 繊維	
慰	イ なぐさめる なぐさむ	慰安, 慰問, 慰労 慰める, 慰め 慰む, 慰み	
遺	イ ユイ	遺棄, 遺産, 遺失 遺言	「遺言」は, 「イゴン」とも。

緯	イ	緯度, 北緯, 経緯
域	イキ	域内, 地域, 区域

『常用漢字表』（付人名用漢字）（昭和56年10月1日大蔵省印刷局刊）による。

表中、（ ）内の字は、中国の清時代^シ、1716年に編集された康熙字典^キの字体によるもので、旧字体と呼ばれるものである。

現在は、旧字体を一般の文章に用いることはないが、一部人名用には許容される。

また、言葉によっては、表外字にあたる漢字が使われることがあるが、新聞記事などでは、「抜てき」「し烈」のように、仮名にするか、「抜擢^{てき}」「熾^{てき}烈^し」「抜擢」「熾烈」のように読みを（ ）の中に入れて示すか、振り仮名をつけることがある。

1.1.5. 筆順・画数・部首

筆順や画数については、国として決めたものはない。ただ、文部省が、小・中学校の漢字指導の統一のため、『筆順指導の手びき』（昭和33年3月31日）を刊行した。いま、絶版となっているため、『漢字書き順字典』（第一法規）が参考となろう。

画数については、文部省が「当用漢字字画順表（案）」（国語問題問答第5集，昭32. 3.20所収）を発表している。

次に、誤りやすい画数の字の例を挙げる。

女（3）	子（3）	己（3）	及（3）	弓（3）
比（4）	氏（4）	片（4）	皮（5）	母（5）
朽（6）	衣（6）	糸（6）	臣（7）	長（8）
直（9）	食（9）	馬（10）	衰（10）	棄（13）
誤（14）				

部首については、昭和21年の「当用漢字表」発表に際しては、^シ清の康熙字典の部首を準用している。昭和56年の「常用漢字表」では、その漢字の代表音による五十音順に並べられており、部首については、何の発表もない。特に新字体の部首に問題がある。

会（會）を日， 当（當）を田，
旧（舊）を臼， 声（聲）を耳

というように、旧字体の部首に入れている漢和辞典が多い。

しかし、部首を索引の一つとして利用する場合には不便であるので、漢和辞典によっては、「ツ」、「リ」、「イ」、「マ」などを設けていることがある。なるべく新しい部首をつくらず、従来の部首の範囲で適当なものに変えて所属させるよう工夫することが必要であろう。

会一へ （會一日）
当一ツ （當一田）
旧一日 （舊一臼）
声一土 （聲一耳）

〔問7〕 部首について、漢和辞典を調べてみよ。

〔問8〕 部首を索引の一つと考えた場合、各漢字は、どの部首に属させたらよいか、考えてみよ。（例：学は「ツ」か「𠂔」か、「子」か）

1.1.6. 簡体字との比較

1964年5月に、中国文字改革委員会がつくって出版した「略字総表」によると、例えば、次のような差がある。

(1) 両国とも簡略化されている漢字

(ア) 字体が全く同じもの

当 区 号 双 旧 礼 台 虫 回 会

(イ) 字体が少しだけ違うもの（左が日本の常用漢字）

応—应 与—与 庁—厅 変—变

辺—边 圧—压 団—团 両—两 実—实 画—画

(ウ) 字体がかなり違うもの（左が日本の常用漢字）

図—图 発—发 薬—药 様—样 帰—归 専—专 総—总

従—从 穀—谷 権—权

(2) 中国だけで簡略化されている漢字（左が日本の常用漢字）

幾—几 開—开 雲—云 車—车 見—见 長—长 風—风

飛—飞 時—时 園—园

(3) 日本だけで簡略化されている漢字（左が日本の常用漢字）

仏—佛 拝—拜 乗—乘 壺—壺 恵—惠 予—豫 弁—辨

蔵—藏 仮—假 髓—髓

簡略化のしかたとしては、

(1) 同音の漢字で画数の少ない字にかえる。

(2) 草書体を楷書化する。

(3) 輪郭や特徴を残す。

(4) 符号化する

などの方法があるが、日本の常用漢字の字体のすべてと一致させることは難しいであろうと思われる。中国人が日本語を学習するさい、つい簡体字を使ってしまうこともあるだろうけれども、厳しくチェックする必要がある。

1.2. 現代仮名遣い

昭和61年7月1日、内閣告示第1号で「現代仮名遣い」が告示された。昭和21年11月16日内閣告示第33号「現代かなづかい」から40年ぶりで改正された。しかし、表記の仕方については、ほとんど相違がないので、安心して指導にあたってほしい。

次に、新しい仮名遣いとの相違について、箇条書にしてみる。

「現代かなづかい」	「現代仮名遣い」
(昭和21年内閣告示)	(昭和61年内閣告示)
(1) 大体、現代語音にもとづいて、現代語をかなで書きあらわす場合の準則を示したものである。	(1) 法令、公用文書、新聞、雑誌、放送など、一般の社会生活において現代の国語を書き表すための仮名遣いのよりどころを示すものである。
(2) 主として現代文のうち口語体のものに適用する。原文のかなづかいによる必要のあるもの、またはこれを変更しがたいものは除く。	(2) 科学、技術、芸術、その他の各種専門分野や個々人の表記にまで及ぼそうとするものではなく、また、固有名詞などでこれによりがたいものや、特殊な音、外来語の音などの書き表し方を対象とするものではない。
(3) 発音と新かなづかいの対照表1～4、細則第1から第33まで、注意1～2、備考第1から第10まで。	(3) 規則の立て方を簡明にし、現代語の音韻に従って書き表す原則（本文第1）と表記の慣習を尊重した特例（第2）とから成るものとした。

(4) 歴史的仮名遣いは、発音とかなづかいの対照表の備考欄に（旧かなづかいを示す。）とあるほか、細則に掲げられた用例の（ ）内に、漢字表記とともに、カタカナで示されている。

(5) 「せかいじゅう」「いなずま」などについては、用例がなく、細則の適用に迷うものもあったが、「正書法について」（昭和31年7月5日国語審議会報告）は、語意識の考え方を導入して、「せかいじゅう」「いなずま」と書くことになるであろうとしている。

(4) 歴史的仮名遣いは、我が国の歴史や文化に深いかかわりをもつものとして尊重されるべきであり、また、歴史的仮名遣いの理解を深める上でも有用であるところから、付表を設けてこの仮名遣いと歴史的仮名遣いとの対照を示した。

(5) この仮名遣いによる表記の仕方は、従来の「現代かなづかい」（昭和21年内閣告示第33号）による表記と實際上ほとんど相違がないこと。ただし、「じ・ち」「ず・づ」の使い分けのうち、「せかいじゅう」「いなずま」などについては、「じ」「ず」を用いることを本則とするとともに、「ち」「づ」を用いることもできるものとした。

本文の構成は、

第1 （原則に基づくきまり）

- 1 直 音
- 2 ^{よう}拗 音
- 3 ^{はっ}撥 音
- 4 促 音
- 5 長 音

(1)～(5)

第2 (表記の慣習による特例)

1～6

付記

とから成っている。

1.2.1. 原則にもとづくきまり

第1については、従来の「現代かなづかい」の原則と、全く変わらない。

ただし、^{よう}拗音を表す、や、ゆ、よ、及び促音を表す、っは、なるべく右下に小さく書くとなっていたものが、今回は、なるべく小書きにする、と変わっているが、趣旨は同じである。

1.2.2. 表記の慣習による特例

1.2.2.1. 助詞 は、へ、を

第2の、2と3は、もと、「助詞のは、へは、は、へと書くことを本則とする」ことになっており、「わ」や「え」と書いても誤りではないというような含みをもった表現であったが、「は、へ、と書く」ことになったので、この点は明りょうになった。(もっとも、教育や新聞の方面では、本則を適用していたので、問題はない。)

1.2.2.2. 四つ仮名

第2の5は、「じ・ぢ」「ず・づ」の書き分けの問題であり、いわゆる四つ仮名の問題である。

(1) 同音の連呼

(2) 二語の連合

という二つの考え方によって、「ぢ」「づ」を使うことを示したものである。例えば、「ちぢみ(縮)」の場合、最初の「ち」の次に「zi」の音が続くので、

「ちじみ」とするよりは、「ちぢみ」のほうが慣習が強いとみたものである。また、「はな（鼻）」と「ち（血）」の連合したものであるから「はなぢ」と書くという語意識の原則を、ここに持ち込んだのである。

そして、「正書法について」（昭和 31 年国語審議会報告）で、「じ」、又は「ず」と書くことになるであろうと述べていた、次のような語に対して、この書き方を本則とし、「ぢ」「づ」を用いて書くこともできるものとした。

例　せかいじゅう（世界中）

いなずま（稲妻）　かたず（固唾*）　きずな（絆*）　さかずき（杯）　ときわず　ほおずき　みみずく
うなずく　おとずれる（訪）　かしずく　つまずく　ぬかずく　ひざまずく　あせみずく　くんずほぐれつ　さしずめ
でずっぱり　なかんずく　うでずく　くろずくめ　ひとりずつ
ゆうずう（融通）

ただ、新聞、教育方面では、本則によることとなるので、日本語教育においてもまず本則によって指導すべきであろう。

「正書法について」（昭和 31 年国語審議会報告）に、新たに付け加わった語は、次のとおり。

ときわず　ほおずき　くんずほぐれつ　でずっぱり　くろずくめ　ひとりずつ　ゆうずう

1.2.2.3. 長音

オ列の長音の書き方については、5 長音の(5)によって、「オ列の仮名に「う」を添える」ことになっているが、次のような語は、オ列の仮名に「お」を添えて書く。

（例） おおかみ　おおせ　おおやけ　こおり　こおろぎ　ほお

ほおずき ほのお とお いきどおる もよおす いと
おいしい おおい おおきい とおい おおむね おおよ
そ

この中で、「現代かなづかい」（昭21）に新たに付け加わった語は、次のとおり。

おおせ ほのお とお おおう こおる いきどおる い
とおいしい おおむね おおよそ

なぜ、これらの語は、「お」と書くかについては、次のように解説されている。

歴史的仮名遣いでオ列の仮名に「ほ」又は「を」が続くものであって、オ列の長音として発音されるか、「オ・オ」、「コ・オ」のように発音されるかにかかわらず、オ列の仮名に「お」を添えて書くものである。

「現代かなづかい」（昭21）では、

第九 オに発音されるほは、おと書く。

となっているだけであった。

かお（^か顔） しお（^し塩）

の場合は、問題がなかったが、

おおい（^お多い） おおきい（^お大きい）

などは、オの長音のように発音しているのではないかという疑問もあった。もし長音なら、「おうい」「おうきい」と書かなければならないからである。そこで長音ではなく、二重母音であるとして、「おおい」「おおきい」と書くのであると説明されてきた。これに対して、「オ列の長音として発音されるか、オオ・コオのように発音されるかにかかわらず」と説明している。

前書きの6に、この仮名遣いは「ホオ・ホホ(頬)」のような発音にゆれの

ある語について、そのどちらかに決めようとするものではないとある。

しかし、本文第2の6の例に、

ほお（頬*）

とあるところから、一応「ホオ」のほうを採用していることが分かる。

同じように、「テキカク・テッカク（的確）」についても、どちらかに決めようとするものではないとある。

えきか（液化） せいがくか（声楽家） かっき（活気）

がっこう（学校） せっけん（石鹸*）

の例が挙げられている。そのほか、

三角形，水族館，敵機，適格

など、どちらのよみをとるか問題となる語もあるが、「現代仮名遣い」では、決めることができないことになった。

1.2.2.4. 付記

発音と仮名遣いが一致しない例としては、付記にある、エ列の長音として発音されるか、エイ、ケイなどのように発音されるかにかかわらず、エ列の仮名に「い」を添えて書くというのがある。

かれい せい（背）

かせいで（稼） まねいて（招）

春めいて

へい（塀） めい（銘） れい（例）

えいが（映画） とけい（時計） ていねい（丁寧）

動詞のイ音便にあたるものとか、漢字の音で（-ei）にあたるものについて、エ列の仮名に「い」を添えるのである。

エ列の長音の例は、第2の5(4)にある、

ねえさん ええ（応答の語）

ぐらいのものであろうと言われている。

げえげえ（音） 学校てえ所

ねえ（よびかけ） へえ（感動的）

など、例は少ない。

1.2.2.5. 「現代かなづかい」と「現代仮名遣い」の内容の対比

事 項	旧		新	
	現代かなづかい	学 校 教 育	現代仮名遣い	学 校 教 育
助詞「は」「へ」	「は」「へ」と書くことを本則とする（細則第4，第8）。「わ」「え」と書くことも許容すると解釈されている。	本則（細則第4，第8）によって、「は」「へ」と書くことで指導する。	「は」「へ」と書く。（許容を省く。）	従来どおり。
オ列長音	オ列の仮名に「う」をつけて書くことを本則とする（細則備考第5，第8）。「お」や「ー」をつけて書くことも許容すると解釈されている。	本則（細則備考第5，第8）によって、「う」をつけて書くことで指導する。	「う」をつけて書く。（許容を省く。）	従来どおり。
「じ」「ち」「ず」「づ」の使い分けのうち、現代語の意識では二語に分解しにくい語。（例）「せかいじゅう」「いなずま」など。	「じ」「ず」を用いる（昭和31年国語審議会報告「正書法について」）	「じ」「ず」と書くことで指導する。	「じ」「ず」を用いて書くことを本則として、「ち」「づ」を用いることも許容する。	本則により指導することを原則とし、許容については中・高等学校で指導する。
「とけい（時計）」「ていねい（丁寧）」などでエ列長音で発音されることのあるもの。	説明的な記述なし。（エ列長音「ねえさん（姉さん）」「ええ（応答の語）」については細則第11）	「とけい」「ていねい」と書くことで指導する。	エ列の仮名に「い」をつけて書く。	従来どおり。

1.3. 送り仮名の付け方

ある語の読みを確定するために、漢字のあとに書き加える仮名のことを送り仮名という。もともと漢文の訓読から発生したものであり、便宜的なものであったが、書く立場から通則が求められるようになった。これが「送り仮名法」とか「送り仮名のつけ方」とかになったのである。

1.3.1. 送り仮名の付け方の移り変わり

「明」を「あきらかに」に用いる場合、「明に」「明かに」「明らかに」「明きらかに」のどの書き方も行われていたが、これでは統一のある文章にならない。かつて、送り仮名法がいくつかまとめられているが、いずれも通則を立てようとしたものである。

- (1) 官報局「送仮名法」(明22.4内閣官報局編)……官報を編集するためのものであるが、全体として送り仮名の少ない形にまとめられている。

「あきらかに」は「明に」となっている。

- (2) 国語調査委員会「送仮名法」(明40.3.20国語調査委員会編)……法令・公用文・教科書の送り仮名を統一するためにまとめたもの。全体としてやや送り仮名の多い形となっており、「あきらかに」は「明らかに」となっている。

全般的に、小学校の教科書の場合には比較的多い送り仮名が用いられ、次に一般社会が少なく、公用文が最も少ない傾向にあった。

昭和21年12月24日内閣通達となった「公文用語の手びき」の「送り仮名のつけ方」は、昭和34年7月11日内閣告示「送りがなのつけ方」が実施されるまでは、広く公用文に行われる送り仮名法となった。

内閣告示「送りがなのつけ方」は、三つの基本方針があり、その一つ、

「活用語およびこれを含む語は、その活用語の語尾を送る」によって、

浮く ―― 浮かぶ（浮ぶ）

終える ―― 終わる（終る）

確かだ ―― 確かめる

（ ）内は、許容。

のように、対応する語の送り仮名の付け方を合わせるため、また、「行なう」のように読みにくさを防ぐために多く送る傾向となった。

例 「浮かぶ」を活用させると、

語 幹	未然形	連用形	終止形	連体形	假定形	命令形
う か	ば ぼ	び ん	ぶ	ぶ	べ	べ

（バ行五段活用）

となり、通則によれば「浮^うぶ」の下線部分が送り仮名となる。しかし、一方に「浮^うく」という語があり、これを活用させると、

語 幹	未然形	連用形	終止形	連体形	假定形	命令形
う	か こ	き い	く	く	け	け

（カ行五段活用）

となって、「浮^うく」の下線部分が送り仮名となる。そこで、漢字の受け持つ訓の部分を一統して、

浮く ―― 浮^うかぶ

のように書くわけである。

同様に、「終^おえる」は、ア行下一段で「える」が活用語尾であるので、そのまま送り仮名となり、「終^おわる」は、ラ行五段活用で「る」が活用語尾であるが、「わ」から送ることになるのである。

「確かだ」の場合は、形容動詞の送り仮名の付け方によって「か」から送ることになっているので、「確かめる」の場合も、活用語尾は「める」であるが、「か」から送ることになる。

また、「行なう」は、もし「行う」とした場合、連用形の「行^{おこな}って」と、「行く」の連用形「行^いって」が同じ形となって読みにくいため、「行^なう」のように「な」を入れ、連用形が「行^{おこな}なって」となるようにしたものである。（これについては、昭和48年に改定され、「行う（行なう）」〔く〕内は許容〕となった。）

昭和34年の「送りがなのつけ方」は、動詞・形容詞・形容動詞・名詞・代名詞・副詞のように品詞別に、26の通則によってまとめられている。そして、ただし書きの中に、例外（そのように送らなければならないもの）と、許容（送りがなを省いてもよいもの）との例が掲げられている。

内閣告示の許容規定は、実際に使う場合、本則によるべきか、許容によるべきかの問題が生じるため、一般公用文では、許容を適用しないこととし、「文部省公用文送りがな用例集」に実例を出した（公布直後）。これに対し、内閣法制局では、許容の一部を適用する形を用いることにし、「現れ、行い、白い、起り、終り、代り、止り、明渡し、預り金、押売」などの形を示した。

昭和34年の内閣告示「送りがなのつけ方」が出て以来、戦後の国語施策の再検討を要望する世論がおこり、文部大臣は、諮問機関である第8期の国語審議会（昭41.6—43.5）に対し諮問した。これを受けた国語審議会は、漢字部会（音訓表の検討）とかな部会（送り仮名の検討）を設けて審議をつづけ、昭和45年5月27日「改定送り仮名の付け方（案）」、昭和47年6月28日「改定送り仮名の付け方」（答申）となった。1年後の昭和48年6月18日に内閣告示となり、34年の「送りがなのつけ方」は廃止された。標題が漢字表記に変わったのは、同時に告示された「当用漢字音訓表」に「かな 仮名」が掲げられ、また「付」に「つける」という訓が掲げられたからである。

以下、新旧送り仮名の付け方の比較を掲げる。これは異なる部分だけを抜き出して示したもので、昭和47年6月13日付け「文部広報」に載せられていたものによる。

1.3.2. 新旧「送りがなのつけ方」の比較

1 構成

〔旧〕	〔新〕
第1 動詞（通則1～通則6）	活用のある語 ……通則1 ……通則2 ……通則3 ……通則4 ……通則5
第2 形容詞（通則7～通則11）	
第3 形容動詞（通則12～通則15）	
第4 名詞（通則16～通則21）	
第5 代名詞（通則22）	
第6 副詞（通則23～通則26）	……通則6 ……通則7
	付表の語

2 内容（以下、語数を示したもの以外は、例示である。）

(1) 現行にない許容を設けたもの。

ア 単独の語の活用語……………通則2の許容
 () 内は許容

〔旧〕	〔新〕
浮かぶ	浮かぶ（浮ぶ）
生まれる	生まれる（生れる）
積もる	積もる（積る）
聞こえる	聞こえる（聞える）
起こる	起こる（起る）
落とす	落とす（落す）
暮らす	暮らす（暮す）
当たる	当たる（当る）
終わる	終わる（終る）
変わる	変わる（変る）

晴れやかだ

晴れやかだ（晴やかだ）

イ 複合の語の活用語……………通則 6 の許容

〔旧〕

〔新〕

書き抜く

書き抜く（書抜く）

申し込む

申し込む（申込む）

打ち合わせる

打ち合わせる（打ち合せる・打合
せる）

向かい合わせる

向かい合わせる（向い合せる）

聞き苦しい

聞き苦しい（聞苦しい）

待ち遠しい

待ち遠しい（待遠しい）

〔注意〕動詞と動詞とが結びついた動詞については、特に短く書き表わす
必要のある場合、「打(ち)切る」、「繰(り)返す」、「差(し)上げる」のよ
うに、かっこの中の送りがなを省いてもよい。

(2) 現行にも許容があるが、その幅を広げたもの。

ア 単独の語の名詞……………通則 4 の許容

〔旧〕

〔新〕

当たり（当り）

当たり（当り）

代わり（代り）

代わり（代り）

向かい（向い）

向かい（向い）

曇り

曇り（曇）

届け

届け（届）

願い

願い（願）

晴れ

晴れ（晴）

狩り

狩り（狩）

答え

答え（答）

問い	問い（問）
祭り	祭り（祭）
群れ	群れ（群）

〔注意〕表に記入したり記号的に用いたりする場合には、「晴(れ)」、「曇(り)」、「問(い)」、「答(え)」、「終(わ)り」、「生(ま)れ」、「押(す)」のように、かっこの中の送りがなを省いてもよい。

イ 複合の語の名詞……………通則 6 の許容

〔旧〕	〔新〕
封切り（封切）	封切り（封切）
日当たり（日当り）	日当たり（日当り）
合わせ鏡（合せ鏡）	合わせ鏡（合せ鏡）
……………	
売り上げ（売上げ）	売り上げ（売上げ・売上）
取り扱い（取扱い）	取り扱い（取扱い・取扱）
乗り換え（乗換え）	乗り換え（乗換え・乗換）
引き換え（引換え）	引き換え（引換え・引換）
申し込み（申込み）	申し込み（申込み・申込）
呼び出し電話（呼出し電話）	呼び出し電話（呼出し電話・呼出電話）

(3) 現行で本則としているものを許容とし、別の形を本則としたもの。

ア 次の 6 語の動詞……………通則 1 の許容

〔旧〕	〔新〕
表わす	表す（表わす）
著わす	著す（著わす）
現われる	現れる（現われる）
行なう	行う（行なう）

断わる	断る（断わる）
賜わる	賜る（賜わる）

イ 次の 2 語の動詞……………通則 2 の許容

〔旧〕	〔新〕
押える	押さえる（押える）
捕える	捕らえる（捕える）

(4) 現行の送りがなを別の形に変更したもの。

ア 次の 5 語の名詞は，送りがなをつけないとした。

……………通則 4 の例外

〔旧〕	〔新〕
折り	折
係り	係
掛かり	掛
並み	並
割り	割

イ 次の語は，送りがなをつけないものとして語例に明示した。

……………通則 7

〔旧〕	〔新〕
売り値（売値）	売値
買い値（買値）	買値
作付け面積（作付面積）	作付面積
奥書き（奥書）	奥書
木立ち（木立）	木立
字引き（字引）	字引
葉巻き（葉巻）	葉巻
水引き（水引）	水引

物置き（物置）	物置
合い図（合図）	合図
置き物（置物）	置物
敷き物（敷物）	敷物
並み木（並木）	並木

(5) 改定で新たに加えた事項

- ア 連体詞，接続詞
- イ 複合の語の副詞，その他
- ウ 「当用漢字音訓表」で新しく採用した音訓を用いて書き表す語
- エ 「当用漢字音訓表」の附表の語
- オ 適用上の注意事項

以上，対照してみたところで分かるように，〔新〕のほうが許容が増えて
いることである。これは，一般の社会生活において現代の国語を書き表す場
合の「よりどころ」を示したものであるので，当然のことと言える。したがって
運用に当たっては，許容をどのように取り入れるかということが問題にな
る。

教育方面では，教科書の検定の際，本則及び例外により，原則として許容
は適用しないことになっている。（「義務教育諸学校教科用図書検定基準実施
細則（昭和52.10文部省告示）」）新聞・放送関係での申し合わせも同様であ
る。

これに対し，公用文のほうでは，許容の一部が採用されている。「明渡
し・預り金・入替え・受入れ。……」など，138語について許容が適用され
ることになった。

日本語教師としては，この事実を知ったうえで，教材読解の面で，教材に
許容の形が表れたときは，その旨を説明し，表現の面では本則によって指導
することが望ましい。

1.3.3. 送り仮名の付け方の要領

1.3.3.1. まず、活用語尾について考える

(話) ^{はな}さ・ナイ し・マス す す・トキ セ・バ セ
→話す

(調) ^{しら}べ・ナイ べ・マス べる べる・トキ べれ・バ
べろ→調べる

(着) ^きき・ナイ き・マス きる きる・トキ きれ・バ
きろ→着る

(来) こ・ナイ き・マス くる くる・トキ くれ・バ
こい→来る

𠮟 「着る」「来る」のように、一部の一段活用やカ行変格活用は、語幹と活用語尾の区別がつかないので、漢字の受け持つ部分を最初の仮名1字分とし、そのあとを送り仮名とする。

(清) ^{きよ}く・ナイ く・テ い い・トキ けれ・バ→清い

(正) ^{ただ}しく・ナイ しく・テ しい しい・トキ しけれ・バ
→正しい

𠮟 一般に文法書では、「清い」はク活用形容詞、「正しい」はシク活用形容詞といわれるものである。なお、形容動詞は、「静^{しず}かだ」「健^{すこ}やかだ」「明^{あき}らかだ」のように、「や」「やか」「らか」から送る。

1.3.3.2. 次に、派生や対応がないかを考える

(1) 派生というのは、活用語尾や接尾語が付いて別の語になったもの、活用形の一つが別の品詞の語となったものなどである。

向く→向かう	重い→重んずる
勇む→勇ましい	晴れる→晴れやかだ
清い→清らかだ	
動く→動き	近い→近く
暑い→暑さ	惜しい→惜しげ

- (2) 対応というのは、自動詞と他動詞の関係のようなものを指し、漢字の受け持つ部分を一定にしようとするものである。

動く	——動かす	冷える	——冷やす
及ぶ	——及ぼす	落ちる	——落とす
当てる	——当たる	生む	——生まれる
聞く	——聞こえる		

ただし、次の4語は、対応させない。

明るい〔明ける〕	荒い〔荒れる〕
悔しい〔悔いる〕	恋しい〔恋う〕

- (3) 活用語（動詞）から転じた名詞については、動詞の意識が残っているかどうかを考える。

（組（「クラス」の意味） 花の組
（組み（「くみあわせる」の意味） 活字の組みがゆるむ
（お話をいたします
（お話しいたします
（手当を支給する
（傷の手当てをする

- (4) 個別的な例外の語例を先に記憶しておく。

動 詞……明らむ 味わう 哀れむ 慈しむ 教わる 脅かす(おどかす)
脅かす(おびやかす) 食らう 異なる 逆らう 捕まる 群がる
和らぐ 揺する

形容詞……明りい 危ない 危うい 大きい 少ない 小さい 冷たい
平たい

形容動詞……新ただ 同じだ 盛んだ 平らだ 懇ろだ 惨めだ 哀れだ
幸いだ 幸せだ 巧みだ

名 詞……辺り 哀れ 勢い 幾ら 後ろ 傍ら 幸い 幸せ 互い

便り 半ば 情け 斜め 独り 謦れ 自ら 災い
動詞性名詞……謡 虞 趣 氷 印 頂 帶 畳 卸 煙 恋 志
次 隣 富 恥 話 光 舞 折 係 掛(かかり) 組 肥
並(なみ) 卷 割

副詞・連体詞・接続詞……(1)明るく 大いに 直ちに 並びに 若しくは
(2)又 (3)必ずしも〔必ず〕 少なくとも〔少ない〕

(5) 慣用に従って送り仮名を付けない例

ア 地位・身分・役職等の名。

閑取 頭取 取締役 事務取扱

イ 工芸品の名に用いられた「織」,「染」,「塗」等。

《博多》織 《型絵》染 《春慶》塗 《鎌倉》彫 《備前》焼

ウ その他。

書留 気付 切手 消印 小包 振替 切符 踏切 請負 売値
買値 仲買 歩合 両替 割引 組合 手当 倉敷料 作付面積
売上《高》 貸付《金》 借入《金》 繰越《金》 小売《商》
積立《金》 取扱《所》 取扱《注意》 取次《店》 取引《所》
乗換《駅》 乗組《員》 引受《人》 引受《時刻》 引換《券》
《代金》引換 振出《人》 待合《室》 見積《書》 申込《書》

エ 一般に慣用が固定していると認められるもの。

奥書 木立 子守 献立 座敷 試合 字引 場合 羽織 葉巻
番組 番付 日付 水引 物置 物語 役割 屋敷 夕立 割合
(以上、あとの語に送り仮名のない場合)

合図 合間 植木 置物 織物 貸家 敷石 敷地 敷物 立場
建物 並木 巻紙

(以上、前の語に送り仮名のない場合)

受付 受取

(以上、両方に送り仮名のない場合)

浮世絵 絵巻物 仕立屋

(以上, 3文字の場合)

息吹 棧敷 時雨 築山 名残 雪崩 吹雪 迷子 行方

(以上, 付表の語)

- 註 (1) 「《博多》織」, 「売上《高》」などのように掲げたものは, 《 》の中を他の漢字で置き換えた場合にも, この通則を適用する。
- (2) 以上の例は, すべてを挙げ尽くしたものではなく, 類推して同類の語にも及ぼすことになっているが, 各分野で決める必要がある。

1.4. ローマ字のつづり方

昭和29年12月9日、政府は、国語を書き表す場合に用いるローマ字のつづりを定め、内閣告示とした。それは、以下のとおりである。

ま え が き

- 1 一般に国語を書き表わす場合は、第1表に掲げたつづり方によるものとする。
- 2 国際的關係その他従来の慣例をにわかに改めがたい事情にある場合に限り、第2表に掲げたつづり方によつてもさしつかえない。
- 3 前二項のいずれの場合においても、おおむねそえがきを適用する。

第 1 表

〔() は重出を示す。〕

a	i	u	e	o			
ka	ki	ku	ke	ko	kya	kyu	kyo
sa	si	su	se	so	sya	syu	syo
ta	ti	tu	te	to	tya	tyu	tyo
na	ni	nu	ne	no	nya	nyu	nyo
ha	hi	hu	he	ho	hya	hyu	hyo
ma	mi	mu	me	mo	mya	myu	myo
ya	(i)	yu	(e)	yo			
ra	ri	ru	re	ro	rya	ryu	ryo
wa	(i)	(u)	(e)	(o)			
ga	gi	gu	ge	go	gya	gyu	gyo
za	zi	zu	ze	zo	zya	zyu	zyo
da	(zi)	(zu)	de	do	(zya)	(zyu)	(zyo)
ba	bi	bu	be	bo	bya	byu	byo
pa	pi	pu	pe	po	pya	pyu	pyo

第 2 表

sha	shi	shu	sho
		tsu	
cha	chi	chu	cho
		fu	
ja	ji	ju	jo
di	du	dya	dyu
kwa			
gwa			
			wo

そ え が き

前表に定めたもののほか、おおむね次の各項による。

- 1 はねる音「ン」はすべて n と書く。
- 2 はねる音を表わす n と次にくる母音字または y とを切り離す必要がある場合には、n の次に ' を入れる。
- 3 つまる音は、最初の子音字を重ねて表わす。
- 4 長音は母音字の上にへをつけて表わす。なお、大文字の場合は、母音字を並べてもよい。
- 5 特殊音の書き表わし方は自由とする。
- 6 文の書きはじめ、および固有名詞は語頭を大文字で書く。なお、固有名詞以外の名詞の語頭を大文字で書いてもよい。

ここで、第 2 表というのは、いわゆるヘボン式及び日本式のつづり方のうち、第 1 表にないつづりを集めて示したものである。

すなわち、第 1 表の sya を sha と書くのは、ヘボン式である。

次に、第 2 表のつづりを第 1 表と比較してみよう。

sha —sya	sho —syo	chi —ti
shi —si	tsu —tu	chu —tyu
shu —syu	cha —tya	cho —tyo

fu — hu	di — zi	kwa — ka
ja — zya	du — zu	gwa — ga
ji — zi	dya — zya	wo — o
ju — zyu	dyu — zyu	
jo — zyo	dyo — zyo	

di以下が、日本式といわれたもので、ひらがなで示せば di は「ぢ」に当たる。du-zu は、「づ」と「ず」との書き分けにあたる。kwa は「くわ」、gwa は「ぐわ」にあたるが、現代かなづかいでは、書き分けず、「か」「が」とすることになっている。「wo」は、「助詞のを」に当たるが、今では「Hon wo yomu」としないで、「Hon o yomu」でよい。ここが、現代かなづかいと、ローマ字のつづり方の違いである。

ヘボンが『和英語林集成』第3版に採用したローマ字のつづり方をヘボン式と呼び、英語式のつづりである。これに対して、日本式は日本語の音の体系として五十音図を用い、動詞の活用が規則的になり、語構成も明らかになるという利点をもっていた。これらの方式に対し、政府が昭和12年に定めたのを訓令式と呼ぶ。英語教育の分野では、ヘボン式が支持され、国語教育方面では日本式が使用されていたため統一する必要を認め、内閣訓令となったものである。

しかし、昭和20年連合国最高司令部は、公の場におけるローマ字表記はヘボン式を用いることとし、市町村の名称、道路名、駅名がヘボン式によって書かれた。

昭和29年12月9日の内閣告示「ローマ字のつづり方」の第1表は訓令式と同じものである。しかし、一般にはヘボン式も用いられていたため、第2表を加えたのである。

なお、ローマ字の書き方については、文部省の「ローマ字の書き方」(昭22.2)があるが、国語審議会では部会報告として「ローマ字文の分ち書きのしかた」を中間報告した。正式に制定されたものではないが、普通にはこれ

に従うことになるであろう。

小・中学校では、昭和22年4月1日から、ローマ字教育が実施されたが、現在では、小学校4年生で、単語を学ぶ程度となってしまった。

ローマ字を使用している言語圏の学習者に対しては、初めからローマ字を使うべきであるという主張がある。そのつづり方として、訓令式を用いるか、ヘボン式を用いるかは別として、学習者にとってあまり抵抗がないからだという理由からである。会話だけを習得するのが目的でそのメモとしてローマ字を使用することは便利であろうが、日本語の読み書きまでを学習するのであれば、最初から平仮名を導入したほうが、二重手間にならない。

なお、国鉄がJRと変わったように、ローマ字が多用される傾向にある。新聞などでも

EC	欧州共同体
GATT	関税貿易一般協定
GNP	国民総生産
IOC	国際オリンピック委員会
LPG	液化石油ガス
OECD	経済協力開発機構
VTR	ビデオテープレコーダー
WHO	世界保健機関（国連）

が用いられ、それぞれ日本語訳つきで記事の中に散見する。普通の国語辞書には、採録されていないことが多いので、新語辞典や新聞用語辞典などを利用することが必要である。

1.5. 外来語

外来語というのは、主として欧米語から国語に取り入れられたことばをさすので、古く中国語から取り入れられた漢語は、外来語には含まれない。

外国語から取り入れられた順序に従って、次の3段階のあることが指摘されている。（「外来語の表記について」（昭和29.3.15国語審議会報告））

- (1) 外国語という感じをなお多分にとどめているもの。（オーソリティー、フィアンセ）
- (2) すでに国語として熟しているが、なお外来語という感じは残っているもの。（オーバー、ラジオ）
- (3) その使われ始めた歴史が古く、国語に融合しきっていて、国民一般がこれを外来語とは思わないもの。（たばこ、かっぱ、きせる）

以上、各段階に応じる書き方を示せば、

- (1) 原語のつづり、又は発音に近い書き表し方を採っている。
- (2) 原語のつづり、又は音から離れて、その一部分を国語化して書き表すものが多い。
- (3) 書き表し方に一定の慣用ができています。

このように、外来語の表記に、同じ原則を適用することができないところに、困難点がある。

外来語の表記に用いる片仮名を分類して示すと次のようになる。

(1) 五十音図の仮名

アイウエオ カキクケコ サシスセソ タチツテト ナニヌネノ
ハヒフヘホ マミムメモ ヤユヨ ラリルレロ ワン

(2) 濁音・半濁音の仮名

ガギグゲゴ ザジズゼゾ ダデド バビブベボ パピブペポ ヴ

(3) 拗音^{よう}の仮名

キャキュキョ シャシュショ チャチュチョ ニャニュニョ

ヒャヒュヒョ ミャミュミョ リャリュリョ ギャギュギョ
ジャジュジョ ビャビュビョ ピャピュピョ

(4) 小文字のフィウエオヤユヨを持つ仮名

クァ クィ クェ クォ シェ チェ ツァ ツェ ツォ ティ ファ
フィ フェ フォ グァ ジェ ディ デュ ヴァ ヴィ ヴェ
ヴォ

(5) 符号 ー (長音符号)

ン (はねる音) ッ (つまる音)

したがって、次のような形は、用いられない。

キ エ ラ デ ズ ダ ヌ デョ トゥ ドウ イェ ウィ
ウエ ウォ スィ ツィ グィ グェ グォ ズィ ズィ ファ
フュフュ ヴァ ヴュ ヴォ テュ クッ グッ

外来語の学習で問題となるのは、原語の発音と変わってしまったものや、和製英語の場合であろう。

radio [rédiòu] ー原音に近く発音するとすれば、レイディオとなるのであるが、日本語の慣習として、ラジオと言うことになっている。これなど初級のクラスで「これはラジオです。」という文型で教えると、学習者から「先生の発音はなまっている。レイディオが正しい。」というような意見がとび出すことがある。「日本では、ラジオと言うのだ。」と説得するのに骨を折ることがある。

野球のナイターにしても、正しくはナイト・ゲームであり、ナイターは和製英語である。これなども理解しにくいものとなるようである。

新聞や雑誌で、カタカナ語が増えている現在、正しく理解するには日本人以上の困難さが増している。教育者は、うっかりカタカナ語を使わないようにしたいものである。

外来語の表記の原則は、昭和29年3月15日国語審議会報告があり、現在では、ほぼこれによって書くことになっている。

ただし、「ファ、フィ、フェ、フォ、ヴァ、ヴィ、ヴ、ヴェ、ヴォ」をな

るべく「ハ、ヒ、ヘ、ホ、バ、ビ、ブ、ペ、ボ」と書くことや、「ティ、ディ」を「チ、ジ」と書くことなどに異見が出て、昭和62年以後、審議会は再検討に入っている。

1.6. くぎり符号

くぎり符号は、文章の構造や語句の関係を明らかにするために用いるものである。昭和25年の『文部省刊行物表記の基準』（後に、『国語の書き表わし方』と改題）に、次の5種類が挙げられている。

- | | |
|-------------|-------|
| (1) 。 | まる |
| (2) 、 | てん |
| (3) ・ | なかくてん |
| (4) () | かっこ |
| (5) 「 」 『 』 | かぎ |

これに続いて、昭和27年の『公用文作成の要領』では、

句読点は、横書きでは「，」および「。」を用いる。事物を列挙するときは「・」（なかくてん）を用いることができる。

同じ漢字をくりかえすときには「々」を用いる。

とある。

縦書きの場合の「、」（読点^{とくてん}）は、横書きでは「，」（コンマ）にすることになったが、日本語教育の教科書では、縦書きへの移行を考慮してか、初級の横書きのところでも「、」を使っている場合がある。

また、公用文では、「 」の中に「。」（句点）をつけることになっているが、小説などではつけていないものが多い。公用文では「？」「！」は使わないことになっている。もし使う場合には、「？」や「！」のあとには「。」は不要である。

〔総合問題〕次に掲げる文章を教材化するために、現代表記に改めるとすれば、どのように書き改めたらよいか。また、その理由も述べよ。

吾輩は猫である。名前はまだ無い。

どこで生れたか^{とん}頓と見當がつかぬ。何でも薄暗いじめじめした所でニャーニャー泣いて居た事^{だけ}丈は記憶して居る。吾輩はこゝで始めて人間といふものを見た。然もあとで聞くとそれは書生といふ人間中で一番^{どうあく}獯惡な種族であつたさうだ。此書生といふのは時々我々を^{つかま}捕へて煮て食ふといふ話である。然し其當時は何といふ考もなかつたから別段恐しいとも思はなかつた。但^{ただ}彼の^{てのひら}掌に載せられてスーと持ち上げられた時何だかフハフハした感じが有つた許^{ばか}りである。掌の上で少し落ち付いて書生の顔を見たのが所謂人間といふものゝ見始であらう。此時妙なものだと思つた感じが今でも残つて居る。

〔解答例〕

吾→我が（表外字）

無い→ない（漢字でもよいが、仮名がふつう。）

生れた→生まれた（「生む」との対応）

頓と→とんと（表外字）

當→当（旧字体）

ニャーニャー→ニャーニャー（^{よう}拗音）

て居た→ていた（補助動詞）

事→こと（抽象名詞）

^{だけ}丈→だけ（助詞）

て居る→ている（補助動詞）

吾→我が（表外字）

こゝで→ここで（くり返し符号）

始めて→初めて（異字同訓）

いふ→いう（仮名遣い）

^{しか}然も→しかも（接続詞）

^{どうあく}獯惡→^{とうあく}獯惡（「獯」が表外字である

が、ほかに言いかえられないので、振り仮名だけなおす。）

あつた→あった（仮名遣い）

さうだ→そうだ（ “ ” ）

^{この}此→この（表外字）

いふ→いう（仮名遣い）

^{つかま}捕へて→捕まえて（送り仮名）

食ふ→食う（仮名遣い）

然し→しかし（接続詞）

其 その →その（表外字）	「っ」促音）
當→当（旧字体）	ば ば かり→ばかり（助詞）
いふ→いう（仮名遣い）	掌→手のひら（表外音訓）
考→考え（送り仮名）	落ち付いて→落ち着いて（「付」より「着」のほうがふつう。）
なかつた→なかった（仮名遣い）	所謂→いわゆる（「謂」は表外字）
恐しい→恐ろしい（送り仮名）	いふ→いう（仮名遣い）
思はなかつた→思わなかった（仮名遣い）	ものゝ→ものの（くり返し符号）
但 ただ →ただ（接続詞）	見始→見始め（送り仮名）
掌 てのひら →手のひら（表外音訓）	あらう→あろう（仮名遣い）
時→とき（抽象名詞）	此→この（表外字）
フハフハ→フワフワ（発音）	思つた→思った（仮名遣い）
有つた→あった（「有」は漢字でも書けるが、仮名書きがふつう。）	残つて居る→残っている（旧字体、仮名遣い、補助動詞）

〔教材化例〕

我が輩は猫である。名前はまだない。

どこで生まれたか、とんと見当がつかぬ。何でも薄暗いじめじめした所でニャーニャー泣いていたことだけは記憶している。我が輩はここで初めて人間というものを見た。しかも、あとで聞くと、それは書生という人間中では一番どうあく癡悪な種族であったそうさ。この書生というのは、時々我々を捕まえて煮て食うという話である。しかし、その当時は何という考えもなかったから、別段恐ろしいとは思わなかった。ただ、彼の手のひらに載せられてスーと持ち上げられたとき、何だかフワフワした感じがあったばかりである。手のひらの上で少し落ち着いて書生の顔を見たのが、いわゆる人間というものの見始めであろう。この時、妙なものだと思った感じが今でも残っている。

第2章 表記についての質疑応答

(加藤 彰彦)

2.1. 漢字について

〔Q1〕 日本語教育では、漢字を何字ぐらい教えればよいのですか。

〔A1〕 『新聞の漢字』(国立国語研究所報告56)によれば、昭和41年1月から12月までの1年間の朝日・毎日・読売各新聞に使用された漢字を調査した結果、3,213字であることが判明しました。専門分野を除いて、この字数は日本語教育にとっても最高目標のものと見てよいでしょう。

その中でも、最も有効と考えられるのは、「常用漢字表」(昭和56.10.1内閣告示)の1,945字です。これで、新聞に出現した漢字の99%を占めます。日本語教育の漢字習得の目標は、まずここに向けられるべきでしょう。ただし、学習者の目的と学習時間によって、おおまかに

初級 500～ 700字

中級 700～1,000字

上級 1,000～2,000字

の目標が立てられます。

現在の教科書で、実際に何字ぐらい提出されているか、見てみましょう(『教科書解題』による)。

日本語読本	一 (国際学友会)	300字 (200時間)
”	二 ”	431字 (300時間)
”	三 ”	521字 (300時間)
”	四 ”	280字 (300時間)
		計 1,532字 (1,100時間)

Modern Japanese for University Students (I C U)

part 1	400字 (160時間)
” 2	629字 (160時間)
” 3	370字 (160時間)
計	1,399字 (480時間)

外国学生用日本語教科書初級

(早稲田大学語研) 700字 (180時間)

日本語Ⅰ (東京外語大附属日本語学校)	350字 (300時間)
” Ⅱ	917字 (350時間)
” Ⅲ	232字 (120時間)
計	1,499字 (770時間)

1984～1987年度日本語能力試験

1 級	2,000字程度
2 級	1,000字程度
3 級	300字程度
4 級	100字程度

なお、日本語教育教科書における提出漢字数の問題等については、「3.2.2.1. 初級・中級・上級の提出漢字数」で詳しく論じているので、そちらも参考にしてください。

〔Q 2〕 漢字の提出順位をどう考えたらよいですか。

〔A 2〕 学習の手順として、易から難へと考えるのが普通ですが、ただ単に、漢字の画数の少ないほうからというわけにはいきません。

文型練習を口頭で行ったあと、時期を見て、漢字を提出していく

ことになります。

例えば、りんごを数えるところで、一つ、二つ、三つ……九つ、十のように漢数字から入ることもできます。

これは ほんです。

のところでは、仮名書きにしておき、漢数字の学習のあと、

ここに 本が 一さつ あります。

という文型が出てきたところで、画数の多い「本」を提出し、画数、筆順など学ぶ方法もあります。

わたしは がくせいです。

という最初の文型練習に、

私は 学生です。

のような、漢字をいきなり提出することは、非漢字系の学習者に抵抗を感じさせます。

(もっとも常用漢字表によれば、「私」には「わたし」の訓は掲げられていないので、本来は

わたしは 学生です。

のように仮名書きにするべきです。)

〔Q 3〕 学年別漢字配当表は、参考になりますか。

〔A 3〕 「学年別配当表」というのは、小学校学習指導要領（昭和52年7月23日文部省告示第155号）の別表として掲げられているもので、

1 年	76字
2 年	145字
3 年	195字
4 年	195字
5 年	195字
6 年	190字

のように配当されており、国語の教科書は、これに従って漢字表記

することになっています。

これは、あくまでも日本の小学生のためのものです。

外国人のための日本語教育として効果をあげるためには、基礎的な学習語を選定し、そこに用いられている漢字を提出することのほうがいでしょう。

したがって、漢字の提出順位は必ずしも学年別配当表に従う必要はないと考えます。

〔Q 4〕 旧字体というのは、どんなものですか。

〔A 4〕 常用漢字表に掲げられている漢字は、明朝体活字の一例を借りて通用字体を示し、括弧に入れて添えてあるのが、いわゆる康熙字典体です。

康熙字典とは、中国清代の康熙帝の命によって、康熙55年(1716)に編集刊行された漢字辞典。42巻、4万9,000字余りを収録。

庄(歴)	圀(園)	医(醫)	壹(壹)	榮(榮)
駅(驛)	円(圓)	塩(鹽)	応(應)	仮(假)
画(畫)	会(會)	学(學)	気(氣)	帰(歸)
旧(舊)	区(區)	広(廣)	号(號)	国(國)
辞(辭)	実(實)	写(寫)	寿(壽)	処(處)
称(稱)	証(證)	条(條)	乘(乘)	触(觸)
真(眞)	尽(盡)	図(圖)	数(數)	声(聲)
双(雙)	総(總)	属(屬)	続(續)	対(對)
体(體)	台(臺)	胆(膽)	团(團)	断(斷)
昼(晝)	庁(廳)	灯(燈)	当(當)	党(黨)
独(獨)	貳(貳)	壳(賣)	麦(麥)	発(發)
秘(祕)	浜(濱)	仏(佛)	並(竝)	辺(邊)

変（變）	弁（辨・瓣・辯）	宝（寶）	翻（翻）
万（萬）	与（與）	予（豫）	来（來）
竜（龍）	両（兩）	壘（壘）	礼（禮）
炉（爐）	劳（勞）	湾（灣）	

〔Q 5〕 活字体と筆写体の違いについて。

〔A 5〕 左側が明朝活字，右側が筆写体です。

衣	—	衣	去	—	去	人	—	人
北	—	北	八	—	八	子	—	子
手	—	手	乚	—	乚	木	—	木
公	—	公	公	—	公	外	—	外
令	—	令	令	—	令	外	—	外
女	—	女	女	—	女			

→のところが，活字体と筆写体の違う部分であり，筆写のさいには，この形で書くことになります。

〔Q 6〕 木の第2画をはねるか，はねないかについて基準はありますか。

〔A 6〕 常用漢字表の（付）字体についての解説の中に，「筆写の楷書では，いろいろな書き方があるもの」の項があり，「はねるか，とめるかに関する例」が出ています。

木——木 木

とあるように、両方の形があります。したがって、一般的に言えば、どちらを書いてもよいことになります。

ただし、教科書の表記が「木」となっており、第2画ははねないように書くとは指導した場合、書き取りの際に極端にはねたときは、採点基準として注意を与えることは必要でしょうが、筆の勢いで、少しぐらいはねていても、その字を誤りとするのではないでしょう。「未、末」のように、横画の長短によって、別字になるときは、厳しく指導する必要があります。

〔Q7〕 「必、臣、馬、上」の筆順について。

〔A7〕 「必の筆順」には、次の3種類が行われていました。

ゝ ノ 乂 必 必 ……………①
 ノ 乂 乂 必 必 ……………②
 丶 心 心 心 必 ……………③

特に③は、「心」に「たすき」をかけるといって指導したときもあったようですが、この筆順で書くと、字の形が違ってしまいます。文部省の「筆順指導の手びき」では、①を採用しています。

「臣」の筆順には、次の2種類があります。

丨 冂 冂 臣 臣 (7画)……………①
 一 冂 冂 臣 臣 (6画)……………②

第1画を縦にするか、横にするかによって、画数が変わります。
「筆順指導の手びき」では①の筆順を採用しているので、画数は7画になります。

「馬」の筆順は、外国人には難しいらしく、

ら馬馬

右から左へと書き始め、一筆書きのように書いていることがあります。「手びき」に従って

1 厂 冂 𠂇 馬 馬

のように、最初から指導すべきものと思います。

形が合っていれば、どうでもよいというのではなく、筆順は画数とも関連するところがあり、辞書を引くことにも役立つことを知らせておく必要があるでしょう。上の場合は、止との関連から

1 ト 上①

のように、縦から書くことに統一しておくとう便利ですが、行書になると、

一 尸 上②

のように、横画から入ることもあります。

1 ト 占 点①'

尸 占 点②'

も同じです。

〔Q 8〕 画数の数え方で注意すべき点について。

〔A 8〕 筆をおろして1筆で書ける点や線を1画と数えます。

、 一 | ノ \ 7 L 3 乙

系 々 么 么 彡 彡 系 (6画)

及 ノ 乃 及 (3画)

辺 フ 刀 刀 刃 刃 (5画)

国 1 冂 冂 冂 冂 冂 冂 冂 (8画)

医 一 ㄥ ㄥ ㄥ ㄥ ㄥ 医 (7画)

弓 フ フ 弓 (3画)

〔Q 9〕 新聞で、常用漢字表外字を使っていますが、どんな字がありますか。

〔A 9〕 新聞では、常用漢字表に掲げてある漢字と、その音訓の示す範囲内で使うのを原則としています。ただし、新聞協会の用語懇談会が使用しないことを決めた11字、

謁、虞、且、箇、邇、但、脹、朕、附、又、濫

を削除し、表外字6字、

龜、肱、痕、挫、哨、狙

を加えてあります。

例えば、「混とん、こ視たんたん、し烈、抜てき、ほう起、めい福」のように表外字にあたるところをひらがなにしているのが普通ですが、「狙撃」のように、表外字をそのまま使っている場合もあります。

このほか、表外字または表外音訓を使ってよい例を次のように挙げています。

- (1) 固有名詞（人名、地名、学校名、団体名、会社名、商標名、建造物名など）

ただし、固有名詞でも読みにくいものは、その下にカッコして読み方を示すことが望ましい。

〔例〕 石川県鳳至（ふげし）郡 海後宗臣（かいご・ときおみ）

なお、地名・人名の振り仮名は、発音通りに「ぢ・づ」は「じ・ず」とする。

〔例〕 貝塚茂樹（かいづか・しげき）

- (2) 栄典、称号、官職名及びこれに類するもの

〔例〕 旭日大綬章 瑞宝章 藍綬褒章 枢機卿 ……卿 征夷大將軍 祢宜 関脇 伍長

- (3) 文字作品、美術品、映画、演劇、テレビ・ラジオのドラマ、

歌謡曲などの題名

〔例〕 枕草子 糞尿譚 弥勒菩薩像 塩山蔣絵硯宮 天平の薨
鏡獅子 鞍馬天狗 祇園小唄

(4) 古典芸術の名称（この用例に限定）

歌舞伎 義太夫 浄瑠璃 箏曲 常磐津 長唄（小唄 地
唄 端唄） 浪花節 琵琶

(5) 学術上の用語で適当な言い換えのないもの（この用例に限定）

弥生 鍾乳洞

(6) その他、適切な言い換え、書き換えができないもの

〔例〕 桂馬（将棋） 華僑 伊（イタリアの略称）

(7) 小説、短歌、俳句、川柳、詩などの引用

(8) 寄稿原稿で言い換え、書き換え、または仮名書きが困難なもの

(9) 一般原稿でも、適切な言い換えがなく、仮名書きでは意味が分かりにくいもの

以上の(8), (9)で表外字を使う場合はその語の下にカッコして読み方を示す。二度目からは漢字だけでよい。読み仮名は、表外字だけでなく、その成語、熟語の全部に付ける。

〔例〕 杜氏（とうじ） 殷墟（いんきょ）文字 （『朝日新聞の用語の手びき』による）

〔Q10〕 振り仮名を使ってもよいですか。

〔A10〕 当用漢字表（昭和21年11月16日内閣告示第32号）の使用上の注意事項に、

「ト．ふりがなは、原則として使わない。」

とあります。これは、漢字を難しい読みで使うことをやめようとい

う趣旨です。

はる と き た び
青春 時機 旅行

この方法だと、漢字の読みは、いくらでも広がってしまうことになります。国語を平易化しようとするためには、振り仮名がなくても読める文章であることが必要だったのです。

さて、常用漢字表（昭和56年3月23日国語審議会答申）の前文に「読みにくいと思われるような場合は、必要に応じて振り仮名を用いるような配慮をするのも一つの方法であろう。」とあって、当用漢字表の制限的色彩をゆるめ、常用漢字表の目安へと変わることによって、振り仮名を使ってもよい方向が出ました。（もっとも、常用漢字表（昭和56年10月1日内閣告示第1号）には、この表現はありません。）

〔Q11〕 音訓は、なぜ決まっているのですか。

〔A11〕 「当用漢字音訓表」（昭和23年2月16日内閣告示）によって、1,850字の漢字の使い方に制限が加えられました。

例えば、「入」には、「ニュー、いる」だけを掲げ、「はいる」というときは、仮名書きにする。「ひとしお（一入）」も仮名書きにする、「入水（じゅすい）」は表外音になる、といった具合です。

昭和48年、音訓表が改定され、それが常用漢字表に引き継がれました。それに「はいる」という訓が掲げられましたが、今度は「入る」に「いる」「はいる」の二つの読み方ができることになりました。訓が増えたため、使い分けなければならなくなったものが、異字同訓として、国語審議会から発表されました。

（＊印は、増えた訓）

明く・明ける——＊空く・空ける——＊開く・開ける

暖かい——＊温かい

遅れる——＊後れる

堅い——固い——*硬い
裂く——割く
進める——勧める——*薦める
玉——*球——*弾

旧音訓表に比べると、3,122→3,938 音訓となり、816増加しています。(26%の増)

〔Q12〕 常用漢字表の付表というのは何ですか。

〔A12〕 常用漢字表のあとに、付表として、110 語が五十音順に掲げられています。その内容は、漢字2字以上で構成されるいわゆる熟字訓・当て字などです。1字1字の音訓として掲げえないものを一覽表にしたものです。

熟字訓というのは、漢字2字以上の組み合わせ(熟字)を単位とした字訓であり、

明日 あす 田舎 いなか
時雨 しぐれ 紅葉 もみじ

などが例示されています。

当て字というのは、漢字の持つ意味を離れ、その字音又は字訓のみを用いるもので、

師走 しわす 時計 とけい
寄席 よせ 野良 のら(「ら」だけ当て字)

などが例示されています。

また、特別の字訓として、字訓の用法を限定したものや、字訓の変化したものがあり、

お父さん	おとうさん
お母さん	おかあさん
乙女	おとめ
為替	かわせ
一人	ひとり
友達	ともだち

などが例示されています。ただし、「乙女」とあるからといって、「乙姫」と書くことや「友達」と書けるからといって「君達」と書くことなどは、付表に掲げた趣旨に反します。

〔Q13〕 人名用漢字別表に掲げられている漢字の読みは決まっていますか。

〔A13〕 昭和56年10月1日、戸籍法施行規制の一部が改正され、子の名に用いる常用平易な文字は、

一 常用漢字表（昭和56年内閣告示第1号）に掲げる漢字（括弧書きが添えられているものについては、括弧の外のものに限る。）

二 別表第二に掲げる漢字

とあり、別表第二には166字が掲げられています。したがって、1,945字との計2,111字となります。

このほか、片仮名又は平仮名（変体仮名を除く。）とありますが、漢字の読み方についての規定はありません。

ただし、漢字と読み方との間に関連がなく全く根拠のないものは受理されません。

高 ひくし 修 なか 嗣 あき

など。

2.2. 仮名遣いについて

〔Q14〕 「ユー」と発音するのに、なぜ「いう（言う）」と書くのですか。

〔A14〕 「いう（言う）」を活用させてみてください。

語 幹	未然形 ～ナイ ～ウ	連用形 ～マス	終止形 ～。	連体形 ～コト	假定形 ～バ	命令形
い	わ お	い	う	う	え	え

となり、ワ行（ワ・ア行）五段活用です。語幹（活用しない部分）が「い」ですから、終止形も連体形も「いう」と書くことになります。

ただ、発音は「ユー」となりますが、文法上、語幹を動かさないということから、現代仮名遣いでは、表記の慣習を尊重して「いう」と書くことにしているものです。

〔Q15〕 「センサー」と発音しているのに、「せんせい（先生）」と書くのは、なぜですか。

〔A15〕 「生」という漢字の音は、もともと「セイ」なので、発音が「セー」に近くても書くときは「せい」としようという約束です。「現代仮名遣い」（昭和61年7月1日内閣告示第1号）の付記に、

次のような語は、エ列の長音として発音されるか、エイ、ケイなどのように発音されるかにかかわらず、エ列の仮名に「い」を添えて書く。

とあり、例に

へい（塀） めい（銘） れい（例）

などが挙げられています。

〔Q16〕 「こんにちは」を「こんにちわ」と書かないのは、なぜですか。

〔A16〕 「こんにちは」というあいさつ語が、1語であるか、「こんにち」という語に「は」という助詞がついたと考えるかによります。1語であるならば、「こんにちわ」と書くのが「現代仮名遣い」の行き方です。

しかし、第2の2で、表記の慣習を尊重して、助詞の「は」と認め、「こんにちは」と書くことになります。

「これはこれは」「こんばんは」も同じ例です。

〔Q17〕 「いちじるしい」を「いちぢるしい」と書かないのは、なぜですか。

〔A17〕 「ちぢ」となるので、同音の連呼「ちぢみ」と同じ例かと思われるでしょうが、語源的には「いと」「しるし」（たいへん はっきりしている）という語なので、歴史的仮名遣いでも「いちじるし」と書きました。

現代仮名遣い（昭61内閣告示）でも同音の連呼のあと、注意として「いちじく」「いちじるしい」は、この例にあたらないとしています。

〔Q18〕 「にいづま（新妻）」のときは「づ」で、「いなづま（稲妻）」のときは「ず」になるのは、なぜですか。

〔A18〕 内閣告示「現代仮名遣い」によれば、二語の連合の例として「にいづま（新妻）」が挙げられています。すなわち、新しいという意味の「にい」と「つま（妻）」という語が連合したものとみて、表記

の慣習を尊重して、「づ」と書いたのです。それにひきかえ、「いな
ずま（稲妻）」は昔「稲の妻」であるという語源から出たものであ
るにしても、現在では一語の意識であるという理由で、音韻どおり
「いなずま」と「ず」を書くことになります。「稲妻」と書くのは、
あて字ということになります。

ただし、「いなずま」の場合、「ず」と書くのを本則としますが、
「いなづま」のように書くこともできるというのが、「現代仮名遣
い」に示されています。

日本語教育では、本則を採ることにしたほうがよいと思われま
す。

〔Q19〕 「じしん（地震）」を「ぢしん」と書かないのは、なぜですか。

〔A19〕 漢字の「地」には「チ」という音があり、「土地」などとおつかう
ところから、「ぢしん」と書くのではないかという質問がよくあり
ます。「地」は、字音としては、漢音チ、呉音ジであり、「地声、地
面、地獄、地盤、地響き」など、すべて「じ」でよいことになりま
す。「現代仮名遣い」では、「ぢ、づ」があらわれるのは、「ちぢむ
（縮）」のような同音の連呼、「はなぢ（鼻血）」のような二語の連合
の場合だけであり、語頭に「ぢ、づ」があらわれることはありません。
「生地」も「きじ」でよく、二語の連合とは考えません。

「ゆうずう（融通）」の場合、漢字を見ると「ゆうづう」と書きた
くなりますが、「ずう」という発音のとおりを書くわけです。

〔Q20〕 「とお（十）」を「とう」と書かないのは、なぜですか。

〔A20〕 「十」の歴史的仮名遣いは「とを」であるので、「現代仮名遣い」
の説明にあるように、オ列の長音として発音されるか、オ・オ、
コ・オのように発音されるかにかかわらず、オ列の仮名に「お」を
添えて書くことになっています。

〔Q21〕 時間の「十分」は、「じっぶん」ですか、「じゅっぶん」ですか。

〔A21〕 「十」に「ジュウ」という音がありますので、「じゅっぶん」と発音してしまうことがあると思います。しかし、常用漢字表に従えば、「十」の音訓欄に「ジッ」の音が掲げられ、例欄に「十回」とあるところから、「じっかい」と読むことになります。したがって、「十分」も「じっぶん」と読むことになります。

三十分——さんじっぶん

三十階——さんじっかい

二十八（にじゅうはち）、二十九（にじゅうく）、三十（さんじゅう）と続けてくると、次は三十分（さんじゅっぶん）と言いたくなりますが、「さんじっぶん」と言うことになります。

「鉛筆が十本あります。」の場合も同じで「じっぽん」と読みますが、最近「じっぽん」は言いにくいという人もいます。

〔Q22〕 「こおり（氷）」を「こうり」と書かないのは、なぜですか。

〔A22〕 歴史的仮名遣いで「氷」は、「こほり」と書きましたので、「現代仮名遣い」の例示のように、「こおり」と書きます。「行李」は「こうり」となります。また、「小売り」は「コ・ウ・リ」と読んで、長音にはなりません。

〔Q23〕 「もとづく」を「もとずく」と書かないのは、なぜですか。

〔A23〕 「もと」に「つく」と考え、二語の連合の例とするためです。

「きづく」——気づく……「気がつく」とも言うから。

「きずく」——築く……一語であるから。

〔Q24〕 「せかいじゅう（世界中）」は、「せかいぢゅう」ではありませんか。

〔A24〕 「いえじゅう」「まちじゅう」などの「～じゅう」というのは、「すべて」という意味の接尾語であるので、常に「じゅう」と書くのですが、漢字で「中」と書くため、「ぢゅう」と書くのではないかという質問です。「現代仮名遣い」では「じゅう」と書くのが本則ですが、「ぢゅう」と書くこともできることになりました。日本語教育では、本則のほうをとるのが適当でしょう。ただし、学習者が「ぢゅう」と書いた場合、これを誤りとせず、許容であることを知らせる必要があると思います。

2.3. 送り仮名について

〔Q25〕 公用文の送り仮名における許容の語について。

〔A25〕 公用文の場合は、基本的には「送り仮名の付け方（昭和48年6月18日内閣告示第2号）」によることとなっていますが、その後、出された「法令における漢字使用等について（昭和56年10月1日内閣法制局総発第141号）」に例示された、通則6の許容を適用した語については、送り仮名を省いています。

以下、〔買い～〕のところを一部引用します。＊は、送り仮名を省いた例です。一般には省かないで、本則を適用することになっていますから、注意してください。

買い	買受け＊
買上げ＊	買受人
買上品	買い受ける
買い上げる	買換え＊
買入れ＊	買い切り
買い入れる	買い食い

買占め*	買主
買い占める	買値
買い出し	買戻し*
買いだめ	買い戻す
買手	買物*
買取り*	

「買上げ*」や「買入れ*」のように、「い」を省いた例もありますが、「買い切り」や「買い食い」のように、「い」を省かない例もありますので、注意を要します。

「買手、買主、買値」は通則 7（慣用が固定している場合）を適用して、「い」を書かないことにしていますが、同じような形に見えますが、「買物*」は、「い」を省いた許容のほうを適用しています。

このように、公用文の送り仮名を使用しようとするときは、「公用文送り仮名用例集」を絶えず参照しなければならないと思います。

2.4. ローマ字について

〔Q26〕 駅名に、「SHINJUKU」（新宿）とあるが、「SINZYUKU」ではないですか。

〔A26〕 ローマ字のところで説明したように、つづりかたには、もともと訓令式と日本式とヘボン式の 3 種があります。

昭和 29 年 12 月 9 日内閣告示第 1 号のローマ字のつづり方の第 1 表によれば、

SINZYUKU

となりますが、J R（旧国鉄）では、ヘボン式（第 2 表がこれに当たる）のつづり方を採用していますので、

SHINJUKU

となります。

昭和20年9月3日連合国最高司令部指令により、地名の英文表記についてヘボン式を用いることになり、鉄道の駅名もヘボン式に書き換えられたのです。

2.5. その他について

〔Q27〕 「あなた」を「貴方」「貴女」と書いてもよいですか。

〔A27〕 「貴方」「貴女」は、よく手紙などに見かけますが、常用漢字表に従うかぎり、書けません。音訓欄にも、付表にもありませんので、仮名書きがよいと思います。当用漢字表の使用上の注意事項では、代名詞は仮名書きにすることになっていましたが、公用文では、次の代名詞は漢字で書くことになりました。

彼	何	僕	私	我々	彼女
(かの)			(わたくし)		
(かれ)					

〔Q28〕 「ご調査」「御調査」は、どちらがよいですか。

〔A28〕 「公用文作成の要領」(昭和27年)によれば、かなで書く語の例として、接頭語・接尾語が挙げられ、

お……(「お」は、かなで書くが、「ご」は漢字でもかなでもよい。たとえば、「お願い」「御調査」「ご調査」

とあります。これによって、接頭語に「ご」を使う例が多くなりました。昭和56年「公用文における漢字使用等について」という事務次官等会議申合せによって、

次の接頭語は、その接頭語が付く語を漢字で書く場合は、原

則として、漢字で書き、その接頭語が付く語を仮名で書く場合は、原則として、仮名で書く。

例 御案内 御調査

ごあいさつ ごべんたつ

のように、今後は書かれるであろうと思います。

「御」には、「お」という訓が掲げられていないので、

御願ひ、御申し込み

とはしないで、

お願い、お申し込み

と書くことになります。

〔Q29〕 「……て頂く」と書けますか。

〔A29〕 「公用文における漢字使用等について」（昭和56年10月1日事務次官等会議申合せ）によれば、

次のような語句を、（ ）の中に示した例のように用いるときは、原則として、仮名で書く。

として、

……ていただく（報告していただく。）

の例が挙げられています。すなわち、補助動詞として用いられるときは、仮名で書くことになります。本来の動詞の意味で使うときは、

御返事を頂きたい

のように漢字を使うことになります。

…ていく、…ておく、…てください、…てしまい、…てよい、

…かもしれない、…にすぎない

なども仮名で書くことになります。

〔Q30〕 「…することがある」というとき、「…する事がある」と書いても

よいですか。

〔A30〕 「公用文における漢字使用等について」（内閣閣第138号，昭和56年10月1日）及び，これに基づいた「文部省 用字用語例」（昭和56年12月）によれば，「事を起こす」とか「事に当たる」というように用いるときは，漢字の「事」を書きますが，「許可しないことがある」「私ことこのたび…」のように，抽象名詞として用いるときには，仮名書きにします。同じように，

事故のときは連絡する。

現在のところ差し支えない。

正しいものと認める。

なども仮名で書きます。

第3章 外国人学習者に対する表記の指導

(伊藤 芳照)

3.1. 外国人学習者と日本の文字

外国人学習者にとって、日本の文字、特に漢字が日本語学習上の大きな障害となっていることはよく知られている。では、具体的にどのような困難点があるのでしょうか。漢字系と非漢字系の学習者のそれぞれについて、あらかじめその困難点を承知しておいたほうがよいだろう。

3.1.1. 非漢字系学習者の困難点

わたしたち日本人が、例えば、タイ国を訪れた時、見慣れぬタイ文字の標識や看板に心がなえ、たまにローマ字書きや漢字書きの看板に出会うと救われたような気持ちになることがないだろうか。非漢字系学習者が初来日した際に、日本の周囲から受ける印象もこれと同様のものがあるであろうことは容易に察せられる。しかも、短期間の旅行者ではなく、今後この見慣れぬ文字を幾つとなく覚え、大学の入学試験を受けなければならないという留学生にとっては、一体覚えられるだろうかという不安感を、だれしも抱くであろうことは想像に難くない。非漢字系学習者が日本の文字を学習する場合は、わたしたち日本人が、アルファベット以外の固有の文字を有する外国語を学習する場合に抱く緊張感より、はるかに大きいものがあるであろう。わずか28個の字母を持つアラビア語や、子音字母44+母音符号21のタイ文字の習得ですら、かなりの負担と緊張を感じるはずであるのに、表音字母である仮名だけでも、平仮名46個、片仮名45個（ヲを除いた場合）を有する日本語、しかも、それだけでは実生活の何の役にも立たず、その外に1,000から2,000字の漢字も学ばねばならぬということを考えた時、非漢字系学習者にとって、日本語の習得がいかに抵抗の大きいものであるかということが、文字面から

だけでもうなずかれるだろう。

更に、日本人なら、文字の習得にかけられる期間は、短くとも義務教育期間の9年間を費すことができるし、大学受験の場合はたっぷり12年間かけることができるが、大学進学を目指す外国人留学生にとっては、既に児童ではなく成人であるとはいえ、1年ないし1年半程度しか余裕がないという時間的な制約もある。初歩の段階の文字学習でつまずいたりあきらめさせたりしてしまつては、その後の日本語学習も順調に進むはずがない。そこで、導入期あるいは初級段階の文字指導は慎重にならざるを得ないし、その困難性がいろいろと論議され、教師も漢字の提出順や提出数、教え方や定着のさせ方などに神経を使うことになるのである⁽¹⁾。非漢字系学習者にとって、漢字が日本語学習上の大きな負担になっていることは常識的にもうなずけるところであるが、その困難点を具体的にみてみよう。

下瀬川慧子氏の報告⁽²⁾によれば、非漢字系学部留学生にとっては下記項目中、④を指摘した者が最も多く、以下②③①⑤の順になっているようである。

- ① 同じような形の字が多い。
- ② こまかい規則が多い（例えば「丶」があるかないか、「ㇿ」か「ㇾ」か、「ㇿ」か「ㇾ」かなど）
- ③ 同音の字が多い。
- ④ 一つの字に読み方が多い。
- ⑤ 読み方に例外が多い。

私が折に触れ学生たちの意見を徴したところでも、上述の①類形字、②点画の小異、③同音字、④多音訓字、⑤熟語になった時の読み方の変化等が全部指摘されたが、その外に、

- ⑥字数が多すぎることを。

⑦ノートをとる際、漢字を考えながら書くのでスピードが落ちること。などが挙げられた。以上の学生たちの苦情は、下記のように大きく二つにまとめられると思う。

- (ア) 漢字の「読み」のほうでは、一つ二つの読み方を覚えただけではどう

にもならぬこと。

- (イ) 「書き」のほうでは、多くの漢字の中から適当な字を選び出し、誤りなく書くことに大きな負担があること。

更に、これらの悩みは、学習量の増加に比例して増大するから誠に気の毒である。

しかし、日本語学習の初歩のころは、

- (ア) 泣きたいほど苦しい。幾つ覚えたら用が足せるようになるのか。
(イ) まるでザルで水を汲むようなきりのない作業にうんざりする。
(ウ) 「効果的な漢字の学習法を募集中」という張り紙を、部屋の戸に張っておきたいくらいだ。

などと言っていた者でも、1年ぐらい経過すると、やはりそれなりに落ち着いた反応を示すようになってくる。

- (ア) アルファベット言語は、発音を考えないと意味に結びつかないということがあがるが、漢字は発音や読みが分からなくとも一目で意味を理解できるところが大きな長所である。
(イ) 語の単位がすぐ分かる。このことは誤解を少なくし、読みを速めるのに役立つ。
(ウ) 未知語でも意味の見当がつけやすい。
(エ) 日本語は漢字を使っているために同音語が増えたが、現在の日本語がそうってしまった以上、迅速確実に意味の伝達を行うには漢字に頼らざるを得まい。また、限られたスペースに多くの情報が書けるから、紙の節約にもなる。
(オ) 全文仮名書きにした時と、漢字仮名交じり文との便利さを比べると、後者のほうが比較にならぬほど優れている。
(カ) 結局、日本文化と漢字とは切り離せぬものだから、漢字不要論とか廃止論といったものには、文化的にも賛成できないし無理なことと思う。
非漢字系学習者でも、上述のように日本語における漢字の重要性を認識するに至るのだが、それにしても、より簡便なものにならないかとは学習者の

だれもが感じているようである。漢字は、日本人、日本語のためにあるのであって、外国人の学習の便を優先させることは話が逆であるということを充分承知の上で、

(㍑) 漢字数の整理, 削減

(㍒) 思い切った字画の簡略化

(㍓) 1字1音訓といった読み方の整理

などができないものかと願っていることも確かである。

3.1.2. 漢字系学習者の困難点

中国, 韓国, 香港, シンガポール等の漢字系学習者が, 全く漢字を知らぬ人たちに比べて比較にならぬほど日本語学習上の恩恵をこうむっていることは論をまたない。だからといって, これら漢字系学習者には問題がないかと言えば, 決してそうでもなさそうである。その障害は下記のようなところにある。

(㍑) 日本語と中国語の漢字語彙の意味が必ずしも対応していないということ。これについては, 既にいろいろと指摘されている⁽³⁾。

(㍒) 意味が対応していないことにも増して困るのは, 漢字の読み方であるようだ。たとえ, 日中両国語で意味の異なる同形の語があるとはいえ, 目で追っていけば文意は大体了解できる。黙読はそれほど苦にならないが, 声に出して音読するとなると非常に疲れると言う。韓国では, 日本語と語順が同じであること, 漢字にもなじみがあることなどから, 当初は日本語学習希望者が集中するが, すぐにあきらめてしまうそう。日本語の漢字の使い方や読み方に参ってしまうとのことである。

(㍓) 漢字と仮名の混用(送り仮名のわずらわしさ)を挙げる者もいる。漢字だけで用を足している漢字系国民にとっては当然のことかもしれない。

(㍔) 字体の相違もある。中国大陸では簡体字, それ以外の漢字社会では繁体字を使っているが, どちらにしても現代日本語の漢字とは異なる字形があり, 無意識のうちに書き慣れたものが出るようである。特に我々日

本人が気になる字形には次のようなものがある。

- (a) 竹かんむりが「𦵏」とか「𦵐」とか「𦵑」の形になり、「答」とか「𦵒」とか「𦵓」とか書いたりすること。また、竹かんむりを草かんむりにして「𦵔」と書いたりすることもある。
- (b) 「万」を「𠂔」と書くこと。
- (c) 「関係」を「𠂔係」,「歴史」を「𠂔史」,「労働」を「𠂔働」,「動作」を「𠂔作」,「環境」を「𠂔境」と書いたりすること。

かなりの日本語学習歴があり、日本語における漢字の字形を熟知しているはずの者でも、作文などでは平気で書いてくる。平気というより、むしろ無意識のうちに書いてしまうのであろう。

以上、非漢字系と漢字系学習者の困難点をみてきたが、そこには当然のことながら両者の間に相違点と共に共通点がみられる。非漢字系学習者にとっては、日中両語における漢字の意味の不一致とか、字形の異なることなどは問題にされず、一方漢字系学習者にとっては、類形字や点画等については問題にはならない。両者で共通して指摘された日本語における漢字使用上の困難点は、漢字の読み方に関する事柄であると言えよう。

3.2. 入門期・初級段階

以下、入門期・初級段階の文字教育における指導項目⁽⁴⁾とその留意点について述べる。

3.2.1. 仮名の読み書きについて

3.2.1.1. 平仮名の指導項目及び留意点

(1) 指導項目

- (ア) 平仮名46文字の読み書きを指導する。

- (イ) 濁音，半濁音，長音，促音，拗音，撥音の表記を，区別して読み書きできるようにする。ただし，拗音については，「しえ，ちえ，つぁ」など特殊なものの読み書きはこの段階では要求しなくてもよい。

(2) 平仮名の導入の仕方

平仮名の読み書きを指導する際，二つのやり方が考えられる。

- (ア) 五十音図の順に 1 字 1 字提出して，平仮名 46 文字の読み書きを先に済ませ，その後で語の読み書きに移る。
- (イ) 五十音図にはとらわれず，初めから語の形で意味と読み書きを結びつけて記憶させる。

前者のやり方は，まず五十音図全体の枠組みを紹介し，平仮名の全体像を提示するやり方で，学習者にとっては総枠を見通せるという安心感があるわけで，この心理的効果は大きいと思う。かつ，辞書，事典類の五十音順とか，動詞の活用形を把握させる点で利益があると思うが，一方，極めて短時間のうちに 46 文字の読み書きを個別に指導するために，語を読む時いちいち五十音図を見て拾い読みをする習慣から抜け出せず，定着という面では不安が残る。

後者は，語の意味と共に文字も覚えるから，定着率は高いだろうが，単語の提出にあまり配慮が払われておらず，また，平仮名の範囲，全体像の把握，五十音図の認識といった点でも不安がある。

そこで，最近では，それぞれの長所を取り入れた導入の仕方が試みられているようである。つまり，五十音図の構成を認識させると共に，意味のある語の読み書きで，各行ごとに平仮名の定着化を図るというやり方である。仮名の各行指導とでも言えるかもしれないが，ア行の 5 文字の読み書きを紹介した後で，ア行の範囲内で書ける語を与え，その読み書きを指導するというやり方である。語例を提示する際，名詞語が適当かと思うが，入門期の段階で説明が可能な語であれば，動詞や形容詞でもよいだろう。

(語例) あい あお いえ うえ うお あう おう あおい

カ行以下の場合も同様で、

(a) 新規提出行の5文字で書ける語例

(b) 既習の仮名を交えて書ける語例

をそれぞれ提出する。ただし、(a)については適当な語例を選ぶことがかなりむずかしい場合もあると思われるので、あまりこのことにこだわらなくともよいかもしれない。

(カ行の語例) かい かお いか あかい あき いき えき かき
くい かく いけ こい こえ こけ ここ

教場における実際の指導では、絵になりやすい語、説明が簡単にできる語という制約はあるだろうが、ア行やカ行で書ける語としては、以上のようなものが考えられるだろう。これは、一つ一つ既習の仮名の読み書きを念押ししながら進んでゆくやり方で、時間がかかるように見えるが、定着という点からはこの方法が一番よいようである。

なお、語例を選ぶ時にちょっと気をつけたいことがある。うっかりしていると、母音が無声化している語例をつい出してしまうことである。カ行で言えば「きく」とか「くき」の類である。これらについては、実際の音価は個々の仮名の音とは異なっているとしても、書く時はその仮名を用いるものであることを、清直音表記の指導が一とおり終わったところで一括して紹介しておくのがよいだろう。以下に、この段階の語例としては必ずしも適当ではないものもあるかもしれないが、母音が無声化している語を念のため例示しておく。

きか きかい きけん きこん きし れきし きせん きそく きた
きつね きてき
くき くさ くし くすり くち くつ くつした
しか しかく しき ふろしき しそ した あした しち
すぎ すきやき すそ
ちか ちかい ちかてつ ちち
つき つくえ

ひたい ひと ひとつ ひとり
ふか ふかい ふく ふさ ふし ふた ふたつ ふたり ふち
ふとい ふとん

(3) 平仮名指導上の留意点

仮名指導で注意することは、他の仮名と読み誤られないように書くということであろう。平仮名を教える際に、「き・さ」「た・な」「は・ほ」「ま・も」「る・ろ」「あ・ぬ・め」「ね・れ・わ」などの類形字の書き分けを注意するようにとよく言われる。それらの字形の違いを認識させることは大切なことであるが、たとえば下手な書き方であっても、「な・ぬ・ね・ま・る」のように、まるめるところがまるめてあったり、「き・ほ」のように横画が二本書いてあれば、これを他の類似の仮名と読み誤られることはないはずである。それよりも、「い」「り」のように間隔の取り方や傾斜の方向があいまいだと、「い」か「り」か「こ」か判断に迷うことになる。「て」なども、「て」か「こ」かあいまいだし、「ろ」は「う」「ら」「ろ」のいずれかはつきりしない。この辺りが、平仮名の書き方指導で留意すべき点であろう。

(4) 助詞の「ハ・ヘ・ヲ」について

基本的な平仮名表記の指導が終わってからになるが、助詞の「ハ・ヘ・ヲ」と、連濁・連呼の「ヂ・ヅ」の読み書き指導がある。

助詞の「ハ・ヘ・ヲ」は、それだけを取り上げても意味はなく、短文中で行うのが自然であり指導もしやすい。特に「ヘ・ヲ」は動詞と強く結びついているので、それぞれの文型を導入する課で指導したほうが具体的であってやりやすいかもしれない。平仮名表記に関する一とおりの事柄を、導入期という短時日のうちに全部紹介して消化不良を起こさせるのは得策ではないかもしれない。段階的に新知識をその都度入れていったほうが定着しやすい。他の言語要素（音声・文法・語彙）の場合でも同様であろうが、学習のごく初期の段階ではあまりあせらないほうがよいようである。

(5) 連濁・連呼の「ヂ・ヅ」について

いわゆる「四つ仮名」といわれている「ジ・ヂ・ズ・ヅ」の書き分けは、日本人でも迷うことが多い。特に中級・上級あたりの語彙の中には、教師でも辞書を引いて確かめないと自信の持てないような語がいろいろと出てくる。外国人に対する日本語教育の立場からは、ji, zu の表記が一とおりであるに越したことはない。しかし、現行の仮名遣いでは、一定の決まりによってそれぞれを書き分けているのが実状である。どんな場合に「ヂ」や「ヅ」と表記するのかの指導は、やはりその語例だけを取り上げるのではなく、全体的な一連の表記の仕方の中で、当然そのような書き方になるのだという理解を与えることが肝要である。

ヂ・ヅと表記する場合の一つは、2語の連合したもの、普通連濁といわれているものであるが、日本語における連濁という現象の中の一つとして、後接語の語頭が「チ、ツ」で始まるものは、そのまま濁点を付し、「ジ」や「ズ」に改める必要がないのだということを理解させたい。

(語例) ひ+かさ→ひがさ (日傘) め+くすり→めぐすり (目薬) う
んどう+くつ→うんどうぐつ (運動靴) はい+さら→はいざら (灰皿)
かわ+さかな→かわざかな (川魚) ほん+たな→ほんだな (本棚)
うで+とけい→うでどけい (腕時計) ほん+こ→ほんばこ (本箱)

このような一連の連濁現象とその表記を理解させた上で、「ヂ、ヅ」の場合も同様であることを納得させるのがよいだろう。

(語例) は+ち→はなぢ (鼻血) そ+ちから→そこぢから (底力)
ま+ちか→まぢか (真近) ちゃのみ+ちやわん→ちゃのみぢやわん (茶
飲み茶わん) み+かつぎ→みかづぎ (三日月) ひげ+つら→ひげづ
ら (ひげ面) こ+つかい→こづかい (小遣い) て+つくり→てづく
り (手作り) こ+つつみ→こづつみ (小包) は+こ+つめ→はこづめ
(箱詰め) こ+ろ+つ+よい→こ+ろづよい (心強い)

上記語例の中には、初級段階の語彙としてふさわしくないものもある。学習の段階に合った適当な語例があれば一番よいが、また、特にその語を教え

るというわけではなく、連濁現象を説明する例として挙げるだけであるなら、それほど神経質にならなくてもよいだろう。（次の連呼の場合の語例も同様である。）

「ヂ・ヅ」と表記するもう一つの場合は、同音の連呼といわれるものである。これも他の一連の表記の中の一つとして、その中では決して例外的な書き方ではないのだということを理解させればよいだろう。

（語例）かがみ かがむ かがやく くぐる けげんな こごむ さざな
み しじま すず すずしい そぞろ ただいま ただしい ただちに
ちちまる ちちむ ちぢめる つづく つづける つづる とどく と
どこおる とどまる とどろく はばたく ひびく ふぶき ほぼ

初級段階の初めの2, 3週を特に入門期と名付けることがあるが、この段階は仮名指導と発音指導が中心となる期間である。仮名指導の場合は、仮名の読み書きと共に、現代仮名遣いについての理解にも注意を向けさせるわけで、それに必要な情報は与えなければならないが、日本語についての知識がほとんど無い者に対し、この短期間に多くの情報を与えて混乱に陥れるのはかえってよくないと思う。繰り返して言うようだが、後回しにしてもよいものや、そうしたほうが効果的に教えられるものは、その現象が提出された時点で指導したほうが、理解されやすいし、定着がより確実になるだろう。

3.2.1.2. 片仮名の指導項目及び留意点

漢字系学習者には、日本語の片仮名礼賛者が多い。外国語を漢字でしか表記できぬ中国語の場合、音を写すと共に意味も添えるとなると大変で、「可口可樂」という音意兼訳の傑作もあることはあるが、多くは「録音帯」（テープ）式の意識中心で原音は無視される。何とか原音を写そうとしても、「三明治」「三文治」と書かれると、さすがの中国人でも判断に苦しむという。その点日本語は片仮名という表記体系があって、比較的原音に近い「サンドウィッチ」という音訳ができるから便利だと言う。いずれはそのような認識を持つに至るにしても、日本語学習の初期で、平仮名の習得に合わせて、そ

れと同程度に片仮名の習得を要求することは酷である。片仮名で文をつづることはまずないが、現代日本語においては片仮名語の出現率が高いから、やはり一とおりの読み書きについての指導をしておくことは必要である。しかし、平仮名同様に書けることを強く要求しなくてもよいだろう。以下、片仮名の指導項目と留意点を挙げる。

(1) 45文字の読み書き

「ヲ」を除く45文字の読み書きを指導する。「ヲ」を除くのは、現代日本人は漢字と平仮名で表記し、片仮名表記は外来語とか動植物名とかの特定の語の場合、あるいは、電報文などの外国人学生がほとんど接触する機会のないものに限られ、助詞の「を」にしか使われぬ「ヲ」が出現する機会はほとんどないと考えられるので、省いてもよいとしたわけである。片仮名45文字の中で特に注意すべき字形は、「シ」と「ツ」、「ソ」と「ン」における点の並べ方と、最終画のはねの方向であろう。

(2) 濁音と半濁音の読み書き

「ガ・ザ・ダ・バ・パ」各行の読み書きができるようにする。ただし、平仮名の場合と異なり、連濁や連呼にだけ使われる「ぢ・づ」が片仮名表記で現われることはないから、「ヂ・ヅ」の読み書きは省いてもよいことになる。

(3) 促音の読み書き

促音がカ・サ・タ・パ各行音の前に現れることは平仮名の場合と同じであり、小さい「ッ」で表される。ただし、片仮名表記の語に限って下記のような場合にも日本語では促音表記にされるのが普通で、これらの読み書きもできるようにその都度指導する。

(語例) ドッグ ハンドバッグ バッジ ロッジ エッジ キッド ペッド
ド マッハ イッヒ スタッフ ゴッホ ポップ

片仮名の促音表記ということでこれらのすべてを一括例示するのではなく、当該語が教材に現れた都度、片仮名の促音表記は平仮名の場合とはやや異なる点があることに注意させればよいだろう。

(4) 拗音の読み書き

日本語の基本的な拗音の表記、それは平仮名の場合と同様のものであるが、まず、その読み書きができるように指導する。外国語に見られる下記のような特殊な拗音表記は、この段階では触れる必要はないだろう。

(例) ウィ ウェ ウォ クァ クッ シュ チュ ツァ ツィ ツェ
ツォ ティ ファ フィ フェ フォ ジュ ディ ヴァ ヴィ ヴェ
ヴォ

このうち、初級段階で提出されそうな語に使われる拗音は「パーティー」の「ティ」ぐらいであろうが、仮に「チェス」「ファイヤー」「テレフォン」などが提出された場合でも、その都度それらについての表記や、あるいは関連拗音(「ファ」が提出されたら「フィ」「フェ」「フォ」)の読み書きについて紹介する程度でよいと思う。まして、外国の地名・人名のみに現われる「イエ・ウェ・トゥ・デュ・ドゥ」などまでには言及する必要はないだろう。

(5) 長音符号の読み書き

長音符号を用いた表記が、縦書き「㇏」の場合も横書き「ー」の場合も読み書きできるように指導する。なお、長音符号を使わずに、平仮名の長音表記と同様「ウ」「エ」を添えて慣用的に表記されている次のような語も読めるようにする。これらは()内の語との意味の違いを、表記を変えることにより示そうとしたものであろう。

(例) ボウリング (ボーリング) バレエ (バレー)

片仮名も平仮名同様自由に読み書きできるようにしようとすると、学生に無理を強いることになるので、一とおりの基本的な表記の指導が終わった

ら、以後は文中に片仮名語が現われる都度、繰り返し確認や補足指導をするのがよい。ただ自分の氏名や国名は、いつでも自由に書けるようにしておくことはもちろんである。

3.2.1.3. 聴写における留意点

(1) 「聞いたとおりに書け。」ということについて

仮名の指導においては、仮名についての知識や情報を導入した後で、定着と確認のための書き取り・聴写を毎回行うのが普通であるが、平仮名語にしても片仮名語にしても、教師の期待どおりにはなかなか正しく書いてくれないものである。そこで、つい「(わたしが) 言ったとおりに書きなさい。」とか「(あなたが) 聞いたとおりに書きなさい。」とか言ってしまうのだが、これは学生に指示を与えているように見えて、実は何の効果も上げていないということに教師はもっと気付くべきである。入門期の段階では、音を聞き取り、それを適当な仮名に結び付けて表記することが意外なほどにむずかしいものなのである。

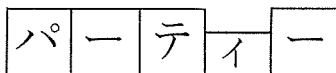
片仮名語の例であるが、原語のつづりを考えれば分かりそうなものなのに「テレビ」とか「ドライブ」とか書いて平気である。一つには、教師の口から出た

「わたしはゆうべテレビを見ました。」

「きのう友だちとドライブをしました。」

などの文意把握がしっかりできていなかったということもあるが、それよりも外国人学生が耳で理解した音というのはさまざまであって、それを長音、拗音、促音、濁音及びその表記がしっかり固まらぬ時に、自分の耳で聞いたとおりに何とか書き表そうとするから妙な語形になってしまうのであろう。「パーティー」という書き方や読み方を教えた翌日の書き取りでも、「パーチ・パーテ・パアテ・パーティ」とさまざまな表記が現れる。学生の耳は、日本語の音組織に慣れない入門期・初級段階では、まだ頼りにならぬものと

考え、party の意を表す語形は、



以外にはないのだと悟らせ、視覚的に覚えさせると共に手で書き慣れさせることが大切である。ただし、このことは耳の訓練をおろそかにしてもいいということでは決してない。初期の段階では、どうしても濁音が聞き取れない者、長短の区別がつかぬ者がおり、それらに向かって「聞いたとおりに書け。」と言っても無駄な話で、そんな学習者にはまず語形として覚えさせるしかないということである。

このことは初級のかかなり進んだ段階でも言えることで、特に未知の語がいかに聞き取りにくいものかということに、教師はもっと留意しなければならない。例えば、書き取りの文中に「同志社大学」の名が出た時、

としあ とっしや どしや どっしや どうしや どうっしや どうし
た 同医者

と、実に種々の書き方が現れ「どうししゃ」と書けた者は一人もいなかった。初級の段階で未知語を含んだ文の聴写をさせることの是非については、当然議論のあるところであろうが、それにしても「わたしが言ったとおりに書きなさい。」というのは、無意味な指示でしかないということになるだろう。

(2) 聴写における清濁表記の誤り

語形として定着していないと、漢字系・非漢字系を問わずいつまでも清濁表記の誤りを犯すことになる。この誤りには、

(ア) 濁音の清音表記化（濁点の付け忘れ）

(イ) 清音の濁音表記化

の二つがあるが、前者の誤りのほうが多く、ガ・ザ・ダ・バ各行にわたってみられる。初期の段階のこの種の誤りは、音声聞き取り上の誤りか、表記上

の誤りかを判断することはむずかしいが、文字指導の立場からは表記上の誤りとして扱うことになるだろう。

(イ)清音の濁音表記化の誤りは、量的には(㉗)濁音の清音表記化の三分の一ぐらいである。また、傾向と言えるほど明確なものではないかもしれないが、下例のように前後に濁音があると、それにひきずられて他の清音まで濁音化してしまうということがあるようだ。

(例) みじがい(短い) みじかくで(短くて) すこしずつ(少しずつ)
しずがで(静かで) でいと・でど(程度)

(3) 聴写における長短表記の誤り

この場合も二様の誤りがあるが、その誤りの出現率は、

(㉗) 長音の短音表記化

のほうが、

(イ) 短音の長音表記

の倍ぐらいの多さである。

(4) 聴写における促音表記の誤り

日本語の促音がとらえにくいということと同時に、五段動詞連用中止法の促音便の未習熟による誤りもある。また、母音が無声化した音は聞き取りにくいせいか、促音と聞き誤って表記する場合もあるようである。

○はやくきって(来て)ください。

○うんどうをして(して)います。

○ひとつ(一つ)いくらですか。

3.2.2. 初級の漢字指導

3.2.2.1. 初級・中級・上級の提出漢字数について

各級の範囲について、明確な線を引くことはむずかしい作業である⁽⁵⁾。各日本語教育機関の対象学生、その学習目的、学習期間及び週当たりの授業時間数、国内の場合と海外の場合等の学習環境による差異などにより、なかなか一律には決められない。したがって、漢字数や語彙数を数量的に規定したり、モデルを示したりすることは困難であると言えよう。けれども、一般的にはどう考えられているのかを、現行の日本語教科書から推し量ってみることはできる。そして、これが現状把握の近道であるかもしれない。次表は、「教科書解題」⁽⁶⁾から、当該教科書と提出漢字数を拾い出したものである。

〔表1〕は、「教科書解題」に「初級・中級・上級をそなえる教科書」として挙げられているもののうち、各級相当教科書の提出漢字数が明示されているものである。

〔表2〕は初級用教科書、〔表3〕は中級用教科書、〔表4〕は上級用教科書で、それぞれ提出漢字数が明示してあるものである。それぞれの教科書の編著者及び発行所等は、前記「教科書解題」（「日本語教科書ガイド」）を御参照願いたい。なお、教科書の配列は、発行年順になっている。

〔表1〕

	初 級		中 級		上 級		計
標準日本語読本	巻一	300	巻二 350 巻三 350	700	巻四 350 巻五 350	700	1,700
日本語読本	一	300	二三 431 521	952	四 280		1,532
Modern Japanese for University Students	Part 1	400	Part 2	629	Part 3	370	1,399
日 本 語	I	350	Ⅱ	917	Ⅲ	232	1,499

〔表2〕

初 級 用 教 科 書	字 教
An Introduction to Written Japanese	680
Basic Japanese ; Intensive Course for Speaking and Reading Vol. 1, 2	466
Learn Japanese Vol. 2 91 Vol. 3 90 Vol. 4 148	329
Intensive Course in Japanese ; Elementary	302
外国学生用日本語教科書 初級	約 700 ⁽⁷⁾
Easy Japanese I 125 II 119	244
Fundamentals of Japanese	471
Comprehensive Japanese (わかる日本語) Part 1 114 Part 2 262 Part 3 323	699
Japanese by the Total Method ; Basic Part 1 193 Part 2 151 Part 3 160	504
日本語 I	329
Reading Japanese (日本語読本)	425
An Introduction to Modern Japanese	450
Foundation of Japanese Language	419
Japanese (日本語) Book 2	51
現代日本語	629
日本語初歩	380

〔表3〕

中 級 用 教 科 書	字 数
Modern Japanese ; A Basic Reader	1,428
Comprehending Technical Japanese (科学技術日本語入門)	500
Comprehensive Japanese (わかる日本語) Part 4	80

日本語中級	825
Intensive Spoken Japanese Book 4	235

〔表4〕

上 級 用 教 科 書	字 数
A Japanese Reader	800
Modern Japanese ; An Advanced Reader Vol. 1, 2	1,400
An Introduction to Newspaper	1,083

初級用と思われるテキストの漢字提出数は、極端に少ない51字のものを除いては、約300字から700字の間でかなりの幅があるが、初級18種類の教科書の平均は426字である。中級は約600字から900字とこれも幅があるが、異常に数の多い1,428字のものと、逆に数の少ない80字のものを除いた7種の平均提出字数は約680字である。上級用テキストについても同様に、上級終了までの総提出漢字数は、最低約1,000字から最高1,700字といったところで、教科書によってかなりの幅があるのが実状のようである。

さて、ちょっと観点を変えて、仮に1時間平均2字ずつ新しい漢字を教えるとしよう。これは学生にとって重荷になるような数であろうか。むしろ安易な作業のように見える。週の授業時数を平均20時間とすると、1週に40字覚えることになる。これを各学期（それは各級に相当すると考えられるが）の学習文字数にすると、

1 学期（初級） 40字×13週＝ 520字

2 学期（中級） 40字×18週＝ 720字

3 学期（上級） 40字×9 週＝ 360字

計 40週 1,600字

のように、年間学習字数は1,600字となる。しかし、私の経験では、年間1,600字という数は、教師・学生共に相当がんばらなければ達成できぬ数字

である。祝祭日や学校行事等で、年間授業週が正味40週に満たないのが普通だからである。更に、字数だけの問題ではなく、読みかえがあるから、学生にとっては倍以上の学習量に感じられるだろう。

しかしながら、上級終了を、

- (ア) 一般の図書、参考文献が読め、感想文や研究論文が書ける段階
- (イ) 辞書等を利用して独力で読み書きできる能力
- (ウ) 大学に進学して大きな障害もなく、日本人学生に交じって勉学ができる程度

と設定し、長くとも学習に1年ぐらしか費せないとした場合の漢字の級別配当数は、前記試算のように、初級450～550字、中級700～800字、上級300～400字、合計1,400～1,700字あたりを目標におかなければならないだろう。

戦後昭和30年ごろからの日本語教育を歴史的に見ると、大学の学部進学を目的とした留学生に対する教育では、漸次指導すべき漢字数が増大してきた傾向がある。一方では留学生の数が増え、一方では大学側の受け入れ態勢の整備充実に伴い、日本語能力の質的向上が求められ、留学生の社会にも試験地獄の波が押し寄せて、従来以上に日本語に関する知識や情報を増やさねばならなくなってきたということの表れでもあるであろう。

3.2.2.2. 字種について

初級段階で提出する約500字の範囲、すなわち字種をどう考えたらよいかということであるが、これも実態に即してみるのがよいかもしれない。初級用教科書のごく一部ではあるが、そこに採録提出されている漢字の中に占める義務教育漢字の割合は次のとおりである。

	教科書名	提出字数	教育漢字数	教育漢字の割合
A	日本語読本一（国際学友会）	300字	300字	100%
B	日本語Ⅰ（東京外語大附属）	350字	350字	100%

C	Japanese by the Total Method	501字 ⁽⁸⁾	475字 ⁽⁹⁾	94.8%
D	日本語初歩（国際交流基金）	380字	379字	99.7%

A, B, Dは、採録字選定の当初から、当用漢字表別表（義務教育漢字）の中から選ぶという方針をたてているので、教育漢字の割合が100%あるいは、それに近いというのは当然の結果であるが、A, B, Dと教科書作成者の異なるCでも、相当に教育漢字に対する配慮をうかがうことができる。

では、日本人子弟対象の国語教育のために設けられた義務教育漢字が、外国人留学生対象の日本語教育の場にどうかかわっているのだろうか。外国人留学生を対象とした4機関の入学試験問題における教育漢字の割合をみてみよう⁽¹⁰⁾。

〔表5〕

入学試験施行機関	延 べ 字 数			異 な り 漢 字 数		
	総字数	漢字数	漢 字 使用率	総 数	教 育 漢字数	教育漢字 の 割 合
昭和55年度 東京外国語大学特設日本語学科	3,130	778	24.85	244	209	85.65
昭和55年度 筑波大学外国人学生用試験	4,062	1,131	27.84	302	268	88.74
昭和49年度 早稲田大学外国人学生用試験	5,318	1,212	22.79	398	343	86.18
昭和55年度 私費留学生統一試験	5,834	1,556	26.67	362	324	89.50

〔表5〕で見られるとおり、異なり漢字数の中で教育漢字の占める割合は極めて高い数を示している。このことから、逆に教育漢字さえしっかり指導しておけば入学試験の8割がたは読解可能ということになるとも言えよう。したがって、初級提出漢字約500字の大部分は、教育漢字996字の中から選ぶのが順当だということになるであろう。

〔表5〕の試験問題は、いずれも外国人留学生対象のものであるから、教育漢字以外の漢字は避けようとする配慮があるのではないかとみられないこともないので、一般日本人対象の表記言語における場合もみておいたほうがよいだろう。

〔表6〕

	使用度数	使用順位	字 数	教育漢字	教育漢字の割合
雑誌九十種 ⁽¹¹⁾	52回以上	995位以内	997	905	90.77
新聞の漢字 ⁽¹²⁾	101回以上	—	1,175	903	76.85
週刊誌の漢字 ⁽¹³⁾	6回以上	933位以内	1,001	815	81.41

日本人の表記言語においても、〔表6〕のとおり使用順位上位約1,000字中に占める教育漢字の割合は約8割である。このことから、外国人対象のものであろうと一般日本人対象の文章であらうと、教育漢字が使われる割合は8割前後で、それだけ有用な漢字であることが分かる。なお、昭和55年度共通一次国語（古典・漢文を除く）の問題では、教育漢字の占める割合は73.52％となっている⁽¹⁴⁾。

以上の結果、外国人に対する日本語教育の初級段階での提出・指導漢字も、教育漢字を優先させなければならないということが分かるであろう。

3.2.2.3. 提出順について

漢字の提出順については、下記のような事項が当然配慮されるはずである。

- (a) 画数の少ない漢字から
- (b) 意味理解の容易な漢字から
- (c) 部首や造字成分となり得る漢字から
- (d) 必要性・使用度の高い漢字から
- (e) 造語性のある漢字から

もう一つ、漢字の提出に大きく関与するものに話題、場面、文脈といった要素がある。所在、存在の言い方を教える課は、どの教科書でも初めのほうに置かれるのが普通であるが、

○あそこにいぬがいます。

という例文で、「犬」という漢字を出すかどうかということがある。「犬」は小学1年の配当漢字であり、意味も字形もやさしいものである。しかし、だからといって、これを他の字に先がけて提出することには問題があるかもしれない。「犬」を出すなら、それ以前に「一」「人」「大」を与えておいたほうが、字形や筆順理解の上で都合がよいはずである。そう考えて、この課で「犬」の提出を見送ったために、そのテキストでは最後まで再び「犬」が登場する話題、場面、文脈がなく、結局「犬」という字を初級では出せなかったということもあり得るのである。この例は、造字成分の要素を強く意識した結果であるとも言えるが、一つの要素にとらわれすぎると、なかなか思うように出せなくなるものである。「男」は、ごく初期の段階から欲しい字であるが、まず「田」や「力」を出した上で「男」を提出するのが順当だなどと造字成分にこだわると、出す機会を失う結果にもなってしまう。

逆に、学習者が所属する機関名なども、その機関にとっては必要度の高い漢字ではあるが、そうかといって初級段階から書けることまでを要求するのは考えものであろう。見慣れさせるという効果を期待することもできるが、逆に漢字アレルギーを起こさせることにもなりかねない。ただ、読めるだけの理解漢字でいいのだといっても、漢字というものは書く作業を経なければなかなか定着しないものである。また、新出漢字を地名や人名の形で提出することも避けるべきであろうし、音しかない字（肉、服、礼、客など）は別として、音訓を共有しているものは、具体的な意味をも表す訓読み語の形から先に提出すべきであろう。結局、どんな漢字をどんな順に提出するかということは、各機関と対象学生、学習期間、目的等によって違いがあると同時に、話題や文脈によっても出しやすいものと出しにくいものといった規制があり、理想的にはゆかず妥協を強いられるものである。しかし、大筋は冒頭

に挙げたような条件を考慮しながら提出していくということになるのであろう。

3.2.2.4. 書き方指導上の留意点

(1) 字形について

漢字の字形については、日記、作文、手紙などでは見過ごされることがあっても、テストとなるとこだわることもある。例えば、「木」の縦画をはねるかはねないかというようなことである。「水」の第2画は、第1画の縦画と離れた位置から起こすから、第1画の縦棒は自然にはねる形になるのであるが、「木」の第3画は、横画と縦画の交差した点から起こすから、本来縦棒ははねる必然性がないはずである。しかしながら、字形からはそうであっても、筆写の際は筆の勢いということもあるので、仮に「木」と書いても認めてやってよく、誤りとして減点するのはいささか酷であろう。

「分」も字源的には「刀」で切って「分ける」ということから、第1画と第2画が離れているとされており、教師が板書する際にはそのとおり書くことが望ましいが、これも「分」と書いたところで他の類形字と誤読されたり、極めて奇異な形というわけでもなく、実際上の不都合は何もないわけである。

字形については、問題にしなければならない部分と、あまり厳密に考えなくともよい部分とがある。その辺を教師は心得て過度の負担を学生にかけぬようにしたい。我々の身近にありながらあまり目を通さぬ資料に、「常用漢字表(付)字体についての解説」があるが、教師はこれにもっと関心を払う必要があるのではないかと思う。ただ、誤解のないように言い添えるなら、教師自らが「木」でも「木」でもかまわないとわざわざ断る必要は全くないということである。特に非漢字系学生にとっては、全く白紙の状態で漢字学習を始めるのであるから、教える時はきちんとした形のものを与えたほうがいいわけで、たまたま試験の時「木」と書いたからといって、減点の対象に

はしないというだけのことである。

しかし、逆に細かい所でもきちんと書いてもらわねば困るという部分もある。一般に非漢字系学生は、「九」と「ハ」の区別がつけにくいらしく、どちらでも大差はないと考えているように思われる。「貝」を「見」とすることはまずないが、逆の誤りはよく犯す。

見→貝 先→失 売→決

注意すべき点は注意しなければならないが、許される部分、さして問題にしないでよい部分で口やかましく言って、漢字拒絶症を起こさせたりしないように気をつけたいものである⁽¹⁵⁾。

(2) 筆順について

非漢字系学生には、日本で一般に行われている筆順で指導するのがよいことは当然である。筆順が一定していれば、早く書いた時やくずした時でも、日本人のくずし方と同じ形になって誤読されることが少なくなる。しかし、漢字系学生で、自国流、自己流の筆順が既に身につけてしまっているような場合は、わざわざそれを改めさせる必要は少しもないだろう。そんなことに精力を消費させるより、他の語句の使い方でも覚えたほうがはるかに役に立つ。また、筆順は必ずしも一とおりしかないというものでもない⁽¹⁶⁾。

3.2.2.5. 漢字についての特徴的な情報の提供

漢字の中には、使い方や読み方などで特徴の見られるものがある。それぞれの新出漢字を指導する際に、そのような特徴的な情報を与えておくと、将来の漢字運用能力を高める上で役に立つだろうと考えられる。以下に幾つかの例を挙げる。

(1) 使い方に特徴のある漢字

(ア) 「毎」「翌」「最」

これらの字は、熟語を造る際、前接字、つまり前部構成要素（毎～）とはなっても、後接字・後部構成要素（～毎）となることはない。

毎日 毎朝 毎週 毎月 毎年
翌日 翌朝 翌週 翌月 翌年
最新 最古 最高 最愛 最終 最上

なお、「毎」は、

毎秒 毎分 毎時 毎時間 毎度

のように、「時」と「度数」に関する熟語を作るが、

毎曜 毎曜日 毎月曜日

など、外国人学生は作文によく書いてくるけれども、これらの例はない。また、「時」や「度数」に関するもの以外にも、学生はしばしば「每人・毎国・毎家庭」と書くことがあるので、そんな場合は「各人・各国・各家庭」となるなどの情報を「毎」を導入する時に与えておくといえよう。この他、「未」「既」「不」なども、いわば接頭字的にしか使われぬものである。

(イ) 「界」「然」

「毎・翌・最」とは逆に「界」とか「然」は、後接字・後部構成要素として使われる。

世界 限界 境界 臨界 学界 政界 人間界

自然 泰然 当然 必然 天然 默然

例外は、「界限」（「限」は表外字）「然諾」などであるが、これらの語は上級になっても提出されるかどうか分からぬほどであって、仮に現れたら、その時点で説明を加えればよいだろう。

(ウ) 「央」

「央」は単独での使い方はなく、熟語の場合も、「未央（みおう・びよう）」「震央」というのがあるにしても、外国人学生の耳目に接することはまずあるまいから、「中央」しかないと言い切ってよいかもしれない。

「福祉」 「紹介」 「犠牲」 「洗濯」 「秩序」 「更迭」

「模倣」 「妨害」 「脂肪」 「解剖」 「貿易」 「矛盾」

「猶予」 「戾入」

なども同様である。

(2) 読み方に特徴のある漢字

一つの漢字で、音訓を幾つも持っている多音訓字の読みについては、漢字系学生といえども頭を悩ませることは前にも触れたが、日本語教師なら、日本語の漢字の読み方について、学生から苦情を聞かされたり、読み方のルールがないかと訴えられたりした経験を、どなたもお持ちのことと思う。複数の音読みを持っている漢字の場合、どんな時にどちらの音で読むのかについて、何らかの示唆が与えられないものだろうか。明確な決め手はないまでも、学生がその読み方を類推する手がかりが与えられたらどんなによいかと思う。けれども、漢字の大部分についてはあきらめざるを得ないだろう。以下に、そんなことが言えそうないくらかの例を示す。

(ア) 「月」ガツとゲツ

「月令ガツリョウ（年中行事記録）」「月輪ガツリン→ガチリン（仏教用

語)」などは、外国人のみならず、一般日本人にも無縁の語であるし、また、固有名詞の「月山（ガッサン）」も例外として、「ガツ」と読むのは月の名称を言う場合に限られるようである。

○一月～十二月 正月 何月

それ以外は、「月～」「～月」いずれの型にかかわらず、また、month と moon の意味の違いにも関係なく、「ゲツ」と読むとしてよいだろう。

月収 月刊 月末 月光 月給 月報
今月 先月 来月 新月 満月

(イ) 「米」ベイとマイ

アメリカの意味で使われる場合は「米国・日米」いずれもベイと読む。しかし、本来の「こめ」の意味で使われる場合は、前部構成要素の「米～」は「ベイ」と読み、後部構成要素の「～米」は「マイ」と読む。

米価 米麦 米塩 米穀
白米 玄米 新米 精米所

(ウ) 「省」ショウとセイ

中級段階の提出字であるかもしれないが、「省」は、うまい具合に訓読みの意味に対応して、音の読み方が固定しているようである。「省く」の意味の場合は「ショウ」、「省みる」の意味の場合は「セイ」と読むと言ってさしつかえないだろう。ただし、「ショウ」には中央官庁を表す場合もある。

○ショウ 省力 省略 省エネ
○セイ 省察 三省 内省 反省

(エ) 「作」サクとサ

意味による読み分けであるだけに、外国人には難しい部類に属すだろう。

「作る」意味で使われている時は「サク」,「働き・仕事」の意味で使われている時は「サ」という読み分けがなされているようである。

○作家 作詩 作者 作品 作文

合作 傑作 新作 畑作

○作業 作用 操作 動作

「造作」の場合も、その意味により「ゾウサク」とも「ゾウサ」とも読み分けられている。

(㊦) 「一」イチとイツ

「万一」(マンイチ・マンイツ)を除いては、前部構成要素の場合は「イチ」,後部構成要素の場合は「イツ」と読み分けられているようである。

○一応 一概 一時 一難 一味 一命 一連

○画一 均一 專一 單一 統一 同一 不一

「一見,一心,一致,一般」のように、K, S, T, H音に続く場合は促音化することによって注意しておくとういだろう。

残念ながら、上述のような読みについての特徴的な事柄が言えるものはそんなに多くはない。一つの漢字に音読みが複数ある場合、深層的には呉音で読まれる熟語とか、漢音で読みならわされているものとかいうことはあるにしても、表層的には外国人から見れば読み方のルールはないに等しいであろう。1字1字については読みも意味も了知しているのに、その文中ではどう読んだらいいのか全く分からないというものがある。

○あの人は何人ですか。

○ここに学生が何人いますか。

初級段階での上のような文中における「何人」は、意味の違いからその読み方の違いを説明できるが、上級段階になると、日本人教師でも自信をもって読みを決められないような文例も出てくるだろう。

○一体それを何人がなし得てだろうか。

これだけの文では、「なんにん」「なにじん」「なんびと・なんびと」のい

ずれかを決定することはむずかしい。

読みについて、もう一つ厄介なことは、熟語になった時の音の変化である。

三百（さんびゃく）

六百（ろっ びゃく）

これらについては、「3.3. 中・上級段階」の「3.3.4.4. 複合語の音変化」の項でまとめて触れることにするが、漢字の読みの指導は教師にとっても頭痛の種である。

3.2.3. ローマ字・数字・符号など

3.2.3.1. ローマ字⁽¹⁷⁾

今日では、会話コースとか、短期速成コースなどを除いては、ローマ字表記を主体にしたテキストを使用する機会は、国内では少なくなっているようである。したがって、日本で行われているローマ字のつづり方を系統的に教えるという機会も減ってきたかもしれない。しかし、外国人学生が和英辞書を引いたり、一般のローマ字表示（Tōkyō, SONYなど）を理解したりできなければ困るということもあるので、仮名表記とローマ字表記の対応などについて適当な折に、例えば初級後期から中級前期の段階で辞書の引き方などを指導する機会があれば、紹介しておくことも必要であろう。

また、ローマ字で簡略に表示された語、

P., L. P., T. V., NHK

なども読めなければ困るし、第一、アルファベット26文字が日本式の呼称で読み書きできなければ、日本人学生との伝達にも不都合をきたすであろう。例えば「C」は、「セ」や「ツェ」ではなく、「シー」と読み、書けるようにしておくことである。

3.2.3.2. 数字

アラビア（算用）数字の読み書きができないことはまず考えられないが、ローマ数字の読み書きには慣れていない者もいるので、その読み書きに慣れさせる。

3.2.3.3. 符号

(1) 句読点

句点の使い方はほとんど問題はないが、読点の使い方については、意味的な打ち所が分かりにくいようである。そのために、中・上級になっても、読点なしの長文を書くことがあるので、読み手の便や誤読されることを避ける意味を持つ読点の使い方について、文章表現や作文の授業などで積極的に指導することが望ましい。また、中点「・」や片仮名語の中に使われるハイフン「-」の使い方も同様である。

句読点をます目のどの位置に打つかは、原稿用紙の書き方を指導する際に徹底しておきたい。句読点、拗音、促音にも一ます使うということが、初期の段階ではなかなか理解できないようだ。特に句読点に一ます分とるのは、紙の無駄使いとでもいう気がするのか、いつまでも文末の仮名と同じます内に打つ者がいる。また、漢字系学生は、自国語表記の習慣を改めず、縦書き（

。

）でも横書き（

。

）でも、ます目の中央にコンマやピリオドを打つ癖があるから注意しなければならない。

(2) 繰り返し符号

漢字仮名交じり文に使われる繰り返し符号には、次のようなものがある⁽¹⁸⁾。

- | | |
|-------------|----------------------|
| (a) 同の字点「々」 | 漢字 1 字の繰り返しを示す。 |
| (b) 〃点「〃」 | 縦書き、横書き共に前の語句の繰り返しを示 |

す。

- (c) 一つ点「ゝ」 仮名1字の繰り返しを示す。濁音は「ゞ」となる。
- (d) くの字点「くゝ」 2字の仮名の繰り返しを示す。(横書き文には使わない。)
- (e) 二の字点「々」 原則として使わない。

このうち、初級段階で積極的に読み書きを指導するのは(a)ぐらいであろう。(b)は論文や実験報告を書く場合に必要だし、書式の中にも現れることがあるので、中・上級あたりで紹介しておけばよいだろう。その他は上級あたりで読めることを指導し、積極的に書かせたり使わせたりはしなくてもよい。

(3) その他の符号

教場作業などでも、

- (1) (かっこいち)
- ② (まるに)

などによく使われる符号の呼び方にも慣れさせる。

「かぎかっこ」

(まるがっこ)

[かくなっこ]

といった区別までは教えなくともよいだろうが、これらのものが「括弧」と呼ばれることは知らせておきたい。括弧も原稿用紙一ます分を使うが、特に「かぎかっこ」の場合は、その向きに注意させる必要がある。

- これを「ざっし」という。
- リネヤ「れり」にふへ。

学生はよく上のような書き方をし、しかも何回注意しても意外と直さないものである。括弧を意味的にも位置的にも正しく使えるように指導しておきたい。

「プラス・たす」「マイナス・ひく」「かける」「わる」「イコール」などと聞いて、どんな符号かを理解し、また、その符号を見て言えるようにしておきたい。

3.2.4. 縦書きと横書き、ルビについて

3.2.4.1. 縦書きと横書き

最近の初級用日本語テキストは、ほとんどといってよいほど横書きであり、板書・テストなどの教場作業も横書きで行われているのが普通である。これは日本語の一般的な文章表記そのものが、横書きが多くなってきたことにもよるが、一方縦書きの文章も新聞、雑誌、文芸図書、手紙、各種掲示などにもまだ根強く残っている。したがって、外国人学生の場合にも、初級段階から縦書き文の読み書きに慣れさせておく必要があるだろう。

縦書きで書かせる際気を付けることは、下例のように一つの漢字を左右に分割して縦に並べて書く者が、非漢字系学生の中によくみられるということである。

○ 長くはなれぬるるに長きと一か？とぬれぬ。

横書きだから「私」「好き」「戸棚」と書くのであって、縦書きなら当然「長く」「はなれぬ」「に長き」になるはずだと瞬間的に勘違いしてしまうようである。縦でも横でも漢字の構成は変わらないのだという念押しを、縦書き文の読み書き指導の際にしておかなければならないだろう。

また、縦書きの時は、句読点や括弧などを書き込む位置が変わること、ルビは漢字の右側に付けること、補足などの書き込みも右側の行間にすること

などをも併せて注意しておきたい。

3.2.4.2. ルビについて

初級教科書の本文や練習部分では、漢字にルビ（読み仮名）を付けないほうがよい。ルビに頼って漢字の定着がなおざりになることと、ルビがあるためのわずらわしさなどのためである。また、ルビを付けなければならぬような漢字を、初級段階から提出することにも疑問がある。ただし、課末や欄外にまとめた新出漢字や読み替え漢字には、学習の便のためにルビを振っておかなければならないだろう。ルビの振り方は、縦書きの場合は漢字の右側に添えるのが一般的であるが、横書きの場合には上下両様行われているようである。日本語のテキスト類でも、下側に添えるものがだんだん目立つようになってきた⁽¹⁹⁾。

なお、漢字の書き取りを行う際、漢字と共にその読みを定着させる目的から、読み仮名も併せて書かせる作業を励行すべきであろう。学生は非常にめんどろがるが、習慣づけることが望ましい。漢字系学習者は短文聴写の際、漢字で書いてもいいかと必ずたずねる。もちろん、学生が知っていればほとんど書かせていいわけだが、同時に読み仮名も添えるように指示すると一様にげんなりした顔をする。漢字と仮名の二本立てで書くのは、いわば二重手間で負担に感ずるのだろうが、それがいやなら、むしろ仮名で書くように指導することが初歩の段階では大切ではないだろうか。漢字そのものについてはほとんど問題のない漢字系学生には、漢字語彙の読み方に、より多くの注意を払わせることが肝要である。

3.3. 中・上級段階

初級を終えて中級に進んできた学生は、

- (a) 仮名の読み書きに習熟した者

- (b) 「現代仮名遣い」や「送り仮名の付け方」を理解して、基本的な語の読み書きができる者
- (c) 簡単な連濁現象を理解して、読み書きできる者
- (d) 基本的な漢字約 500 字を、単語または熟語として読み書きできる者
- (e) 基本的な漢字の画数を、筆順に従って数えられる者

と考えてよいだろう。そういった学生たちの文字運用能力を更に伸ばし、未知の漢字やその熟語に出会った時に、その読み方や意味を類推できる能力を養い、ゆくゆくは日本語の読み書きについて自学自習を可能にさせる課程が中級であり上級であるとするなら、それぞれの段階でどう指導していったらよいだろうか。中級から上級にかけては、漢字熟語が洪水のように提出される。それら新出語の読み方にしても意味理解においても、辞書を引かずにある程度の見当がつけられるような指導が、この中・上級段階における文字表記指導の主眼であろうと思う。

なお、既に初級段階の記述の中でも、事柄によっては中・上級にまたがって触れたこともあったが、中・上級段階では一層両者の境界を区切ることが困難になってくる。したがって、両者を合わせて述べたほうが重複も避けられ、まとまりもよくなるかと思うので、中・上級を合わせ考えることにする。

この段階での漢字についての知識としては、

- (a) 六書についての知識
- (b) 部首についての知識
- (c) 漢字熟語の構成についての知識
- (d) 漢字熟語の読み方についての知識

などが挙げられるだろう。ここでは、主としてそれらを指導する際の留意点は何かといった立場から触れてゆくことにする。

3.3.1. 六書——形声文字の重要性

「六書」^{りくしよ}とは、後漢の許慎が98 A. D.に中国最古の字書「説文解字」15巻を著し、9,353字を六分類してその構成を説明したものであるという。

六書の中で、象形、指事、会意、形声の4種は、漢字の成り立ち、造字法に関するものであり、^{かしや}転注、仮借の二つは、既成の漢字の使い方、運用面に関するものである。

日、月、山、川、口、目、心、手、足、女、火、水、木、犬、牛、羊、
馬、魚、鳥

などの象形文字、

上、中、下、本、末

などの指事文字、

明、林、信、男、見、鳴

などの会意文字は、字源説明が具体的にでき、それだけに納得も得られやすいので、非漢字系学生の興味を起こさせるには都合のよいものであるが、この3種に属すると思われる漢字はそれほど多くはない。更に、教師自身もどれがどの種類に属するのかをそれほど明確に把握しているわけではないので、あまり「〇〇文字」ということにこだわりすぎて、一つ一つの字源を説明したり、分類を試みたりしないほうがよいだろう。学生にあまり強い印象を与えると、新出字が提出されるたびに字源説明を求められ、行き詰まってしまうことになるから、ほどほどにしておくのが安全だろう。それよりも、漢字はただの線や点の組み合わせではなく、漢字の成り立ち、造り方、使い方にはそれなりの意味や理由があるのであって、それだけに一点一画をおろそかにしてはいけないのだということを認識させるために、六書についての知識を与えたり利用したりすることのほうに、その意義を見いだしたいと思う。

ところで、漢字は全部中国起源、朝鮮半島経由で日本に伝来したとは限らない。日本で造られ、中には「働」のように中国へ逆輸出されたといわれるものもある。このような国産の字を「和製漢字」「国字」「倭字」「和字」な

どと呼んでいる。国字は下例のように、会意文字の造り方でできており、かつては外来語にまで国字が造られたほどであった。なお、国字は中国起源ではないから音読みはなく、訓読みだけなのが普通である。下の（ ）内は表外字。

(例) 畑 峠 込 杵 (辻 ^{つじ} 風 ^{こがらし} 風 ^{なぎ} 笹 ^{ささ} 杣 ^{そま} 杵 ^{わく} 枋 ^{とう} 柱 ^{まき} 梅 ^{つが・うめ} 榎 ^{かし}
^{さかき} 榊 ^{しぎ} 鳴 ^{いわし} 鯛 ^{たら} 鰯 ^{おもかげ} 倭 ^{しつけ} 麩 ^{まろ} 麿 ^{むしる} 笔
^{ミリメートル} 耗 ^{センチメートル} 糲 ^{キロメートル} 糲 ^{キログラム} 貶)

そのほか形声文字の造り方を応用したものもあり、この種の漢字は「働」のように音訓併せ持つものと、字音だけで字訓のないものがある。

(例) 働 搾 (^{はたけ・ハク} 畠)
 錠 (^{ビョウ} 鋌 ^{セン} 腺 ^{アン} 鮫 ^{コウ} 鱈)

我々日本人は、子供のころから会意文字や形声文字の造字法を無意識のうちに利用して、新しい漢字を造って遊んだりした経験を持っているが、このようなクイズを外国人学生にもやらせてみたらどうだろうか。漢字が、どんな意味の漢字の組み合わせで成り立っているのか、音訓はどのようにして与えられるのかの理解に案外役立つかもしれない。

ここで、私たちはこの形声文字にもっと注目すべきではないかと思う。会意文字は既成の二つの漢字の意味を合わせて造られたものであるが、形声文字は意味を表す意符の部分と、読みを示す音符の部分との組み合わせによる造字法である。この形声文字は、漢字の大部分を占めている。「説文解字」では五分の四、「康熙字典」では48,641字中の十分の九、宋代の鄭樵の調べでは24,235字中21,180字、約87%が形声文字だということである。ただ、常用漢字1,945字の中における形声文字の割合はやや下がるものと思われるが、それにしてもかなりの分量を占めているはずで、いわば造字法の主流を

なすものと言えよう。したがって、未知の漢字や熟語に遭遇しても、その音読みを推し量り、ある程度意味の見当もつけられるという類推力の育成に、大変有効なのがこの形声文字の概念であると思う。形声文字を説明するのに適当な漢字が提出される都度、繰り返し触れておきたいものである。

「青い」は初級段階の提出字（語）であろうが、「セイ」という字音が現れるのは中級あたりであろう。「青年」とか「青春」とかいう熟語で「青」に「セイ」という音のあることを紹介したところで、もし「青」の字が漢字の一部分になっている未習字に出会ったら、まず「セイ」と読み、漢字辞典の音訓索引で「セイ」の漢字が並んでいる中から当該字を探すように指示する。「青」1字を知ったおかげで「青」を造字成分に持つ他の複数の漢字も手の届く範囲に入ってくることになる。「青」には「青い色」のほかに、「若い、澄みきる、きれいだ、きれいにする」という意味のあることも添えておけば、「清、晴」は何が澄みきってきれいなのか、「精米、精油」は何をどうするのかの意味の見当をつけることも可能になってくる。以下に形声文字の例を少し挙げる。最初の字は、その仲間では最も早い時期に提出されるだろうと思われるものである。

(例) 泳・永 詠
花・化 貨 靴
刊・干 汗 肝 幹
館・官 管 棺
覷・勸 歛
形・刑 型
組・祖 粗 租 阻
何・可 河 荷 歌

(「可」「何」「河」の「可」の部分は、字源的には異なるようで、意味的な類推は無理かもしれない。しかし、字音は同じであるから、読みの手がかりにする分には差し支えないだろう。)

日本語の漢字の音には、呉音、漢音、唐（宋）音があって、一つの漢字でも複数の字音を持つものがある。したがって、音の類推が可能だとは言っても一律にはゆかず、限界のある恨みはある。それにしても、前述のような情報を与えておくことによって、学習者の漢字読解力を飛躍的に増大させることが期待されるわけである。次に複数の字音を持つ形声文字の例を少し挙げる。

（例）寺…詩：時 持 侍：待：等
各…格 客 閣：落 絡：略：路 露
同…筒：洞 胴 銅
暮…模 墓 募 慕：漠 幕
青…晴 清 精 請 静：情

「青、晴、清、精、請、静」も「セイ」という字音だけではないが、「セイ」という音は共通して持っている。また、「情」は「セイ」の音もあるにはあるが、漢字辞典類では「ジョウ」の所に並べられている。

転注文字と仮借文字は、既に造られた漢字の意味を転用したり、字音だけを借りて書き表したもので、造字法ではなく漢字の使用法とも言うべきものである。「音楽」を聞くことは「たのしい」ことから「楽しい、^{らく}楽」の語にも使われるようになり、「人に背く」意の「北」が「南」に背く方角を指す「きた」の語にも使われるようになったと言われる類のものが転注文字である。仮借文字というのは、1945年ごろまで外国の地名を漢字書きにした「^{パリ}巴里」「^{インド}印度」の類で、現在でも「寿司、珈琲、天婦羅、下駄」など、市中でよく見かけられるところである。これらは音借の例であるが、「煙草、海苔、麦酒」のような意借の例もあり、古くは万葉集にまでさかのぼれるという。（「蜂音」と書いて「ブ」と読ませるものなど。）

この仮借文字の使い方には非漢字系学生も興味を刺戟されるらしく、自分の名前を好字で書いてくれと言ったり、それで印鑑を作ったりする者もいる。

中には、自分でわざわざ悪字を選んで、「腐乱死酢 混乱」(Francis Conlan)と書いたりする人を食った者もいるが、これを非難する前に、そこまで漢字の知識を身につけたことを認めてやりたいと思う。

3.3.2. 部首についての知識

部首を知することは漢字の構成を理解する上で有効であり、漢字辞典で検索する上でも便利である。また、我々の日常生活においても、

「菊池さんの「チ」は、土へんではなくさんずいのほうですよ。」

などと、口頭で同音字、類形字を確認し合う場合にも楽であり、部首を知っていれば日本人との情報伝達も抵抗なく速やかに行われることが期待される。

部首は7種に大別されるが、そのそれぞれについて、外国人学生にも知っておいてもらいたいと思われる部首名を挙げてみる。

へん
偏



- ① 独立した漢字全体が偏となって、他の漢字の造字成分となるもの。

「言（ごんべん）」以外は、その漢字の字訓が偏の名称として使われており、特にむずかしいものではない。

日 土 女 山 弓 日 月 木 火 金
馬 魚 言

- ② 部首になった時、大いに変形するもので、結局部首にしか使われないものもある。「彳（にすい）」とか「亻（さんずい）」とかは「～偏」とは言わないが、「さんずい」は偏としてしか使われることがないし、「に

すい」も「冬」「寒」などのほかは偏としての使い方であるから、ここで扱うのがよいだろう。

にすい さんずい にんべん ぎょう・にんべん りっしんべん てへん しめすへん のぎへん こうもへん こざとへん
 彳 彳 亻 亻 冫 扌 扌 禾 禾 冫 冫

ほう
 旁
 つくり



「冫(ふしづくり)」「冫(おのづくり)」とか、「冫(りっとう)」「冫(るまた)」「冫(おおがい)」とかの名称は、覚えることを強要しなくてもよいだろう。なお、「冫」は、旁では部首名が「おおざと」となる。

かん
 冠
 かむり



「𠂔(くさかんむり)」「𠂔(たけかんむり)」「𠂔(うかんむり)」「𠂔(わかんむり)」ぐらいは知っておいたほうがよいだろう。

きゃく
 脚
 あし



ひとあし したごころ れんが・れっか さら こがい さと
 儿 心 𠂔 𠂔 貝 里

などがあるが、特に部首名を覚えさせるまでもないだろう。「れっか・れんが」は、教場では「四つ点」で通っているようで、それで十分であろう。外国人学生には、「貝」の下二つ点と「ひとあし」の区別がつきにくいらしく、「テレビを貝ました。」と書くことがよくあるので、むしろ字形に注意させたほうがよいだろう。

すい
垂
たれ



がんだれ
尸

まだれ
尸

やまいだれ
尸

しかばね
尸

などの個々の部首名より、この形のものが「たれ」という部首で辞典検索の際のよりどころになるのだという認識のほうが大切だろう。なお、部首となるものの画数も確認しておく、検索の際楽である。特に次項の「繞」の画数は数えにくいものである。

によう
繞



しんによう
に

えんによう
に

そうによう
走

繞は少ないから、みんな覚えてもそれほど負担にはならないだろうが、少なくとも「しんによう」ぐらいは覚えておくと楽だろう。なお、「しんによう」も「えんによう」も3画である。

こう
構
かまえ



どうがまえ
門



もんがまえ
門



ぎょうがまえ
𠂔



はこがまえ
𠂔

ほこがまえ
戈

くにがまえ
口

このうち、部首名として覚えさせておきたいのは「もんがまえ」と「くにがまえ」ぐらいであろうか。

「𠂔 (はこがまえ)」と「𠂔 (かくしがまえ)」はなかなか区別がつけにくく、辞典によっても出入りがあるようだ。例えば、「医」は、辞典A⁽²⁰⁾

では「はこがまえ」に分類されているが、辞典B, C, D, Eでは「かくしがまえ」に属している。また「巨」は、辞典A, Bでは「はこがまえ」だが、辞典C, Eでは「工(たくみ)」, 辞典Dでは「二(に)」の部というぐあいである。また、「臣」はそれ自体が一つの部首となっている。

部首についての知識を与えるということは、漢字に対する理解を深めることであり、それは日本語教育機関を離れた学生たちが、その後自学自習の能力を拡充させ、漢字辞典で未習字の検索もできるようにさせるということである。しかしながら、一とおり部首に関する知識を持ったにしても、漢字によってはどの部分が部首であるのかの見当をつけるのが、前述のようにむずかしいものもいろいろある。

- 「老」「考」「者」の部首は「耂(おいがしら)」であるのに、「孝」は「子」の部で引く。
- 「学」は「讠」「𠂔」「子」のいずれであろうか。辞典によって異なるからまぎらわしい。
- 「鼻」は「自」でも「田」でも「升(にじゅうあし)」でもなく、「鼻」それ自体が部首となっている。

こんなぐあいであるから、部首による検索が外国人学生にとっていかに大仕事であるかが納得できよう。

そこで、外国人用に漢字の第1画を手がかりとして検索できるように配慮された「外国人のための漢字辞典」⁽²¹⁾ が作られたわけであるが、今後再び外国人用の辞典を作るとするなら、漢字のどの造字成分からでも検索可能なものと考えたらどうだろうか。「鼻」はそれ自体が部首であることをやめ、三つの造字成分のどれからでも検索できるようにし、「者」は「土」「耂」「日」のいずれからでも求められるような辞典にしてはどうだろうか。漢字辞典で調べようというような学生は、造字成分になるような基本的な漢字は学習した者と思われるから、大抵の字は引けるはずで、そうすればずいぶん楽にな

ることと思う。

3.3.3. 漢字熟語の構成について⁽²²⁾

熟語の意味を正しく理解するには、それぞれの漢字の意味を知るだけでなく、両者の漢字の結合関係を承知することが大切である。この熟語の構成の型を理解することは、新出熟語、未知の熟語でもある程度意味の見当をつけることができ、文章読解力の向上に寄与するものと思われる。以下に熟語の構成の型と、その留意点について述べる。

3.3.3.1. 2字熟語について

2字熟語の型を分類すると次のようになるであろう。

(1) 並列関係

並列関係というのは、前後二つの漢字が何らかの意味で並列されているもので、これには四つの型が見られる。

(ア) 同一字型

同じ漢字を重ねたもので、「同の字点」(漢字の繰り返し符号)「々」を用いてもかまわない。

○ 日日 月月 年年 代代 内内 方方 刻刻 続続 満満 堂堂
転転 高高 赤赤

しかし、「朝々、週々、季々、狭々、茶々」といったものはない。造語の限界がどの辺にあるのかの見当がつきそうである。

(イ) 同意字型

漢字は異なるが、同じ意味の漢字を重ねたもの。

○ 道路 絵画 児童 河川 家屋 岩石 身体

これらは名詞で用いられる漢字の組み合わせで、その熟語も名詞として使われる。

○ 生産 使用 発展 建築 援助 帰還 拒絶 起立 収集 接続
切断 映写 闘争

これらは動詞語を重ねたもので、その熟語もスル動詞となる。

○ 安易な 温暖な 完全な 急速な 巨大な 清潔な 優秀な
暗黒の 永遠の 恐怖の 同等の

これらは形容詞や形容動詞を重ねたもので、その熟語も主に形容動詞的に使われる。

(ウ) 同類字型

同類の事物や行為などを表す漢字を重ねたもの。

○ 草木 耳目 手足 木石 妻子 子女 金銀 車馬 鳥獸 港湾
風雨
○ 飲食 見聞 取得
○ 軽薄な 長大な 微細な

名詞語、動詞語、形容詞あるいは形容動詞の組み合わせで、構成された熟語の使い方は、前 (イ) 同意字型に準ずる。

(エ) 反意字型

意味の対立する漢字を重ねたもの。

- 上下_{スル} 前後_{スル} 左右_{スル} 天地 公私 父母 晴雨 内外 自他
縦横 海陸 山川 山河 古今

「上下，前後，左右」の3語はスル動詞としての使い方もある。

- 売買_{スル} 発着_{スル} 出欠 往復_{スル} 加減_{スル} 攻防_{スル} 取捨_{スル}
乗降_{スル} 問答_{スル} 進退 生死 勝敗 受授（授受）_{スル}

「出欠，進退，生死，勝敗」などは，主に名詞として使われる。

- 長短 軽重 高低 遠近 強弱 黒白 深淺

形容詞を重ねたものだが，その熟語は名詞としての使われ方をする。

(2) 修飾関係

修飾関係というのは，前後二つの漢字が互いに何らかの形で修飾し合う関係にあるもので，三つに分類され，更に幾つかの型に下位分類されるものもある。

(ア) 名詞を修飾するもの

A 校歌型（名詞ノ名詞）

- 校歌 国旗 鉦山 山頂 火災 学食 雨天 水底

B 美人型（形容詞＋名詞）あるいは，それに準ずるもの。

○ 美人 高山 近所 大陸 清流 善行 特技

C 読本型（動詞＋名詞）

○ 読本 産物 造花 曲線 定価 異国 愛児 作品

D 読書型（動詞＋名詞ヲ）

○ 読書スル 作文スル 殺人スル 休校スル 消火スル 洗面スル 延期スル
閉会スル 加熱スル 決心スル 始業スル 出題スル 造船スル 改選スル
ヲ格をとり、スル動詞となる。

E 乗车型（動詞＋名詞ニ）

○ 乗車スル 着席スル 登山スル 就職スル 入港スル 帰宅スル
ニ格をとり、スル動詞となる。

(イ) 動詞を修飾するもの

A 外出型（目的語・補語＋動詞）

○ 外出スル 倍增スル 下降スル 上昇スル

B 急行型（連用修飾語＋動詞）

○ 急行スル 安眠スル 深謝スル 独習スル 美化スル 快走スル 逆流スル
自作スル 実感スル 予告スル 清掃スル

(ウ) 形容詞を修飾するもの

最高型

- 最高，最新，特大，微小，厳寒，格安

(3) 主述関係（名詞が動詞）

前接字が主語で，後接字が述語の役を果たしている関係にあるものは名詞として使われ，逆に前接字が述語で後接字が主語の場合はスル動詞として使われる。

- 地震 人造 雷鳴 国交
開花スル 出水スル 着火スル

(4) 接辞関係

(ア) 接頭辞型

「有，無，未，既，不，否，非」などの接頭辞的な使われ方の漢字が前接字となるもの。

- 有益 有名 有効 有力 有人 有害
- 無益 無名 無効 無力 無人 無害 無学
- 未婚 未定 未刊 未知 未決 未満
- 既婚 既定 既刊 既知 既決 既成
- 不正 不足 不実 不純 不信 不満
- 否定 否決 否認
- 非行 非常 非道 非番

(イ) 接尾辞型

「化，的，然」などの接尾辞的な使われ方をする漢字が後接字となるもの。

の。

- 美化 緑化 電化
- 美的 知的 人的 法的
- 天然 自然 紳士然 默然

以上が、2字熟語の構成の分類であるが、次に留意点を挙げる。

留意点1 「読本」型と「読書」型の意味類推のむずかしさ

(2) 修飾関係 (ア) C読本型と、D読書型とは、どちらも「動詞＋名詞」という並べ方である。

- C 読本 作品 作家 愛児 愛妻 造花
- D 読書 作文 作曲 (愛妻家) 造船

けれども、前者は前接字の動詞が後接字の名詞を直接修飾するのに対し、後者は前接字の動詞が後接字の名詞を目的語としているというように、係りぐあいが異なっている。しかも、前接字が共通の漢字である時は、どちらの型に属するか類推がつきにくく、外国人が未知の熟語の型や意味を判断することは極めて困難であると思われる。また、「愛妻」などのように「愛妻家」となると、D読書型の意味に変わってしまうというまぎらわしいものもある。

留意点2 新造語の可能性

「盗賊」(盗みを働く悪いやつ)は、「読本」型の熟語であり、「山賊」は「校歌」型の熟語であり、いずれも後接字の名詞を修飾しているものである。これらの型を活用して、「馬賊」や「海賊」の意味を推し量ることは、外国人学生であっても決してむずかしいことではあるまい。更に、この型を

利用してハイジャックを漢字熟語で表すとしたら、「空賊」という語が出てくるはずである。外国語をやたらに漢字になおす時代であったら、「空賊」はとうに辞書に載るべき語になっていたであろう。このように熟語の型を利用して新造語を産み出すこともできるわけで、我々の周囲には、そのようにして造られた語がいろいろと見られる。

○ 献金→献血 録音→録画 天災→人災 黑板→白板
激震→激写

留意点3 型の利用の限界

前記(2)修飾関係には、ヲ格をとるD「読書」型と、ニ格をとるE「乗車」型とがある。

○ 着衣 着帽 着靴

などは読書型で、「～を(身に)着ける」意であるが、

○ 着席 着座 着地 着陸 着水 着岸 着陣

などは乗車型で、「～に着く」と解される。更に、一見「着衣」と同じ意味の語と見られる「着服」にしても、「服を(身に)着ける」という意味のほかに、「(金を)服に着ける」という意味もあり、むしろ後者の意味で使われることのほうが多いくらいだから、外国人学生を悩ませるものの一つになるであろう。

また、「着地」とか「着岸」の型を利用して、

○ 着校 着家 着国

などの熟語が造れるかということ、これも無理である。和語的言い回しでは、「岸に着く」「家に着く」と同じであっても、前者の「着く」には「密着」の要素があり、後者のそれは「到着」の意味であって、後者の場合は熟語が造りにくいということがあるのかもしれない。

熟語の型を理解することは、漢字語彙に習熟する上で極めて役に立つと考えられるにもかかわらず、熟語の型を利用した意味の類推や新造語にはおのずから限界があるということも承知しておいたほうがいいだろう。

3.3.3.2. 3字熟語について

3字以上の熟語も基本的には2字熟語との組み合わせになるのであるが、3字熟語については大きく三つの場合が考えられる。

(1) 同類字の並列

○ 上中下 大中小 松竹梅 市町村 天地人 形音義 智仁勇

(2) 既成の2字熟語の前か後ろに1字添えるもの

○ 大会社 全世界 新学期 広範囲 小荷物 不満足 未加入
無記名

○ 同窓会 運動場 外国人 大学院 記念品 想像力 救急車
自尊心 調査中 任意性 運転手 動物的

(3) 略された結果、3字熟語になったもの。いわゆる略語。

○ 輸出・輸入→輸出入
視覚・聴覚→視聴覚

○ 臨時教育審議会→臨教審

略語は2字熟語にもある。

- 民間放送→民放
- 航空母艦→空母

けれども、外国人が略語から本来の語形を類推することは極めてむずかし
く、固有名称に至っては不可能に近い。したがって、未知の語に出合った時
の対応策として、熟語の型を理解させようとする際は、略語まで取り込まな
くてよいだろう。3字熟語の留意点は、次のようなものであろうか。

留意点1 基語はどの部分か

3字熟語の型は、「○+○+○」「○+○○」「○○+○」のいずれかであ
るが、そのどの型に属するかの見極めを誤らないように注意させたい。

- 雪月花 衣食住
- 一部分 非常識 外気温
- 外国語 非常口

留意点2 3字熟語だから成立する語

「新開」とか「開地」とかの2字熟語は普通使われないが、「新開地」は
3字熟語を構成する。「皆既食」も同様。

3.3.3.3. 4字熟語について

- (1) 「○+○+○+○」型
- 同類の字を並列したもの。

- 春夏秋冬 東西南北

(2) 「〇〇+〇〇」型

既成の2字熟語を組み合わせたもので、それぞれの2字熟語が単独で使われることもあるし、また、4字熟語の中だからこそ生きているというような場合もある。

- 国立+劇場 有害+無益 十年+一日 青天+白日 主客+転倒
- 大器+晩成 完全+無欠 大同+小異
- 一長+一短 四分+五裂 右往+左往 鯨飲+馬食 半死+半生
- 異口+同音 起死+回生 空前+絶後 自画+自賛 山紫+水明
- 天変+地異

(3) 「〇+〇〇+〇」型

既成の2字熟語の前後に1字ずつ添えたもの

- 新+卒業+生 旧+商店+街

留意点

3字熟語の留意点1でも触れたが、4字熟語の場合も核がどの部分で、それに他の字がどんな結び付きをしているのかといった見極めが早くつくようにしたい。中・上級にかけて、語例が提出される都度、学生の注意を喚起することが必要だろう。熟語の字数が増えて構成が複雑になればなるほど、注意してやらねばならないだろう。

3.3.3.4. 5字以上の熟語について

基本的には既成の2字熟語の組み合わせ、あるいはそれに1字加わったものとみることができる。また、3字熟語と2字熟語あるいは3字熟語の結合という場合も考えられる。

○ 水力＋発電＋所 原子力＋発電所 原子力＋船＋乗組員

熟語に熟語を結合していけば長くなるわけで、固有名称ではかなり長いものもある。

○ 外国人＋留学生＋問題＋調査＋研究＋連絡＋協議会

更に続けようと思えば、「開催＋準備＋小委員会＋会場＋案内図」などと言えよう。しかし、どんなに字数の多い熟語でも、核になるのは2字熟語かと思われるし、また、2字熟語の出現率も最も高いようであるから、まず、2字熟語の構成を把握させることが大切であろう。

3.3.4. 漢字熟語の読みについての情報

3.3.4.1. 常用漢字の音訓について

日本語の漢字の読み方におけるわずらわしさについては、漢字系学生さえも悲鳴をあげているということは、既に冒頭にも触れたとおりである。1.1.2.でふれたとおり常用漢字1,945字には、大雑把なところでは漢字1字当たり二つの音訓があることになる。1字1音訓ならそれほどの負担ではないように思われるが、これらが熟語の中では種々の音変化を起こすから厄介なのである。このことについては後述する。

初級段階の漢字の提出については、どのテキストでも極めて慎重に検討されるのが普通であるが、一方音訓をどの範囲まで幾つぐらい提出するかということについては、あまり問題にされないようである。これは、初級用の語彙の制約から、自然に音訓も限られてしまうということによるのだろう。したがって、「しずかだ」という語が初級相当語であるとしても、漢字の「静」を提出するかどうかの検討のほうにどうしても重点が置かれることになるのである。

常用漢字表本表の1字下げ扱いになっている特殊音訓の大部分は、外国人学習者の日常生活にはあまりかかわりのないと思われるものである。通常の1年程度の学習期間中に必要と思われるものはそう多くはないが、中には次のようなごく初歩の段階から有用なものもある。

○ 雨^{あま} 上^{うわ} 風^{かぜ} 兄^{キョウ} 弟^{ダイ} 七^{なの} 何^{なん} 六^{むい} 八^{よう}

なお、中・上級段階で必要と思われる特殊音訓には、次のようなものが考えられるだろう。

(主に中級段階)

○ 天^{あま} 金^{かな} 彼^{かの} 木^こ 財^{サイ} 酒^{さか} 早^{サツ} 除^ジ 度^{タク} 読^{トウ} 納^{ナツ} 夫^{フウ} 目^ま 胸^{むな}

(主に上級段階)

○ 稻^{いな} 街^{カイ} 石^{コク} 声^{こわ} 切^{サイ} 白^{しら} 守^ス 緒^{チヨ} 苗^{なわ} 若^{ニヤク} 暴^{バク} 舟^{みな} 船^{ふな} 拍^{ヒョウ} 坊^{ボツ}

3.3.4.2. 「付表」の語の扱いについて

常用漢字表の「付表」に掲げられている116語は、1字1字の本来の字訓を離れて、意味に当てはめた読み方をするもので、いわゆる「熟字訓」と言われているものである。初級段階で出せるもの、中・上級段階相当のものは、それぞれ次のような語であろうか。

(初級相当語 約20語)

○ 明^あ日^す お母さん お父さん 大人^{きものう} 昨日 今日 今朝 今年^{しやうず} 上手
一^つ日^{いたち} 時計 友達 兄さん 姉さん 二十^は・二十^ち歳 二十日 一人

二人 二日 下手

(中級相当語 約30語)

- 意気地 田舎 笑顔 叔父(伯父) 乙女 叔母(伯母) お巡り
さん 風邪 仮名 果物 景色 差し支える 芝生 清水 三味線
七夕 梅雨 凸凹 手伝う 博士 部屋 真っ赤 真っ青 土産
息子 眼鏡 木綿 八百屋 浴衣 若人

(上級相当語 約23語)

- 浮気 浮つく 蚊帳 為替 河原(川原) 玄人 心地 五月晴れ
五月雨 白髪^{しらが} 素人 師走 相撲 十重二十重 仲人 名残 雪崩
吹雪 迷子 紅葉 最寄り 大和 行方

上の各級相当語の仕分けはおおよその見当で、必ずしも厳密なものではない。残りの約37語は、たまたま教材に提出されるようであれば教えるとしても、積極的に取り上げなくてもよいと思われるものである。

3.3.4.3. 熟語の基本的な読み方

改めて断るまでもないが、漢字には音訓があるので、2字熟語の読み方の組み合わせは4とおりあることになる。

(1) 前後とも音読みするもの(字音語)

- 両親 学習 白球 病院

(2) 前後とも訓読みするもの（字訓語）

- 書留 場合 建物

(3) 「音＋訓」の順で読むもの（重箱読み）

- 本屋 毎朝 王様 役場 客間 試合

(4) 「訓＋音」の順で読むもの（湯桶読み）

- 見本 雨具 夕刊 荷物 身分 場所 店番 消印 石段 関所
前金

以上は、2字熟語の前後の漢字を音訓いずれで読むかということである。
これとは別に、漢字の配置や文脈によって、読み方が自ら定まっている場合
や、音読み訓読みのどちらでも読めるというものもある。

(5) 前後の漢字の配置が逆になることにより、音読みになったり訓読みに
なったりするもの

- 雨風 右左 海山 月日
風雨 左右 山海 日月

(6) いずれの読み方も可能なもの

- | | | | | | |
|------|----|------|------|------|----|
| うえ | した | ちちはは | やまみち | としつき | かみ |
| 上下 | 父母 | 山道 | 年月 | 上座 | |
| ジョウゲ | フボ | サンドウ | ネンゲツ | ジョウ | |

(7) 文脈によって読み方が固定しているもの

- 本日の主客^{キヤク}は田中氏だ。主客^{カク}転倒。
 顔色^{カオいろ}が悪いよ。顔色^{ガンシヨク}なし。
 町の市場^{いちば}で買い物をする。
 ヨーロッパ^{シヨウ}の市場に進出する。

以上の(1)～(7)については、音訓のいずれで読むかという点では、まだ語として定着していない段階の外国人学生にはわずらわしいことに違いない。しかし、音か訓かいずれにしても、自分の理解している音訓のとおり1字1字読んでみればいいのだから、まだ納得できるはずである。ところが、「箱^{はこ}」とか「末^{すえ}」とか「組^{ぐみ}」とかは読めても、「本箱」「月末」「番組」を初めから正しく読むことはできないということがある。いわゆる「連濁」によって、濁音化するわけであるが、字音語の場合にも、熟語になった時、音の変わることが多く、外国人学習者の悩みの種になっているので、それらについて少しまとめてみようと思う。

3.3.4.4. 複合語の音変化について

二つの語が結合して複合語となった時、後接語の語頭清音が濁音化する現象を「連濁」と呼んでいる。国語学大辞典では、「現代語における連濁の条件は複雑だが、それでも下記……のごとき傾向性がある程度認められる」⁽²⁴⁾として、下記の語例を挙げて解説している。

- | | |
|----------|------|
| (ア) 抗する | 講ずる |
| 関する | 感ずる |
| (イ) 感謝 | 患者 |
| (ウ) 書いた | 飛んだ |
| (エ) 乱れ咲く | 乱れ咲き |

(オ) 田畑

麦畑

上記 (ウ) は、漢字1字のスル動詞の場合で、語によって「スル」か「ズル」かが決まっている。「ズル」のほうには、一段動詞の「ジル」の形「講じる」「感じる」もある。

(ウ) は、五段動詞で終止形が「～ぬ」「～ぶ」「～む」で終わる動詞の連用中止法にみられる音便によるものである。外国人が、これら「～スル」か「～ズル」か、あるいは、どんな時に撥音便化するのかの決まりを覚えて使えるようになるまでには時間がかかるにしても、それらは仮名書きにされる部分であって、書かれたものを読む分には、表記どおり読んでゆけばよいのだから問題はないはずである。日本語教育の読み書き指導の面で問題になるのは、(イ) (エ) (オ)のように、その語の読み方、発音が漢字の陰に隠れて、表面に出てこない場合である。ここでは、前記語例の(エ) (オ) (字訓語の場合) と、(イ) (字音語の場合) について取り扱うことにする。

(1) 字訓語の場合

(i) 連濁現象

連濁現象がよくみられるのは複合名詞の場合である。この種の連濁は、必ずしも字訓語どうしの組み合わせではないが、一方が字音語であるものより字訓語どうしのほうがずっと多い。また、複合名詞は常に後接語頭清音が濁音化するとは限らないが、一般的にはその傾向が大きいと学生に言っておいてよいだろう。

「日本語初歩」⁽²⁵⁾には、次のような語例がある。

- いりぐち うでどけい うわぎ くさばな こいびと ひらがな
だいどころ てがみ てじな てぶくろ ともだち はいざら
はがき はなしごえ ひづけ ほんばこ ゆうがた

「腕時計、話し声、本箱」以外は、複合していることすら感じさせないほど1語化したものばかりである。

一般に、連濁化しない条件としては、次のようなことが挙げられているが例外も多い。

- (A) 前接語も後接語も共に名詞であり、並列あるいは対等の関係にある場合

○ 山川 草木 親子 上下 天地^{あめつち} 父母 田畑 野原

「山川」は、「山と川」の意の時は「やまかわ」だが、「山にある川」という修飾関係にある時は「やまがわ」になる。けれども「草+木(くさき)」と同じ語構成である「草+花」は、「草につく花、草の花」という修飾関係の意味があるにしても、「草や花」という並列・対等関係の意で使われることも多いのに「くさばな」と連濁化している。形容詞の場合も、意味的に並列・対等関係にある「長細い」は連濁にはならないが、その関係が認められない「かばそい・心ばそい・ほそばそと」などは連濁化している。

- (B) 修飾関係であっても、後接語の第2拍に既に濁音がある場合

- くずかご 紙くず 襟くび 首すじ 粋すじ ざるそば れたば
絵ちず 舌つづみ
- 宝さがし つけとどけ
- 合いかぎ 合わせかがみ 立ちひざ 初たび 大かぜ 赤ひげ
赤はじ 空せじ
- 落ちこぼれる とりこぼす ひきさがる

前接語が上の語例と同じで、後接語の第2拍に濁音が含まれていない場合

は、次のように連濁化しているものが多い。

- くずぎくろ 紙ぶくろ 襟がみ 絵ざら 合わせぎ 立ちばなし
大がね持ち 赤がみ 空ぐるま

形容詞の場合も、後接語の第2拍に既に濁音がある場合は連濁化しない。

- 礼儀ただし 物のさびしい ものしずかな

後接語に濁音がない場合、「さびしい」が「さみしい」という形であれば「ろざみしい」となるし、「もの～」には「ものがなしい」という例もある。

- (c) 前接語が後接語の主格あるいは目的格になる場合。後接語は動詞であるが、複合して転成名詞として使われる。「する」を伴えば「する動詞」として使われるものも多い。

- 雨ふり
- 絵かき 紙きり 足きり 封きり 状さし ごみすて うばすて
物しり 飯たき 魚つり 本たて 貝ひろい 屋根ふき

しかし、同様の語構成で連濁化しているものもかなりある。

- 声がかり 声がわり 人ごみ 日だち 目べり 気ばたらき
- 供ぞろえ 言葉づかい 帯どめ 店びらき 足ぶみ

日がえり 里がえり 気がかり 塩づけ 缶づめ
なども、この類とみてよいかもしれない。

日がわり 口ごたえ 朝だち 門前ばらい 金ぶとり 本ぶり

などは、修飾関係とすれば濁音化するのも当然かとみられよう。

なお「名詞＋動詞」のこの型で、複合動詞形も複合名詞形も併せ持つものがあり、その場合は両者とも連濁化しているようである。

- 目ざめる —— 目ざめ
先ぼそる —— 先ぼそり
- 物がたる —— 物がたり
身がまえる —— 身がまえ
裏ぎる —— 裏ぎり
旅だつ —— 旅だち
泡だつ —— 泡だち
根づく —— 根づき
片づける —— 片づけ
形づくる —— 形づくり
先ばしる —— 先ばしり

(D) 用言どうしの組み合わせによる複合動詞の場合はあまり連濁化しないが、その転成名詞には連濁現象が起こるといわれている。

- 通りかかる —— 通りがかり
分かちかく —— 分かちがき
乱れさく —— 乱れざき
聞きすてる —— 聞きずて
書きそめる —— 書きぞめ
つかみとる —— つかみどり
はきためる —— はきだめ
歩きつかれる —— 歩きづかれ
立ちはたらく —— 立ちばたらき

ただし、転成名詞中でも連濁化しないものもあれば、逆に複合動詞でも連濁化するものもある。

- 持ち帰る —— 持ちかえり
申し込む —— 申しこみ
使い捨てる —— 使いすて
成り立つ —— 成り立ち
書きつける —— 書きつけ
取り計らう —— 取りはからい
- 立ちぎえる —— 立ちぎえ
行きどまる —— 行きどまり

「形容詞＋動詞」の複合動詞の場合も、語例は少ないが連濁化している。

- 若がえる —— 若がえり
遠ざかる 長びく

形容詞が後接語となり、他の語を前接語として複合したものにも連濁現象がみられる。

- 息ぐるしい 胸ぐるしい 聞きぐるしい 見ぐるしい 寝ぐるしい
うすぐらい

しかし、結合部分が促音化して言えるような場合には、連濁現象は起こらない。

- 暑っくるしい・暑くるしい

「愛くるしい」は、2語の結合という意識はなく、「胸が苦しい」のように分けられない語である。

連濁という現象が起こるのは、それが起こり得ないような場合（例えば、名詞の並列・対等関係にあるものとか、後部構成要素の第2拍に濁音が含まれている語のある場合）を除いては、結合の度合に左右されるところがたぶんにあるようである。「間ぢかに 近ちかと 縁どおい 間どおい 待ちどおいしい」に対して、「ほどちかい ほどとおい 人こいしい 母こいしさに」などが、語の熟し方が弱いとは一概に言えないにしても、連濁化する大きな要因は語の熟し方の度合と考えるとよいのではないか。ともかく、例外は見いだせるにしても、複合語の中では、後接頭子音が有声化して濁音となる傾向が高いと言えよう。したがって、学習者には、字訓語の複合語と思われるものは、まず濁音で読んでみるように指示しておいたらどうだろうか。

(ii) 母音交替

字訓語に見られる音の変化のもう一つに、母音交替といわれるものがある。漢字1字の名詞語では「雨」であるのに、それが前部構成要素となつて他の語と複合する際「あま^{あめ}」のように、母音がe→aに交替する現象がある。語形変化の類型の一つに音韻変化があり、その中の母音交替と呼ばれているものである。今日からみれば、「目」は「め」であるが、歴史的にみるなら、元来「ま」であるものが「め」に変わってきたということ、複合語「まなこ」「まぶた」の中にしか見られないというもの、そこに古形を残しているのではないかとする説もある⁽²⁶⁾。

母音交替には、i→oとなるもの

木の葉、木の間、木陰、木立、木の実

o→aとなるもの

白川、白木、白百合、白む

などがあるが、何ととっても一番多いのは、e→aであろう。以下にその例を拾ってみる。

- 雨足 雨傘 雨具 雨靴 雨雲 雨戸 雨宿り 雨よけ
- 天下り 天の川
- 風上 風車 風下 風向き
- 風邪声 ^{かぜ}風邪薬 ×風邪ひき
- 上側 上着 上積み ^{うわて}上手 上乘り 上向き
- ^{いなき}稲置 稲作 稲田 稲穂
- 金切り声 金具 金気 金しばり 金だらい 金物 金山
- 声色 声高 声音
- 酒塩 酒だる 酒場 酒盛り 酒屋 ×酒飲み
- 手ぐる 手綱 手もと
- 舟遊び 船歌 船旅 船賃 船橋 船乗り 舟宿 船酔い
- 苗代
- 胸板 胸毛 胸騒ぎ 胸もと
- 棟木
- 目の辺り 目深に

しかし、語末の母音がe音であっても、それがa音に交替しないものも多くあるから、指導する際には気をつけなければならない。

e 江 重 柄 家 肥 末 笛 前 故 机
ke 毛 池 竹 岳 丈 情 訳 影
se 背 汗 癢 偽 店
te 面 糧 縦 盾 果 腕 筆
ne 音 値 根 姉 鐘 種 常 骨 峰 旨
be 壁 童
me 女 梅 米 豆 娘 嫁
re 彼 我

(2) 字音語の場合

字音語も熟語の中でいろいろと音の変化を起こしている。なぜそんな現象が起こるのかということを説明するよりも、現象面を整理して与えたほうが実際の役に立つだろう。音の変化には、「連声^{れんじょう}」といわれる特別なものと、一般語の中にみられる音変化とがある。

(ア) 連声

漢字2字の熟語で、前部構成要素の第2拍が撥音であり、後部構成要素の第1拍にア行音を含む漢字が続いた場合、「連声」という現象を起こして、今日に至ったものがある。ただ外国人学習者の目に触れる語は限られているだろうから、提出された機会に特別な読み方をするものとして注意させる程度でよいだろう。「国語学大辞典」では、「撥音〔m〕〔n〕促音〔t〕の次にくるア行、ヤ行、ワ行音が、それぞれナ・マ・タ行音に変化する音声同化現象」と説明している⁽²⁷⁾。

〔m〕	三位	サンイ ^(キ) →サンミ
〔n〕	因縁	インエン→インネン
	輪廻	リンエ ^(エ) →リンネ
	天皇	テンオウ ^(ワ) →テンノウ
	感応	カンオウ→カンノウ
	反応	ハンオウ→ハンノウ
	観音	カンオン→カンノン
〔t〕	屈惑	クツワク→クッタク
	仏恩	ブツオン→ブットン

連声は「中世の現象で、今日は自由には行われない」⁽²⁸⁾し、今日では「キ、エ」も使われない。また、「仏恩」は「ブツオン」と読めるし、「屈惑」が登場する機会もまったく無く、現代語では「屈託」と表記される語しかないで

あろうから、外国人学習者には、「天皇」「反応」などが出てきた時、「撥音にア行音が続く場合に、古くから特別な読み方をしていた語が少しある」という程度の説明でよいだろう。

(イ) 字音語の音変化のきまり

字音語の音変化が割合規則的に行われていると見られるものに、次のような音の結び付きがある。

前部構成要素の字音が「ジユウ」か、あるいは、その第2拍の音が「〜キ、〜ク、〜チ、〜ツ、〜ン」であり、後部構成要素の頭子音が「K, S, T, H」の場合

に、前部第2拍音が促音化したり、後部頭子音が有声化したりする傾向が見られるのである。

「ジユウ」を取り上げた理由は次のとおりである。旧仮名遣いで「〜フ」と表記された入声音が前部構成要素となり、「K, S, T, H」の頭子音を持つ後部構成要素が続く場合に促音化するという現象がある。

語 例		当 用	改 訂
十 干	ジフカン→ジッカン	×	○
法 橋	ホフケウ→ホッキョウ	×	○
合 戦	カフセン→カッセン	×	○
早 速	サフソク→サッソク	×	○
入 唐	ニフタウ→ニットウ	×	×
甲 冑	カフチウ→カッチュウ	×	×
法 度	ハフト →ハット	×	○
塔 頭	タフトウ→タッチュウ	×	×
拾 得	ジフトク→ジットク	×	×
納 得	ナフトク→ナットク	×	○
答 拝	タフハイ→タッバイ	×	×

昭和23年2月16日告示の「当用漢字音訓表」には、「～フ」の音が促音として発音される字音は取り上げられてはいなかったが、昭和48年6月18日告示の「当用漢字改訂音訓表」では、前表○印の字音が認められ、それが今日の「常用漢字表」にも引き継がれている。

表中の語で、日本語教科書に提出されるのは「早速」「納得」ぐらいで、その他は普通の日本語教材にはまず出てくる機会がないと思われる。そこで、問題の字音として取り上げられるのは「^{ジュウ}十」ぐらいではないかということになる。「キ、ク、チ」の音については、外山映二氏が次のように述べておられる⁽²⁹⁾。

促音は漢字音の場合、入声音の開音節化した「キ・ク」(喉内入声)「フ」(唇内入声)「チ」(舌内入声)及び開音節化していない入声音 - t が、カサタハ行音に接続する場合に、「各々カッカク」「甲冑カッチュウ」「答拜タッパイ」などと現われる。

この「キ、ク、チ」音のほか、前部構成要素第2拍で問題になるのは「ツ」と「ン」であるので、これらをまとめて取り扱うことにする。なお、次表で、例えば「～ク」の項に「④学」「⑤六」と二つ取り上げてあるのは、数詞は他の一般の漢字とやや異なる音変化を起こすので、両者を対比しながら見てゆきたいと思ったからである。

前部 第2拍	後部頭子音 類	K	S	T	H
ジュウ	① 決	—	—	—	—
	② 十	○	○	○	○
～ キ	③ 石	○	—	—	—
～ ク	④ 学	○	—	—	—
	⑤ 六	○	—	—	○

後部頭子音		K	S	T	H
前部 第2拍	類				
～ チ	⑥ 日	○	○	○	○
	⑦ 一	○	○	○	○
～ ツ	⑧ 鉄	○	○	○	○
～ ン	⑨ 金	—	—	—	○
	⑩ 三	—	—	—	○
		○	○	—	○

上表の数詞以外の漢字は、当該字音を持つ初級段階の漢字を任意に掲げただけである。

【①渋と②十】

現代語音で「ジュー」と発音され、「じゅう」と書かれる漢字には、旧仮名遣いで

「じゅう」と書かれた「充、従、銃、終」

「じう」 “ 「柔、獣」

「じふ」 “ 「十、渋、汁」

「ちゅう」 “ 「住、重、中」

などがあるが、この中で促音化するのは「十」だけである。「じゅう」は、常用漢字表にも「ジッ」の字音が掲げられているので被覆音ではないかもしれないが、漢字だけでは「ジュウ」か「ジッ」かは外国人には分かりにくい。日本語の促音は「十円」(ア行)、「十年」(ナ行)、「十枚」(マ行)、「十羊」(ヤ行)、「十楼」(ラ行)及び濁音の各行の前では現われず、カ、サ、タ、ハ各行に限られる。(但し、片仮名語の場合は異なる。＜3.2.1.2.(3)「促音の読み書き」参照＞)

カ行 十回 十機 十区 十軒 十戸

サ行	<u>十冊</u>	<u>十指</u>	<u>十寸</u>	<u>十錢</u>	<u>十足</u>
タ行	<u>十反</u>	<u>十中</u>	<u>十通</u>	<u>十点</u>	<u>十頭</u>
ハ行	<u>十杯</u>	<u>十匹</u>	<u>十分</u>	<u>十遍</u>	<u>十本</u>

ハ行音の後部頭子音H音はP音に変わることに気をつけさせたい。「じゅう」と同じ仲間の「渋, 汁」には、「渋滞」のように促音化現象は起こらない。このような点からも、数詞には気をつけていきたいと思う。

【③石】

カ行	<u>石灰</u>	<u>石器</u>	<u>石窟</u>	<u>石鹼</u>	<u>石工</u>
サ行	<u>積載</u>	<u>適所</u>		<u>積雪</u>	<u>色素</u>
タ行	<u>石炭</u>	<u>敵地</u>	<u>激痛</u>	<u>歷程</u>	<u>石塔</u>
ハ行	<u>摘発</u>	<u>石筆</u>		<u>積弊</u>	<u>適法</u>

上例のように、後部頭子音が「K」の場合にのみ促音化が起こる。

【④学と⑤六】

カ行	{	<u>学科</u>	<u>学期</u>	<u>学区</u>	<u>学研</u>	<u>学校</u>
		<u>六回</u>	<u>六機</u>	<u>六区</u>	<u>六軒</u>	<u>六戸</u>
サ行	{	<u>国産</u>	<u>学資</u>	<u>国粹</u>	<u>学生</u>	<u>学窓</u>
		<u>六冊</u>	<u>六週</u>	<u>六寸</u>	<u>六千</u>	<u>六足</u>
タ行	{	<u>国体</u>	<u>宅地</u>	<u>腹痛</u>	<u>国鉄</u>	<u>学灯</u>
		<u>六反</u>	<u>六中</u>	<u>六通</u>	<u>六点</u>	<u>六等</u>
ハ行	{	<u>続発</u>	<u>学費</u>	<u>学風</u>	<u>悪弊</u>	<u>国法</u>
		<u>六杯</u>	<u>六匹</u>	<u>六分</u>	<u>六遍</u>	<u>六本</u>

前部構成要素が「〜ク」の場合、一般の語ではどの任意の漢字を選んで、音変化を起こすのはカ行だけであるが、数詞の「六」は、カ行とハ行で音の変化を起こしている。

【⑥日と⑦一】

カ行	日刊	日記	全日空	日経	日光
	一回	一気	一句	一軒	一校
サ行	日参	日食	日数	日赤	(吉相)
	一冊	一矢	一寸	一世	一層
タ行	日体大	(吉兆)	日通	日程	日当
	一端	一致	一通	一点	一等
ハ行	日版	——	——	——	日本
	一杯	一品	一風	一遍	一步

語例の欠けている部分は、仮に該当する語があれば、他の語例からみて促音化することが期待される。「〜チ」に属する漢字は「日」「八」「吉」ぐらいであろう。ただし、「吉」には「キツ」の字音もあり、「キツ」との結合による音の変化とみられないこともないので、一応()をつけておいた。

【⑧鉄】

カ行	鉄管	鉄筋	滑空	鉄血	鉄骨
サ行	活殺	雑誌	出水	鉄石	鉄則
タ行	実態	出張	——	出廷	鉄塔
ハ行	出発	鉄筆	月賦	鉄壁	鉄砲

「〜ツ」の字音は、すべての行にわたって促音化を起こし、かつ、ハ行で

は後部要素にも影響を及ぼし、半濁音化を促す。これに属する漢字は極めて多い。

【⑨金と⑩三】

カ行	(i)	金貨	電気	天空	金券	金庫
	(ii)	三回	三脚	三区	三景	三校
	(iii)	三階	三斤	___	三軒	三国
サ行	(i)	金策	近親	関数	金石	山村
	(ii)	金山	金色	人数	鎮西	___
	(iii)	三冊	三振		三銭	三層
	(iv)	___	三尺	三寸	三千	三足
タ行		人体	人畜	陣痛	金的	人徳
		三反	三鎮	三通	三点	三頭
ハ行	(i)	寒波	鉛筆	寒風	身辺	散歩
	(ii)	三拝	三筆	三分	三辺	三步
	(iii)	三杯	三匹	___	三遍	三百

「千」「万」や同類扱いの「何」も、「三」と同様の音変化をする。

後部構成要素がカ行音で始まる漢字に続く場合、一般の漢字は何の変化も起こさない。数詞の「三」は、(ii)無変化の場合と、(iii)濁音化を促す場合とがある。

後部構成要素がサ行音の場合、一般の漢字も、数詞の「三」も(i)(iii)無変化の場合と、(ii)(iv)濁音化を促す場合とがある。

後部構成要素がタ行音の場合は、数詞の「三」を含めていずれも音の変化を起こしていない。

後部構成要素がハ行音の場合、(i)一般の漢字は半濁音化を促すが、数詞の「三」は、(ii)半濁音化を促すものと、(iii)濁音化を促すものととの二通りの変

化がみられる。

なお、【㊦一】と同じ音の型に属する数詞の「八」については、当然のことながら「一」と全く同じで、後部構成要素のカ、サ、タ、ハ各行にわたって音変化を起こす。特異なのは数詞の「七」である。

カ行	{	七階	七斤	七区	七軒	七校
		<u>八階</u>	<u>八斤</u>	<u>八区</u>	<u>八軒</u>	<u>八校</u>
サ行	{	七冊	七室	七寸	七千	七足
		<u>八冊</u>	<u>八室</u>	<u>八寸</u>	<u>八千</u>	<u>八足</u>
タ行	{	七反		七通	七点	七頭
		<u>八反</u>	——	<u>八通</u>	<u>八点</u>	<u>八頭</u>
ハ行	{	七杯	七品	七福	七遍	七百
		<u>八杯</u>	<u>八品</u>	<u>八福</u>	<u>八遍</u>	<u>八百</u>

同じ音の型であり、アクセントも同じ尾高型であるのに、なぜ「七」だけが異なるのだろうか。想像できるのは、「シチ」の「シ」の母音が無声化しているため、促音化して発音することがむずかしく、また、促音化して言われると聞き取りにくいということがあるのかもしれない。ともかく、母音が無声化しているために「シチ」そのものも聞き取りにくく、「イチ」や「ハチ」との混乱を避けるために、言いやすい字訓の「なな」が頻用されるようになったのであろう。数量に神経を使わなくて済む一般の語については、第1拍の母音が無声化していても、促音化現象は起きている。文脈から意味の判断がつくからであろう。

数詞の「四」についても同様の事情があるのであろうか。「四人」「四時」「四百」「四千」などが、訓の「よ」あるいは「よん」で言いならわされているのには、そんな背景があるのであろう。もちろん、「シ」という音が持つ好ましくないイメージを避ける気持ちが働いていることも否定できないが、「四月」「四面」などの例もあることから、やはり言いにくく、聞き取り

にくい「シヒャク」「シセン」を避けようとする意識があったのであろう。なお、「三階、三千、三百、三泊」と、「サン」の場合は音変化を起こしているのに、「ヨン」にそれがみられないのはどうしてなのだろうか。「サン」は字音で「ヨン」は字訓だからというのは当たらない。字訓である「ナン」が「サン」と同じ変化を起こしているからである。「サン」と「ナン」の撥音は歯茎（鼻）音であるのに、「ヨン」の撥音は口蓋垂鼻音である点に差異が生ずるのであろう。

（ウ） 前後の音に無関係な固定字音

前部構成要素と後部構成要素の音の組み合わせによって、熟語になった時に一定の音変化を起こすものが前項で扱った字音語の音変化であるが、それとは全く次元を異にした音の変化がある。「3.3.4.4. 複合語の音変化について」の冒頭に引用した語例（イ）「感謝・患者」の場合である。

- 万謝 陳謝 深謝 感謝
月謝 代謝 拝謝 報謝 薄謝

上の語例のように、「謝」は「～ン謝」の場合でも、その他の熟語においても「ジャ」と濁音化することはない。一方、「者」のほうは「～ン者」の型でも、それ以外の熟語の中においても、「ジャ」「ジャ」両様ある。したがって、問題は「者」そのものであって、「ジャ」「ジャ」の読み分けを何が決定しているのかということであろう。

- 患者 問者 冠者 信者 隠者 前者
カシジャ カンシジャ カンシジャ シンシジャ インシジャ ゼンシジャ

（アクセントは、「明解アクセント辞典」⁽³⁰⁾による。）

東京語アクセントでは決めてにならないが、京都語アクセントなら説明がつくようである⁽³¹⁾。ただ、アクセントに基づく発音、読み方の違いだとして

も、それは一方が濁音化し、他方が非濁形となって今日に至った理由の貴重な説明にはなるが、外国人に対して字音語を読み分ける判断要素とすることはむずかしいだろう。日本語教育の場では、「謝」は常に「シャ」と読まれ、「者」は「シャ」とも「ジャ」とも読まれることがあるから注意せよとしか言えないのではないか。

これと同様のことは、「^{ニン}人」「^{グイ}大」のように、似たような音を二つ併せ持つ漢字の読み分けの際にも言える。

○ 人家 人口 人災 美人 新人
人形 人間 人足 商人 役人

呉音、漢音に由来する読み分けであるか、意味用法に基づいた読み分けであるのか、仮にそういうことがあったとしても、日本人でさえそういうことを意識しながら読んだり、あるいは語形で読み分けたりしているわけではなく、既に語彙として身についたものであり、習慣的に読み分けているにすぎないのだから、「どんな時にどちらの音で読むのか、規則があったら教えてほしい。」と言われても困る話である。気の毒だけれども、ある意味を表す語の読み方は一つしかないのだから、その都度決まった読み方で覚えてもらうしかないだろう。

以上、外国人学習者を悩ませる漢字の読み方については、例外はあるにしてもある法則性を知れば、それによって発音でき、読めるようになる部分と、語としての理解がなければ、あるいは一つ一つ教わらなければ、読みがつかめないといった部分とがあるということである。学習者の読字力、読語力を伸ばすには、前者の法則性がある部分を、いかに手際よく四捨五入して教え、身につけさせるかということになるだろう。

第4章 表記に関する評価と測定法

(伊藤 芳照)

日本語の読み書きが上達するには、日本語独自の正書法（漢字と仮名による表記の仕方）についての知識と理解が必要である。

「今日は。」か「今日わ。」か

「地面」は「じめん」か「ぢめん」か

「王様」は「おう様」か「おお様」か

といった「現代仮名遣い」についての知識、

「買い物」か「買物」か

「行う」か「行なう」か

といった「送り仮名の付け方」についての知識、

「書き換える」か、「書き変える」か、「書き替える」か

といった「異字同訓」の漢字の用法についての知識などが必要になる。教授者側もこれらの知識を備えていることが当然要求される。それにもかかわらず、日本語教師は文法解釈や語彙の分析には熱心であっても、文字遣いにはあまりとんちゃくしないように思えるがこれは言いすぎであろうか。ともかく、文字能力の測定は、一口に言うならそういった日本語の正書法、現代日本語の表記の基準に従って、いかに読み書きできるかを試すということに尽きるだろう。

文字表記能力の測定には、音声言語を通して行う「聴写、書き取り」と、文字言語による通常の筆記試験と二つの方法がある。前者は、何度も聞き返してあれこれ考える余裕もなく、同音語でも瞬時に意味を判断して選ばなければならない。したがって、聴写、書き取りは、実際的な文字表記能力を試すよい方法であると言えよう。聴写は、L・L・や聴解の授業、テストでも扱われ、測定の対象ともなるのが普通であるが、これを文字表記能力測定の一つとして、文字教育の中で取り扱うことも、特に初歩の段階では利用価値が

高いものと思われる。

文字は常に音声及び語彙という言語要素と深くかかわり合っている。そこで、長短、清濁、促・拗・撥音などについての誤りが、音声上の欠陥によるものか、語彙力の不足によるものなのか、文法事項の未習熟によるものなのかの判断は、軽々にはつけかねるところが多い。段階が進み漢字語彙が増えてくれば、語彙的要素の比重が一層増大する。逆に、音声的要素と語彙的要素の総合的な表出が文字表記能力であるとみることもできるだろう。

日本語の文字表記のことを考える時、仮名、仮名遣い、送り仮名のことや、ローマ字、各種符号についての理解も当然必要なことであるが、教授者と学習者のいずれもが、指導や学習の際に精力を費すのが、漢字についての事柄であろう。したがって、文字という言語要素の測定においても、漢字に対する取り扱いに比重がおかれるのはやむを得ないことである。

一般に言語の学習では大小のテストがつきものになっている。定着度を確かめるために毎日のように繰り返される練習小テスト、週末、月末などに行われる復習テスト、各級の間、終了時に行われる到達度確認のテスト、不特定多数の学習者を対象とした一般公開能力テストなどさまざまである。それらのテストは、程度や目的に応じて測定項目やテストの方法が検討される。ただ、どのようなテストであっても、テストは妥当性と客観性を要求される。恣意的なもの、測定意図の不明確な問題は避けなければならない。更に、測定の結果は評価とどう結び付くのかといったことも、教授者は考えなければならないだろう。以下に、各段階における文字表記テストの測定項目と問題例、その留意点などについて述べる。

4.1. 初級段階の測定項目、問題例、留意点

4.1.1. 仮名

仮名の測定は、単語レベルと文レベルに分けられるだろう。特に発音と文字とのかかわりを見ようとする意図があるような時は、単語レベルの出題形

式がとられ、音声言語を通じて行う聴写の方法によるのが一般的である。また、内容把握を確認するような場合には、文レベルの出題形式になるであろう。入門期段階の文字指導は、平仮名から導入し、一とおり済んだところで片仮名の紹介に移るのが一般的であるが、ここでは便宜上片仮名の問題から入ることにする。

4.1.1.1. 片仮名

片仮名のテストでは、片仮名の字形そのものを問題にすることもあるが、むしろ与えられた語が片仮名語であるという認識を持っているか、平仮名語と区別して書けるかということが主になるようである。

【問題例 1】 つぎの がいこくごを かたかなで かきなさい。

- (a) news

--	--	--	--

 を ききます。
- (b) T. V.

--	--	--	--	--	--

 を みます。
- (c) badminton

--	--	--	--	--	--	--

 をしました。

(注 1) ごく初歩の段階では、字数や拍の取り方が十分に把握されていないことが多い。うろ覚えの当て推量で書かせても、将来的な効果はない。テストとはいえ訓練の延長と考えて、学生が正しく書けるようにヒントを与えた出題のやり方がよいであろう。点がとれたかどうかという成績のことは二の次であって、早く語が定着するようテストの場を通じても図るべきであろう。したがって、

news

--	--	--	--

のような長方形の枠だけでは、学生の記憶を喚起するヒントにはならず、ごく初歩の段階での出題形式としては不適切であろう。更により親切にするなら、

news

--	--	--	--	--	--

とするやり方もある。テスト時に一所懸命に考えたということが、後々の定着をより確かなものにするという効果は得がたいものであると思う。

この段階のテストは、学生の能力を試してその結果を成績原簿に載せると

いったようなものではなく、教師の側からすれば、学習者の学習過程を知って指導上の反省材料とし、学生の側からは訓練テストであって授業の一環なのである。このようなテストの結果、不安定だった語形が定着してくれば目的は達せられるわけである。その意味で学生が答えを書きやすいうように図ってやるのが第一であろう。

- (注2) 外国語(主に英語)の原綴を片仮名に直させるとするのは、あまり感心したやり方ではないと言われる。その原綴に慣れていない学生にとっては気の毒だということもあるし、それを母語としている学生にとっては、自国語の発音の干渉を受けるマイナス面があると考えられる。そういう意味からも、音声言語によるやり方が勧められるのであろう。

【問題例2】 つぎの の なかに かたかなで ことばを かきなさい。

- (a) えんぴつでは かかないで ください。まんねんひつか で かいてください。
- (b) ロンドンは の まちの なまえです。
- (c) デパートの 12かいまで で いきました。
- (d) は ろくおんするのに つかいます。
- (e) しょくどうで オレンジ を 1 ぱい のみました。

- (注1) (a) ボールペン (b) イギリス (c) エレベーター (d) テープレコーダー (e) ジュース と書いてくれることを期待したものである。文脈にふさわしい片仮名語を考えさせることは、読解力と想像力を養成する意味でも悪くはないやり方である。

ところが、学生は教師の単純な期待どおりにはなかなか書いてくれないものである。(a)万年筆や鉛筆ではなく、しかも片仮名語と指定すれば、筆記用具として普遍的な「ボールペン」が当然出てくるものと考えるのは教師の早とちりで、「ペン」でも「サインペン」でも「マジックペン」でも、学生は自分の知っている思いついた語を出してくるから、採点に窮してしまうことになる。教師の方で、「ボールペン」という語形、濁音符や長音符をみようという意図がなく、問題の要求を満たし、文脈に合った語であるなら何でもよいという態度であれば、これでもよいだろう。

【問題例 3】 テープを きいて、その ぶんを ひらがなと かたかなで
かきなさい。

(a)きのうは がっこうの にわで テニスと やきゅうを やりました。

(b)わたしは まいあさ コーヒーと ミルクを のみます。

(注 1) 設問の仕方を改めたほうがよい。日ごろ、このような練習をしていて、学生が慣れているのならかまわないが、このような言い方では、全文を平仮名で書き、次にもう一度片仮名で書くのかと誤解されかねない。

「テープを聞いて、平仮名の言葉は平仮名で書きなさい。また、片仮名の言葉は片仮名で書きなさい。」

と、めんどくでも一つずつ言えば、誤解は避けられるかと思う。

(注 2) この問題例は、文中から片仮名語を選別して書けるかどうかをみるものである。したがって、片仮名語の部分をとえ正しくとも平仮名で書いたような場合は、出題の意図に反するから正解とすることはもちろん、半分点をやるということもできないだろう。

(注 3) このような聴写、書き取りの際の話し方は、やや遅めのスピードでもよいから一続きの文として聞かせ、文節ごとに句切って言わないことである。1語1語の理解ではなく、全文を聞いて意味の把握が速やかに行えるようにさせるためである。平常の授業でもそのような訓練を積み、慣れさせておくことが大切である。

なお、平仮名を片仮名に、逆に片仮名を平仮名に書き換えさせるような練習やテストはやらないほうがよいと言われている。店名などで、片仮名語であるものをわざと平仮名や漢字で書いたものもあるにはあるが、それらは一般的な書き方とは言えない。片仮名平仮名転換練習は、現実の言語生活に反するものである。

また、ます目のとり方は、初歩のうちは拍数や字数どおりの数を設けるのがよいが、少し進んだ段階では、一つか二つ余分のます目をとっておいて、学生にます目を幾つ使ったらよいか考えさせるのもよいだろう。

4.1.1.2. 平仮名

【問題1】 テープが言った言葉を平仮名で書きなさい。

- (a) いす りす こす かい かり かこ
- (b) きる さる えき えさ
- (c) たか なか かた かな
- (d) はし ほし
- (e) まり もり くま くも
- (f) うす るす ろす くう くる くろ
- (g) あし めし こあ こめ
- (h) ねん れん わん かね かれ かわ

(注1) ほかの似たような字形の仮名と読み誤られないように書けるかどうかをみるものである。平仮名学習のごく初期の段階では、このことに注意を向けさせなければならぬだろう。字形や書き癖が固まってしまう前に直しておきたいものである。特に「い、り、こ、て」「う、ら、ろ」などは、ちょっとした間隔のとり方や傾け方で、ほかの仮名と読みまちがえられるので、この指導には十分な配慮が必要である。

タイの学生は、自国文字の影響から、平仮名の「よ」や「ま」を下から上へ書く傾向がある。したがって、「よ」の第1画の点は第2画となる。また、タイ文字の数詞の「一」の意味を表す「๑」の影響からか、平仮名の「の」を二重丸のようにまるめて書くこともあるから注意を要する。

(注2) 字形を問題とする仮名以外の部分は、なるべく同一の仮名でそろえた語例のほうがよいだろう。問題部分が明確になるからである。

(注3) 同じ拍数、同じアクセントの語例でそろえられれば一番いいが、無理なことのほうが多いかもしれない。

(注4) 短い拍の語であるから、未習語があってもかまわないだろう。語として定着しているかとか、発音と文字とのかかわりということではなく、字形そのもののチェックなのだから。この段階では既習語でそろえようとするほうに無理がある。

(注5) 適当な語が見当たらない場合は、無意味語の提出もやむを得ないだろう。

【問題例 2】 テープが言った言葉を平仮名で書きなさい。

- (a) みき みぎ きん ぎん
- (b) ここ ごご ざこ ざご
- (c) まと まど とこ どころ

(注) 清音と濁音を区別して書けるかどうかをみるものである。当該音が前部構成要素になった場合と、後部構成要素になった場合の両方について試すとよいだろう。

【問題例 3】 テープが言った言葉を平仮名で書きなさい。

- (a) おばさん おばあさん
- (b) おじいさん おじさん
- (c) くき くうき
- (d) えき えいき
- (e) かお かおう

(注) ア、イ、ウ、エ、オの各列の長音を、短音と区別して書けるかどうかをみるものである。なお、オ列長音ではないが、長音と同じように発音される「おおい」「とお」と表記される一群がある。これらは別に仮名遣いをみるテストのほうで扱ったらどうだろうか。

【問題例 4】 テープが言った言葉を平仮名で書きなさい。

- (a) いしや いしゃ
- (b) きやく きゃく
- (c) きゅう きゅう
- (d) りょうりつ りょうりつ
- (e) きょう きょう
- (f) びょういん びょういん

(注1) 直音と拗音を区別して書けるかどうかをみるものである。

(注2) まず目の大きい原稿用紙を使うと、拗音や促音表記の小文字を、その前の字と同一ます内にかくことができるから注意させる。

【問題例5】 テープの言った言葉を平仮名で書きなさい。

- (a) $\left\{ \begin{array}{l} \text{せけん} \\ \text{せっけん} \end{array} \right.$ (b) $\left\{ \begin{array}{l} \text{ほす} \\ \text{ほっす} \end{array} \right.$ (c) $\left\{ \begin{array}{l} \text{そと} \\ \text{そっと} \end{array} \right.$ (d) $\left\{ \begin{array}{l} \text{やはり} \\ \text{やっぱり} \end{array} \right.$

(注1) 直音と促音を区別して書けるかどうかをみるものである。

(注2) 平仮名の促音表記は、カ、サ、タ、ハ行の前に現れるほかに、「あっ。」
「ちゃっ。」のような間投詞にもみられるが、この段階ではそこまで触れなくてもよいだろう。

【問題例6】 テープの言った言葉を平仮名で書きなさい。

- (a) $\left\{ \begin{array}{l} \text{はけ} \\ \text{はけん} \end{array} \right.$ (b) $\left\{ \begin{array}{l} \text{さか} \\ \text{さかん} \end{array} \right.$ (c) $\left\{ \begin{array}{l} \text{こな} \\ \text{こんな} \end{array} \right.$ (d) $\left\{ \begin{array}{l} \text{こぶ} \\ \text{こんぶ} \end{array} \right.$ (e) $\left\{ \begin{array}{l} \text{あまり} \\ \text{あんまり} \end{array} \right.$

(注1) 撥音の聴写ができるかどうかをみるものである。

(注2) 語末の「ん」を落としたり、語中の「ん」を「う」と書くことがある。

【問題例7】 テープの言った言葉を平仮名で書きなさい。

- (a) $\left\{ \begin{array}{l} \text{きいと} \quad \text{きのう} \quad \text{きめる} \quad \text{きやく} \quad \text{きり} \\ \text{きく} \quad \text{きし} \quad \text{きた} \quad \text{きほん} \quad \text{きっぷ} \end{array} \right.$
(b) $\left\{ \begin{array}{l} \text{くり} \\ \text{くち} \end{array} \right.$ (c) $\left\{ \begin{array}{l} \text{しお} \\ \text{した} \end{array} \right.$ (d) $\left\{ \begin{array}{l} \text{すえ} \\ \text{すそ} \end{array} \right.$ (e) $\left\{ \begin{array}{l} \text{ちがう} \\ \text{ちから} \end{array} \right.$
(f) $\left\{ \begin{array}{l} \text{つり} \\ \text{つき} \end{array} \right.$ (g) $\left\{ \begin{array}{l} \text{ひだり} \\ \text{ひとり} \end{array} \right.$ (h) $\left\{ \begin{array}{l} \text{ふるい} \\ \text{ふとい} \end{array} \right.$

(注1) 母音が無声化している語の聴写ができるかどうかをみるものである。下側

の語が無声母音の語である。

- (注2) 対として出す普通の語は、平板式、起伏式尾高型、同中高型いずれのアクセントでもよいが、第1拍が低アクセントの語でそろえ、無声化母音の語と条件を同じにするのがよいだろう。

【問題例8】 テープを聞いて、その言葉を平仮名で書きなさい。

- (a) がくせい ぎんか ぐんじん げた ごはん
(b) かがみ かぎ かぐ ひげ たまご

(注) ガ行鼻音の聴写ができるかどうかをみるものである。

【問題例9】 テープを聞いて、その言葉を平仮名で書きなさい。

- (a) おうさま おとうと おとうさん いもうと
(b) おおきい こおり とおい とおか

(注) 音の違いを聞き分けて書くものではなく、現代かなづかいの基準に従って、語を書き分けられるかどうかをみるものである。したがって、文字言語による筆記試験の形でいいわけである。

(例) () の 中に、はんたいの いみの ことば (一くみに なることば) をかきなさい。

[れい] ちかい——(とおい)

- (a) おとうと——()
(b) おにいさん——()
(c) おかあさん——()
(d) ちいさい——()
(e) ここのか——() ——じゅういちにち

(注) 括弧のスペースは、正解語の長さに合わせてるのではなく、どれも同一のスペースにするのがよいだろう。しかし、学生が未習熟と思われる時期なら、やは

り、拍数、字数に合わせたます目にしておいてやるのがいい。

【問題例10】 テープを聞いて、全部の文を平仮名で書きなさい。

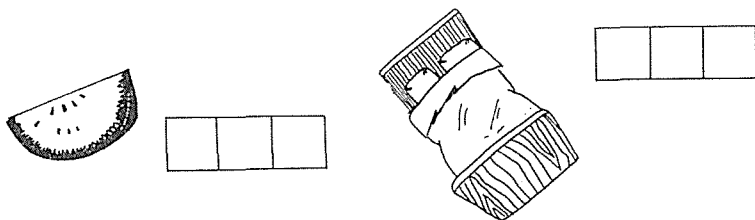
- (a) わたしは はがきを だしに いきます。
- (b) えきへ いって、きっぷを かいます。
- (c) あさ おきて、かおを あらいます。
- (d) しずかに つづいて はいって ください。
- (e) みせで ごはんぢゃわんを じゅうにこ かいしました。

(注) 助詞の「は」「へ」「を」や、いわゆる四つ仮名の「じ・ち」「ず・づ」が区別して書けるかどうかをみるものである。

【問題例11】 えを みて、その なまえ（ことば）を

--	--	--

 の なかに かきなさい。



(注) 平仮名語でも片仮名語でも、語として理解して定着しているかどうかをみるものである。初歩の段階の名詞語には具体的なものが多いから、絵にしやすいだろう。

【問題例12】 a, b, c の どの かきかたが いいですか。いい かきかたに ○を つけなさい。

- (i) $\left\{ \begin{array}{l} a \text{ ゆうびんきやく} \\ b \text{ ゆうびんきょく} \\ c \text{ ゆびんきょく} \end{array} \right\}$ で $\left\{ \begin{array}{l} a \text{ こうくびん} \\ b \text{ こくうびん} \\ c \text{ こうくうびん} \end{array} \right\}$ を だしました。

(注) 片仮名語にも利用できることはもちろんである。

(ii) $\left\{ \begin{array}{l} \text{a} \quad \text{ハンドバグ} \\ \text{b} \quad \text{ハンドバッグ} \\ \text{c} \quad \text{ハンバッグ} \end{array} \right\}$ の なかには おかねと $\left\{ \begin{array}{l} \text{a} \quad \text{ハンドカチフ} \\ \text{b} \quad \text{ハンカチーフ} \\ \text{c} \quad \text{ハンカチ} \end{array} \right\}$
が あります。

(注1) 正しい語形を選択させるものである。これらの語を教えた直後だとまだ定着していないからかえって混乱させるだろうし、また、すっかり定着してからではばかばかしい問題となるだろう。試す時期に気をつけるということであろうか。

(注2) このような選択肢形式は、いろいろな要素をみるテストに利用されている。仮名遣いの理解を試すには、下例のようなものがあるだろう。

(例)

- a きょうは 三月 (とうか・とおか) です。
- b あそこに (がくせえ・がくせい) が 五人 います。
- c (おねいさん・おねえさん) は ことし いくつですか。
- d りんごと みかんを 一つ (ずつ・づつ) ください。
- e この理論に (もとずいて・もとづいて) この分野の研究が (いちじるしく・いちぢるしく) 進展した。〈中級程度〉

音声言語で特定の聴写能力を調べようとする時は、前記【問題例1～9】のように、単語レベルの出題形式になるのが普通である。語は意味を伴うものであり、その意味をもった語をどう正確に表記できるかにポイントがしばられるだろう。表記能力は語彙能力と強く結びついている。とは言っても、初歩の語彙数の乏しい段階では、時には未習語が提出されたり、無意味語が

出てきたりするのには致し方ないことかもしれない。

文字言語を通してのテストの場合、文脈を理解しなければ、適当な語が書けないような出題形式になるだろう。そういった形式の中でも、前記【問題例1～9】のいろいろな要素をみることができる。

(例) ひらがなで かきなさい。

a 三日の つぎは で、七日の つぎは です。

b 五じの まえは です。

c 三月と と 五月は はるです。

d 二百 五百 七百
。

学習が進んだ段階では、語を入れさせる部分の指示は、 枠 でも、
(括弧) でも、下線 でもかまわぬだろうが、それ以前の段階では、
拍数、字数を限定した ます 形式のほうが学習効果上よいことは、既に
触れたとおりである。しかし、そうした配慮をしておいても、学生は教師と
同じ発想をしてくれる者ばかりとは限らない。教室で教えた言葉だから、当
然そのとおりに書いてくれるだろうと教師は期待しがちであるが、学生が言
葉を覚えるのは教室ばかりではないわけで、むしろ、教室外で知り得た言葉
を書いて、教師を驚かせたいというけなげな気持ちさえ持つこともあるもの
である。したがって、「テープレコーダー」と書かせたい時は、

テ テ レ

のように具体的なヒントを加えることになるのだが、これではあまりにも露
骨すぎておもしろ味がない。また、学生の語彙力と、それについての表記力
を完全に知ることにはならない。ヒントになるような具体的な文字を
なるべく使わずに、学生が自らの語彙力と表記力を駆使して書かせるように
したいわけである。けれども、頭のきれる学生ほど一ひねりも二ひねりもし
た答えを書く。以下、その類の例を少し挙げてみるが、出題者の意図した答

えが円滑に出てくるようにするにはどうしたらよいだろうか。お考えいただきたい。

【問題1】 れいのように [] の なかに、かたかなで ちょうど
いい ことばを かきなさい。

(れい) ズボンの [ポケット] の なかに おかねが あります。

a メリーさんは [ピアノ] を ひいて います。 <ギター>

b あの 女の子は あかい [スカート] を はいて います。

<ソックス・サンダル>

c [テープレコーダー] は ろくおんするのに つかいます。

<エルエルスタジオ>

まず目を区切ってさえ、< >内のような言葉が出てくるのだから、
字数指定をしておかなかったら、思いもつかぬ語が出現することがある。

【問題2】 れいのように、[] の 中に ひらがなで かきなさい。

(れい) つぎの [ていりゅうじょ] で バスを おります。

a きょうは どうようびで、あしたは [にちようび] です。<おやすみ>

b わたしは いつも がっこうの [しょくどう] で ひるごはんを た
べます。 <ほしよくしつ、おくじょう>

c 大学の [としょかん] で 本を かりました。

<じむしつ、しょうめいしょ>

d てがみを だしに [ゆうびんきょく] へ いきました。

<しんじゅく、えきのそば>

e あの みせは [ぶんぼうぐ] やです。えんぴつや ノートや けしゴ
ムなどが たくさん あります。 <ぶんぐ、なんでも、よろず>

f しょくじの まえに [せっけん] を つけて、きたない 手を あら
いなさい。 <でんき、ゆわかし>

普遍的な事柄の時はよくよく気をつけないと、思わぬ答えが出てきて足もとをすくわれることになりかねない。事実関係がはっきりしていて、学生たちも周知の事柄であればこういう心配は起こらないだろう。

- a 学校の スポーツ大会で、先生や 友だちと テニス や バドミントン の しあいを しました。

＜他種目は行われなかったから、これ以外は誤りとなる。＞

- b 田中先生と 大山先生は 毎日 じどうしゃ に のって、学校へ きます。
＜自家用車通勤の教師が分かっている。＞

4.1.2. 漢字

4.1.2.1. 筆順・画数に関するもの

日本で行われている標準的な筆順や画数を問うものである。漢字系学生には、当然のことながらこのような問題は無意味かと思われがちである。けれども、母国におけるそれと日本のとの異同を確認させる効果はあるかもしれない。それにしても、画数は漢字辞典で検索する際大いにかかわりがあるので、しっかり認識させておいたほうがいいだろう。漢字系学生は「万」を2画（フ万）と数えることがあり、そういう意味からは筆順も画数も、漢字系学生に無縁のものではないわけである。いずれにしても、試験問題の中に占める「筆順・画数」に関する事項はそれほど大きいものではなく、また、出題時期も初級の前半ぐらいに限られるようである。これは、筆順・画数を軽視しているということではなく、筆順指導は文字教育の最初から上級段階まで、新出字の出されるたびに繰り返し行われる作業である。むしろ、中・上級では既に習慣的に身につけていることが望ましいわけである。

【問題例1】 れいのように、ばんごうの じゅんに 一かくずつ かきなさい。

(れい)

1	2	3
丨	丨	上

a	1	2
		十

b	1	2	3
			小

c	1	2	3	4
				火
				王

d	1	2	3	4	5
					右
					左

【問題例 2】 a, b の どちらの かきかたが いいと おもいますか。

(1)	a	ノ	丩	小
	b	J	丩	

(2)	a	一	女	女
	b	乚	女	

(3)	a	丨	丨丨	丨丨	止
	b	丨	丨	丨丨	

【問題例 3】 ○の 中に なんばんめに かくのか, すうじを かきなさい。



4.1.2.2. 部首や漢字の構成に関するもの

部首や漢字の構成に関する測定は、主として中級段階で試みられているようである。部首について紹介する時、「氵（さんずい）」は水と関係のある事物や意味を表し、「亻（にんべん）」は、主に人の行為に関する事柄を表すとか説明される。その後で、それぞれの部首を持った漢字にはどんなものがある

るかを考えさせるということをやする。この作業は、漢字の意味的なまとまりを理解させる点ではよいだろうが、これを試験の場にまで持ちこんで、「㐀」の漢字を幾つ書けといったようなことを強要するのは、それほど効果があるとは思えない。漢字系学生にとっては雑作もないことであるし、非漢字系学生にとって頭痛の種になるだけである。

中級段階では、漢字辞典の利用の準備として、部首といわれるもの、部首の画数、部首の名称などの知識が必要になってくるであろう。しかし、初級段階では、いわゆる部首も含めて一つ一つの造字成分で組み立てられた塊が漢字というものであって、そこに意味と読みが生まれてくるのだといった認識を持たせることが大切であろう。そのような立場から漢字の知識を試すようなものであれば、部首に関するテストも意味があると思う。

【問題例 4】 (れい) のように、□の 中に かんじを、() の 中に かんじの よみがなを かきなさい。

(れい) a ^(㐀)字と いう かんじは、うかんむりに 「こども」の 「こ」と いう じを かきます。

b 「やま」の したに 「いし」を かくと、^(いわ)岩と いう じに なります。

a ^()□と いう かんじは、左がわも 右がわも 「き」と いう かんじです。

b 「き」を 三つ かくと、^()□と いう じに なります。

c 「おとこ」の かんじは、上が ^()□で 下が ^()□です。

d 「まいにち」の 「まい」に さんずいを つけると、^()□と いう じに なります。

e ^()□は 上に 「たつ」、下に 「ひ (にち)」と いう じを かきます。

f にんべんに 「き」を かくと、^()□むと いう じに なります。

g かたかなの 「た」と いう じを 二つ かくと、^()□い と い

う じに なります。

h 「^{（　）}い」は 「ひ」の 下に 「とお（じゅう）」を かきます。

i 「てら」という じに てへんをつけると 「^{（　）}つ」、ひへんを
けると 「^{（　）}」という かんじに なります。

漢字を書かせるテストでは、漢字の字形を問うことはもちろんであるが、同時に読みも確かめておきたい。漢字の書写能力や読字能力については、それぞれのテストがあるだろうが、それとは別に、前記問題のように、文脈から漢字が思い出せるかどうかということが主目的のテストであっても、やはり書けるには書けたが読めるだろうかということが気になるものである。殊に漢字系学生は、漢字を眺めていれば何となく分かったような気になるらしく、読みをおろそかにしがちである。また、非漢字系学生との合同試験などでも、漢字系学生の優位性を調整する働きもあるであろう。

また、漢字だけ知っていても、読み方ができなければ、その漢字が使えるということにはならない。両者が満足されてはじめて得点に結びつくわけである。採点時に両者の比率をどうするかということはあるだろうが、その辺は出題者の判断にまかされてよいだろう。漢字に読み仮名も添えて書く作業を、特に漢字系学生は大変いというものであるが、それが試験の場で生かされとなれば、学生も渋々ながらもやるようになるだろう。このことを強調するのは、テストで高得点を得させるためというのではなく、そういった作業の積み重ねが、結局は読字力の向上につながるものと思うからである。

4.1.2.3. 多音訓字の読みに関するもの

初級相当漢字、それは使用度の高い基本的なものであると考えられる漢字であるが、その中には幾つもの読みを有する多音訓字がかなりある。常用漢字表に掲げられた読み方以外にも、熟語の中で濁音化、促音化、母音交替を起こすことがある点については、既に触れたとおりである。文脈や熟語によって読み方が変わることに習熟させることが肝要であるが、多音訓字の読字

力を試す問題には次のようなものがある。

【問題例 5】 () の 中 に 漢字の 読みがなを 書きなさい。

- a この クラスには アメリカ^人が ^{一人}と、ちゅうごく^人が ^{二人}と、ヨーロッパの ^人が ^{三人} います。
- b きょうは ^{六月} ^{六日}で、^日よう^日です。
- c あなたの ^{生年月日}は いつですか。
- d そらに まるい ^月が あります。
- e わたしは ^{先月} ^{日本}へ ^来ました。
- f むこうから ^来る 人は タンさんです。
- g アリさんは たぶん ^来ないでしょう。
- h ^{来週}の ^金よう^日に ^{お金}を はらいます。
- i 「^水よう^日」の 「水」は () とも よみます。
- j ^千百^円と ^三千^三百^円で ^四千^四百^円に なります。
- k この くつしたは ^八百^円で その くつは ^九千^六百^円です。

初級では、単語の形ではなく、文中で読ませるようにしたい。多音訓字の複数の読み方を、不自然のないように一つの文にまとめようとするのは案外むずかしいものである。そんな時は無理に同一文中に盛りこまず、短い別の文にしたほうがいだろう。中・上級になれば、文ではなく語句の形で並列し、その読みを考えさせてもよいだろう。

読み仮名を記入させる括弧は、意外にスペースのいるものである。まだ、細かい字を書くのに慣れていないということもあるから、余裕をとって書きやすいようにしてやるとよい。読み仮名を書かせる部分を次のように1字置きぐらいにしておくのも一つの方法である。

この くつしたは ^八百^円で、その くつは ^九千^六百^円です。

【問題例 6】 () の 中 に、漢字の 読みがなを 書きなさい。

- a 水を () 出す。水が () 出る。() 外出する。 七時に () 出発する。
- b 手を () 上に () 上げる。百人以上。() 上着を () 着る。駅に () 着く。
- c 九時 () 五分すぎです。() 十分すぎです。 ねつが 三十七度 () 八分 () ある。() 自分の () へや。
- d () 体の () 重さ。() 体重を () はかる。
- e 料理を () 作る。() 作文する。() 作家。

このように語句の形で並んでいると、学生側も何を試されているのかといったポイントが明瞭になり、かえって思い出しやすくなる という利点はある。

多音訓字の読み方と限定せず、学習したいろいろな漢字の読みを試すテストもごく普通に行われている。この場合にも、出題者は紙幅の効率をよくしようとして、一つの文中に盛りだくさんの漢字を入れようとする。その結果、次の例のように意味的に不自然な現実離れした文章に陥ることがしばしばあるので注意したい。

(例) 青い () ぼうしを かぶって、赤い () セーターを () 着て、白い () くつをはいた () 女の () 先生が、小さい () 男の () 学生と いっしょに () 黒い () 本を () 大きな () 石の () 上に おきました。

4.1.2.4. 送り仮名に関するもの

選択肢で正しい送り仮名の語を選ばせたり、送り仮名を添えて字訓語を書かせたりするやり方がある。

【問題例 7】 a, b, c の 中で、正しい 書き方の 語に ○を つけなさい。

- (i) $\begin{cases} a & \text{生まれる} \\ b & \text{生れる} \\ c & \text{生る} \end{cases}$ (ii) $\begin{cases} a & \text{聞こえる} \\ b & \text{聞える} \\ c & \text{聞る} \end{cases}$
- (iii) $\begin{cases} a & \text{答たえる} \\ b & \text{答える} \\ c & \text{答る} \end{cases}$ (iv) $\begin{cases} a & \text{帰える} \\ b & \text{帰る} \end{cases}$ (v) $\begin{cases} a & \text{走しる} \\ b & \text{走る} \end{cases}$

- (vi) じゅぎょうは 午前 九時に $\begin{cases} a & \text{始じまって,} \\ b & \text{始まって,} \\ c & \text{始って,} \end{cases}$

- 午後 三時に $\begin{cases} a & \text{終わる。} \\ b & \text{終る。} \end{cases}$

- (vii) $\begin{cases} a & \text{短じかい} \\ b & \text{短かい} \\ c & \text{短い} \end{cases}$ (viii) $\begin{cases} a & \text{幼さない} \\ b & \text{幼ない} \\ c & \text{幼い} \end{cases}$ (ix) $\begin{cases} a & \text{危ぶない} \\ b & \text{危ない} \\ c & \text{危い} \end{cases}$

【問題例 8】 (れい) のように ____ の ことばを 漢字と ひらがなで
() の 中に 書きなさい。

(れい) バスが とまりました。 (止まり)

- a 本が ならんで いる。 ()
b 自分で かんがえ なさい。 ()
c かれは いさましい 人です。 ()
d くるし そうな かおを する。 ()
e 山上に 月が あらわれた。 ()
f その ことは 先生から うけたまわり ました。 ()

上の例文中には、中級程度と思われる漢字も含まれている。送り仮名の誤りは、送りすぎより足りない場合のほうが多いようである。一般にいわれる「テ形」の時にそれが顕著である。

- しらはまから家へ帰てから、
- 三階には男の学生が住でいます。
- ごはんを食てから、

また、語幹を同じくする五段と一段との両形ある場合は、五段のほうを送らない傾向があるようだ。

- 遊びが終った時、
- 役割を果すと言えよう。
- 生活の状態も変ってしまったので、
- まだ決っていません。

更に、動詞との複合名詞でも送り仮名は省略する傾向がある。日本人にもよくみられるところである。

- 夏休が終わったのに
- 渋谷へ買物に行く。
- 値打がない。気持が悪い。考方。

4.1.2.5. 反対語・対語に関するもの

反対語や対語の形で覚えるのは、語彙習得上有効な方法だと言われている。語彙力確認の意味も併せて、反対あるいは対の意味をもつ漢字の読み書きをさせることも、漢字のテストではしばしば行われるところである。

【問題例 9】 ____ の ことばの はんたいの かんじを □ の 中に かきなさい。また、その よみがなを () の 中に かきなさい。

(れい) 上 (うえ) ↔ 下 (した)

a 女 () ↔ □ ()

b 手 () ↔ □ ()

c 父 () ↔ □ ()

d 前 () ↔ □ろ ()

e 北 () ↔ □ ()

f 夏 () ↔ □ ()

g 「たくさん」の はんたいの ことばは 「□し」です。

h 「□ない」の はんたいは 「多い」です。

i 「ほそい」の はんたいは 「□い」です。

【問題10】 (れい) のように □の 中に かんじを かきなさい。()
の 中に その よみかたを ひらがなで かきなさい。また、
○○の 中に おくりがなを かきなさい。

(れい) (やす) (たか)
安 い ↔ 高 い ○

a. (よ) () (あ)
□ い ↔ □ ○ ○ げ る ↔ □ ○ ○ ○

b. (つよ) () (ね)
□ い ↔ □ ○ ○ る ↔ □ ○ ○ ○

c. (くら) () (し)
□ い ↔ □ ○ ○ ぬ ↔ □ ○ ○ ○

d. (あつ) () (おほ)
□ い ↔ □ ○ ○ え る ↔ □ ○ ○ ○

(注1) 一つの問題で漢字書写能力、読字力、送り仮名等、総合的な漢字能力を確かめることができる。共通テストなどでは不公平が起こらないように、配点基準をしっかりと決めておかねばならないだろう。

(注2) 送り仮名をどう考えているかもみるものであるから、○の数は1字分ぐらい余計にとっておくとよいだろう。

4.1.2.6. 主として漢字を書かせるもの

これまでの問題例は、読み方や反対語などを提示して、書かせる漢字を指

定したやり方で、設問や出題形式の微細なところでは異なりがあるかもしれないが、広く一般に行われているやり方であろう。学生のほうからみれば受身の解答形式ということになるのだろうか。これに対して、ある文脈で最も適当な漢字は何かを自分で判断して書かせるというやり方もある。学生の積極性を期待する出題形式とも言えるかもしれない。

【問題例12】 どんな かんじが いちばん いいですか。じぶんで かんがえて、□の 中に かきなさい。

- a わたしは 毎朝 コーヒーを □みます。
- b デパートで 食べ物を □ってから、うちへ □ります。
- c としょかんで どんな 本を □みましたか。
- d 東京駅で 電車に □って、新宿駅で 電車を □ります。
- e ねつが あるので、□□へ 行っ て お医者さんに みて もらいま
した。
- f 今日は たいへん □いですね。その上 □い コーヒーを 飲んだ
ので、あせが □ました。

【問題例13】 □の 中に 漢字を 書きなさい。aの 漢字も bの 漢字も同じ 読み方です。しかし、いみや 使い方は ちがいます。

- (i) $\left\{ \begin{array}{l} \text{a 木が □ち並んで いる。} \\ \text{b 家が □ち並んで いる。} \end{array} \right.$
- (ii) $\left\{ \begin{array}{l} \text{a ナイフで パンを □る。} \\ \text{b 急いで 洋服を □る。} \end{array} \right.$
- (iii) $\left\{ \begin{array}{l} \text{a 庭で 小鳥が □いて いる。} \\ \text{b 庭で 子供が □いて いる。} \end{array} \right.$
- (iv) $\left\{ \begin{array}{l} \text{a 日本語の 勉強を □めて、1年 たちました。} \\ \text{b わたしは きのう □めて さしみを 食べました。} \end{array} \right.$

- (v) $\left\{ \begin{array}{l} \text{a} \text{ こわれた テレビを } \square \text{して ください。} \\ \text{b} \text{ 早く 病気を } \square \text{して ください。} \end{array} \right.$

異字同訓の漢字の識字力をみるものであるが、同様に、異字同音の漢字を考えさせることもできる。

【問題例14】 例のように、音読みが同じで意味の異なる漢字を□の中に書きなさい。

(例) このりんごは、うちの農園でできました。一つ百円です。

- a 今日学校で数□と音□を習いました。
- b あの人は□切な人ですし、うそを言わないから□用できます。
- c イギリスの言葉、つまり□語で「水□」のことを何といいますか。
- d 毎日こんだ電□に乗って、会□へ行きます。
- e かれのご□親の□理は、たいへんおいしいですよ。

【問題例15】 (例) のように、□の中に共通の漢字を書き入れなさい。

(例) 運転手が荷物を運んでくれました。

- a 音□を聞くのは□しいことです。
- b 時□がないから、九時の電車には□に合いません。
- c 学校などで□える人を□育者という。
- d □んでいる所の地名や番地を「□所」という。
- e □聞には、□しいニュースがのっている。

初級段階の測定事項と出題形式の大体は以上のとおりであるが、文字テストの配点について少し触れておく。

読み方を問う問題の配点には、二とおりの考え方ができるだろう。

- a $\left(\begin{smallmatrix} \times & \times \\ \times & \times \end{smallmatrix} \right) \left(\begin{smallmatrix} \times & \times \\ \times & \times \end{smallmatrix} \right) \left(\begin{smallmatrix} \times & \times \\ \times & \times \end{smallmatrix} \right) \left(\begin{smallmatrix} \times \\ \times \end{smallmatrix} \right)$ 毎日自動車で学校へ行きます。

b 「毎日」(自動車)で「学校」へ「行」きます。

a は 1 字単位，b は 1 語単位とする考え方である。読みの場合は，個々の字の読み方より語として理解して読んでいるかどうかが問われるはずで，1 字 1 字が間違いのない読み方であっても，語の読みとして不適當であるなら，正しく読めたとは言えまい。「学校」は，1 字 1 字が「がく」「こう」と正しくとも，「学校」という語を理解して読んだことにはならず，「上着」を「うえぎ」「うわき」と書いたのでは，語として読めたことにはならない。「付表」の語については特にそうである。そういう訳で，b の語単位による配点が妥当かということになるだろう。語としての読みを問題にするわけであるから，「自動車」と「行く」とは同一配点になるが，4 字熟語以上の場合は，結合の仕方によって 2 語に分けるとか，配点を倍にするとかの措置は適宜とられるだろう。

漢字を書かせる際の配点は読ませる場合とは異なり，1 字ごとに与えてよいだろう。「危険」を「危険」と書いた場合は，「検」のみを減点とし，「危」は得点に数えるわけである。好ましい書き方ではないかもしれないが，「險」の字を忘れたような時，「危けん」と交ぜ書きにしても語としては誤りとは言えないからである。けれども，この場合も基本的には語を 1 単位として考える立場は変わらないと思う。読ませる場合の最小単位を「がっこう」とするなら，書かせる場合も「学校」が 1 単位となるだろう。ただ，配点の面で例えば「がっこう」と書けば減点は 1 点だが，「学交」は減点を 0.5 とし，0.5 は得点として認めてやるといった扱いの違いになるということである。

4.2. 中・上級の測定項目，問題例，留意点，評価について

出題形式が中・上級になるとがらりと変わるということはないだろうが，測定項目の面では比重の置き方が変わってくるかもしれない。

a 片仮名語に関する項目

- b 仮名遣いに関する項目
- c 送り仮名に関する項目
- d 筆順と画数に関する項目

などの扱いはかなり小さくなり、代わって熟語の構成に関する項目に重点がおかれ、その中での漢字の読み書き、使い方が問われることが多くなるだろうし、類形字の異同も取り上げられよう。また、殊に上級では、文中の誤字を見つけて訂正する作業や、仮名書き文を漢字仮名交じり文に改める作業なども考えられるだろう。

【問題例 1】 下線部の漢字の音読みを、片仮名で（ ）の中に書きなさい。

「往復・腹痛・複雑」の「復・腹・複」の音読みは（ ）である。したがって、これらと同じ造字成分（つくり）を持っている「覆水」は（

）と読めるだろう。ところが注意しなければならないのは、つくりが同じでも必ずしも全部同音というわけではないことである。「煮・煮」は（ ）であるのに、「暑・誼・署」は（ ）であり、「著」は（ ）という音である。更に、もっとひどい場合は、つくりは同一であるのに、音読みは全部異なるという字もある。「時（ ），詩（ ），待（ ），等（ ），特（ ）」などの例もあるから、辞書を引いて確かめることが大切である。

（注 1） 形声文字の理解をみる問題である。

（注 2） 片仮名で書かせるのは、このような機会を利用して片仮名の表記力を確かめると同時に、辞書類で字音は片仮名で表記されている通例に慣れさせる意味もある。

【問題例 2】 □の中に異字同音の漢字を書き入れなさい。

東京は北□35.5度の位置にある。

交通□反で白バイに捕まった。

彼は 3 種目優勝という□業を達成した。

(注) これも形声文字に基づく問題で、類形字の書写力をみるものである。

【問題例 3】 の中に、反対の意味の語を漢字で書きなさい。

(例) 入学する ↔ する。

a 権利 ↔

f 可決する ↔ する

b 需要 ↔

g 清潔だ ↔ だ

c 具体的 ↔

h 平凡だ ↔ だ

d 成功する ↔ する

i 有害だ ↔ だ

e 拡大する ↔ する

j 既婚者 ↔

(注) a～eは普通の反対語、f～jは打ち消し語だが、打ち消しの意を表す漢字が全部異なる。

【問題例 4】 の中に、適当な熟語を入れなさい。

a { 所
 所

b { 場
 場

c { 街
 街

【問題例 5】 ㊤と㊦から1字ずつ選んで、熟語を造りなさい。

㊤ 博 勞 講 注 態 登

㊦ 山 射 度 働 義 士

a b c d

e f

【問題例 6】 次の語句の意味を表す熟語を、 の中に書きなさい。

a 山に登ること =

b 病気がうつること =

c 不注意は失敗のもとになるという戒め = 敵

(注) 以上、問題例1～6は、()を付して読み方も併せて問うことができるのは、初級の場合と同様である。

【問題例7】 下の漢字の訓読みを、送り仮名を添えて線の上に書きなさい。

また、の中に、その漢字を使って適当な熟語を書き、()の中にその読み方を書きなさい。(熟語中の指定の漢字の音読みは、異なることに注意しなさい。)

(例)

生	いきる	<u>生活</u>	(せいかつ)
	うまれる	<u>生涯</u>	(しょうがい)
	はえる		

a 明

{			()
			()

b 省

{			()
			()

【問題例8】 漢字に当たる部分に下線を引き、その下に漢字を書きなさい。

にんげんがしぜんをはかいしたために、こうせいにくいをのこすようなけ
っかをまねいたことは、これにかぎらずいくつでもみいだすことができる。

(注1) 適当な漢字を選んで書けるか、送り仮名を理解しているかをみる。

(注2) 仮名だけの文は読みにくく、意味を誤解することもあるだろう。このようなテストをするのなら、あらかじめ授業中にも練習しておいたほうがいいだろう。また、最初の試みでは、分かち書きにした文から与えたほうがよいかもしれない。

【問題例9】 文中の誤字を、正しい漢字に直しなさい。

専門家の調査によって、危検な地域が除々に明らかになってきた。

(注) 意識的に造られた誤字、例えば「専」「達」などを示すことは、避けたほうがよいだろう。

【問題例10】 () の中に読み方を書きなさい。

- a 優秀な人。友達を勧誘する。透明な水。
b 会場。太陽。熱湯。胃腸。負傷。

(注) 類形字の読み方を問うものである。

文字表記の測定は、つまるところ現代日本語の表記の基準に従って、正しく書けるか、読めるかということに尽きるだろう。読み手が誤解を起こしたり、読みにくかったりしないように、正しい字形、正しい文字遣いができるように教師は日ごろ指導しているわけであるが、それがどの程度理解認識されているのかを試すものであろう。そして、測定の結果は、単に学習者の文字能力の評価に使われるだけではなく、学習者の弱点を指摘する根拠となるし、また、指導上の反省を促す資料としても役立つものとなるだろう。

評価は、普通各日本語教育機関の授業計画や到達目標の基準に照らして行われる。それはそれで、その機関内では一つの意義を持つものと思われるが、一般普遍性に欠ける恨みがある。社会的な普遍性のある各級別の評価を考えていかなければ、共通の場における尺度とはなり得ぬことはもちろんである。だれもが納得のいく各級の範囲を明確にすることはかなりむずかしいことであるが、近時次第にそれも固まってきつつあるようである。そういったことを判断する一つの目安として、1984年から発足した「日本語能力試験」^{〔32〕}の認定基準に掲げられている各級別の学習時間及び文字数、語彙数などの学習量が参考になるかと思う。また、それぞれの字種や語種などの具体的内容については、「外国人留学生の日本語能力の標準と測定(試案)に関する調査研究について」^{〔33〕}の中に掲げられている「標準表」が参考になるであろう。社会的に通用する文字・表記能力の評価ということについても、そういった条件の中で考えていかなければならないということになるだろう。

第3章 外国人学習者に対する表記の指導

- (1) 西田直敏「外国人に対する漢字教育」(1963 日本語教育学会「日本語教育」2号)
岸 陽子「漢字教育 漢字の教え方」(1967 早稲田大学語学教育研究所「講座日本語教育」第3分冊)
寺沢行忠「漢字教育について」(1970 慶応義塾大学国際センター「日本語と日本語教育」第2号)
鈴木真雄「日本語における漢字の学習について」(1970 同上)
北條淳子「初級日本語教科書に提出可能な漢字の分析」(1975「早稲田大学語学教育研究所紀要」14)
安藤淑子・坪井佐奈枝「非漢字系学習者に対する初級前期の漢字指導の一試案」(1975「日本語教育」26号)
北條淳子「『外国学生用日本語教科書初級』における漢字の選択」(1976「講座日本語教育」第12分冊)
石田敏子「漢字学習のプログラム化」(1977「日本語教育」32号)
林 大「文字を書く」(1977「日本語教育」36号)
玉村文郎「書くことの重み——国語教育と日本語教育」(1977 同上)
加藤彰彦「書くことについての問題点」(1977 同上)
別 華 薫「外国人の漢字学習における問題点」(1977 同上)
石田敏子・仲野桂子「漢字の難易度」(1980「日本語教育」42号)
伊藤芳照「予備教育課程の漢字指導」(1981 東京外国語大学附属日本語学校「日本語学校論集」8号)
稲垣滋子・今田滋子・広瀬正宜・田丸淑子・山内みどり「日本語教育における漢字の提出について」(1983 国際基督教大学「Annual Report」Vol. 8)
村上温夫・佐藤純子「日本語教育CAIの将来性に対する私見と入門期の文字教育の一例」(1984「日本語教育」54号)
- (2) 下瀬川慧子「学部留学生の漢字学習についての意識と方法——アンケート調査と座談会から——」(1984「東海大学紀要」第5号)
- (3) 富田隆行「中国語と日本語——中国語と日本語の漢字は同じではない——」(1965「日本語教育」7号)
大村益夫「中国人・朝鮮人に対する漢字語彙教育について」(1965「講座日本語教

育「第1分冊」

野沢素子「中国人に対する日本語教育——漢字語彙を中心にして——」(1970
「日本語と日本語教育」第2号)

文化庁「中国語と対応する漢語」(1978 日本語教育研究資料)

菱沼 透「中国語と日本語の言語干渉——中国人学習者の誤用例——」(1980
「日本語教育」42号)

菱沼 透「漢字対照研究の試み——学、校を含む二字漢語を対象に——」(1981
「早稲田大学語学教育研究所紀要」23)

- (4) 文字・表記教育における指導項目については、次記資料参照。「外国人留学生の日本語能力の標準と測定(試案)に関する調査研究について」(1982 外国人の日本語能力に関する調査研究協力者会議) なお、前記(試案)は、「外国人に対する日本語教育の振興に関する報告集」(1983 文化庁)に収録されている。
- (5) 初級・中級・上級の学習目標及び四技能の学習段階については、日本語教育学会編「日本語教育事典」(1982 大修館書店) pp. 632~640参照。
- (6) 河原崎幹夫・吉川武時・吉岡英幸「教師用日本語教育ハンドブック別冊 教科書解題」(1983 国際交流基金) なお、本書は、その後増補され、「日本語教科書ガイド」(北星堂)として刊行されている。
- (7) 北條淳子「外国学生用日本語教科書初級における漢字の選択」(1976「講座日本語教育」第12分冊)によれば759字。
- (8) 「教科書解題」によれば、「Japanese by the Total Method; Basic Part 1, 2, 3」(1976, 1979, 1980 Noah S. Brannen)の提出漢字数は504字であるが、「Annual Report Vol. 8」p. 36 (ICU 1983)によれば、501字となっている。
- (9) 前掲誌P. 38による。
- (10) 伊藤芳照「予備教育課程の漢字指導」(1981「日本語学校論集」8号)
- (11) 国立国語研究所報告22「現代雑誌九十種の用語用字(2)漢字表」(1962 秀英出版)
- (12) 国立国語研究所報告56「現代新聞の漢字」(1976 秀英出版)
- (13) 野村雅昭「週刊誌の漢字」(1980「現代漢字の研究」文部省科学研究費特定研究(I)「言語」林四郎班(「国語教育効率化のための漢字の記号特性の研究」「文字表現力と音声表現力との関連」)報告
- (14) 注記(10)参照
- (15) 字形の許容については、荒張和子「教師用日本語教育ハンドブック②表記」(1975 国際交流基金) p. 167参照
- (16) 文部省「筆順指導の手びき」(1958 博文堂出版)

- (17) 日本語教育とローマ字については「日本語教育」18号参照（1973）
- (18) 文部省国語調査室編「くりかへし符号の使ひ方」（1946）が一つの基準になっている。
- (19) たまたま目に触れた下側ルビ付きの教材には次のようなものがあった。
 ○Integrated Spoken Japanese（1971 アメリカ・カナダ十一大学連合日本研究センター）
 ○Modern Japanese（1977 水谷 修・水谷信子 The Japan Times）
 ○Newspaper Japanese（1981 水谷 修・水谷信子 The Japan Times）
 ○「日本の放送」（1983 日本語教育学会）但し、同学会で刊行している他の日本事情シリーズのものは上側ルビ。
 ○「日本語表現文型中級ⅠⅡ」（1983 筑波大学日本語教育研究会）
 ○「技術研修のための日本語」（1984 国際協力事業団）
- (20) 辞典A＝「小学館例解学習漢字辞典」（1972）
 B＝「角川漢和中辞典」（1959）
 C＝「諸橋大漢和辞典」縮写版第1刷（1966～1968）
 D＝「学研漢和大辞典」（1978）
 E＝「小学館新解漢字辞典」（1963）
- (21) 文部省「外国人のための漢字辞典」（初版1966，第2版1973 文化庁）
- (22) 漢字熟語の構成，熟語の型の利用とその限界などについては，武部良明「日本語表記法の課題」（1981 三省堂）P. 351「漢字語彙の理解について」に詳しい。
- (23) 「資料『常用漢字』付『人名用漢字』」（筑摩書房「言語生活」1981 No.355）に引用されている野村雅昭「常用漢字の音訓」（1981「計量国語学」第13巻1号）による。
- (24) 国語学会編「国語学大辞典」P. 925「連濁」（1980 東京堂）。なお，日本語教育学会編「日本語教育事典」P. 50（1982 大修館書店）も参照。
- (25) 鈴木 忍・川瀬生郎「日本語初歩」（1981 国際交流基金編 凡人社）
- (26) 「国語学大辞典」P. 417「語形変化の実態」
- (27) 「国語学大辞典」P. 923「連声」
- (28) 「日本国語大辞典」20巻 P. 510「連声」（1976 小学館）
- (29) 外山映二「近代の音韻」（1972「講座国語史2 音韻史・文字史」P. 228 大修館書店）
- (30) 金田一春彦監修「明解アクセント辞典」（1958 三省堂）
- (31) 「国語学大辞典」P. 925

第4章 表記に関する評価と測定法

- 62 「日本語能力試験」この試験は、日本国内および国外において日本語を学習する外国人を対象として日本語能力を測定し、認定することを目的として行うものである。主催者は国際交流基金及び(財)日本国際教育協会。認定基準（4級）150時間、100字、800語程度、（3級）300時間、300字、1,500語程度、（2級）600時間、1,000字、6,000語程度、（1級）900時間、2,000字、10,000語程度。（以上、同試験実施要領から抜粋）
- 63 注記(4)参照。

参 考 文 献

＜この本を読むのに、手もとに置いておきたいもの＞

『新編 現行の国語表記の基準』 文化庁国語課監修 ぎょうせい 昭57.12.10
1,600円

『国語表記実務提要』 文化庁国語課監修 ぎょうせい 加除式 昭52以後

『国語表記実務必携』 文化庁国語課国語研究会編集 ぎょうせい 昭和56. 4. 30
3,000円

『公用文の書き表し方の基準（資料集）』 改訂版 文化庁 昭和61. 9. 30

『地名表記の手引』 教科書研究センター 昭和53. 11

『学術用語集』 文部省 昭和29年～

『新聞用語集』 日本新聞協会 昭和56

各種用字用語辞典

漢字学習書一覧

漢字概論 AN INTRODUCTION TO KANJI 大阪外国語大学

THE FIRST STEP TO KANJI PART 1 "

" PART 2 "

THE SECOND STEP TO KANJI "

外国学生用日本語教科書 初級 漢字 早稲田大学

" 中級 漢字 "

現代日本語漢字練習帳 亜細亜大学

日本語漢字入門（英語版） 国際交流基金

" （韓国語版） "

" （ビルマ語版） "

" （ヒンディー語版） "

" （アラビア語版） "

" （ポルトガル語版） "

" （モンゴル語版） "

" （マレーシア語版） "

日本語初歩漢字練習帳 1 "

" 漢字練習帳 2 "

INTENSIVE SPOKEN JAPANESE

青山スクール・オブ・ジャパニーズ

BOOK 1 & 2 漢字練習帳

実用日本語漢字練習帳

新宿日本語学校

KANJI BOOK VOL. 1

東京日本語学校

" VOL. 2

"

" VOL. 3

"

" VOL. 4

"

" VOL. 5

"

重要性による漢字カード 第1集

"

" 第2集

"

" 第3集

"

KANJI FOR EVERYBODY

ア ル ク

ESSENTIAL KANJI

ウェザヒル出版社

A NEW DICTIONARY OF KANJI USAGE

学 習 研 究 社

KANJI AND KANA PRACTICE BOOK 1

エンデルレ書店

" PRACTICE BOOK 2

"

" PRACTICE BOOK 3

"

KANJI FINDER INDEX

開 拓 社

日常生活の漢字 I

講談社インターナショナル

A GUIDE TO READING & WRITING

チャールズ・イー・タトル出版

JAPANESE

KANJI AND KANA

"

READ JAPANESE TODAY

"

にっぽんご 7 漢字

む ぎ 書 房

よく使われる新聞の漢字と熟語

凡 人 社

よくわかる常用漢字

"

REMEMBERING THE KANJI I

日本出版貿易

" II

"

KANJI KANJI

THE EAST

常用漢字 2120 CARCTÈRES

日 仏 会 館

2001漢字

INSTITUTE OF JAPANESE STUDIES

くもん式の漢字おけいこ

く も ん 出 版

くもん式の漢字カード (全2巻)

"

くもん式の新大判漢字カード (全3巻)

"

くもん式の漢字カード絵本 (全7巻)

"

日本語教育指導参考書 14

文字・表記の教育

昭和63年3月25日 発行

編集・発行

国立国語研究所
東京都北区西が丘 3-9-14
TEL 03(900) 3111

印刷者

大蔵省印刷局
東京都港区虎ノ門2-2-4
電話 (03) 587-4283~9
(業務部図書課ダイヤルイン)
